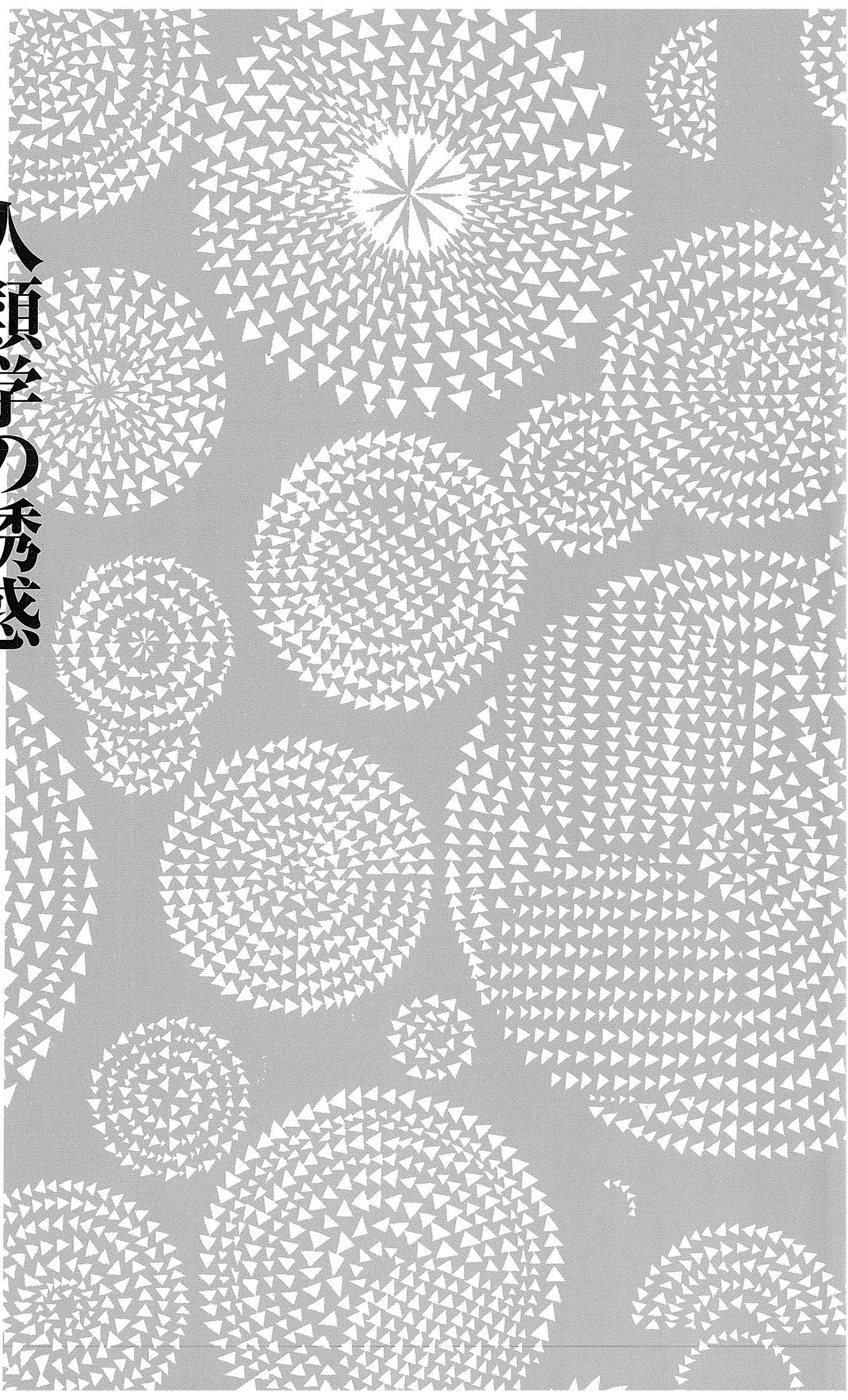


# 人類学の誘惑

京都大学人文科学研究所社会人類学部門の五〇年

# 人類学の誘惑

京都大学人文科学研究所社会人類学部門の五〇年



# 人類学の誘惑

京都大学人文科学研究所社会人類学部門の五〇年

## 目次

|                              |            |    |
|------------------------------|------------|----|
| 巻頭のことば——社会人類学部門創設五〇年によせて     | 谷 泰        | 4  |
| 歴代所員                         |            |    |
| 若手養成機関なき三三年                  | 谷 泰        | 7  |
| 梅棹研究室・一九六五〜七一年               | 石毛直道       | 12 |
| 見果てぬ夢を——京都大学人文科学研究所と探検部      | 松原正毅       | 17 |
| 共同研究班                        |            |    |
| 今西研究班と照葉樹林文化論                | 佐々木高明      | 22 |
| 京都大学アフリカ研究の礎——人文科学研究所時代      | 端 信行       | 24 |
| ユーラシア遠征の旅                    | 阪本寧男       | 26 |
| コミュニケーション論通史                 | 菅原和孝       | 28 |
| 外国人研究員                       |            |    |
| 変わらぬ「やり方と思い」                 | マッシモ・ラヴェツリ | 30 |
| 歴代所員                         |            |    |
| 伝統のリズムにのつて——一九九〇年以後の共同研究のあゆみ | 田中雅一       | 32 |
| 人類学と地域研究——人文研で学んだこと          | 田辺明生       | 39 |
| 転換期の「知的生産者たちの現場」の目撃者——当事者として | 小牧幸代       | 42 |

共同研究班

民族誌記述の転換点に立ち会う 吉田憲司 ..... 44

生の土台につながる対抗知を養う場 青木恵理子 ..... 46

「植民地主義と人類学」研究班のこと 山路勝彦 ..... 50

外国人研究員

晴「行」雨読の日々——人文研と修学院の八ヶ月 テイモシー・ツイ ..... 52

人文研の懐の深さ サビーネ・フリーユ・シュテック ..... 54

創設五〇周年記念シンポジウム ..... 56

京都から考える——京大人類学の二つのオリジン 菊地 暁 ..... 58

辺境から考える——知識共有の手段としてのエクスペディション 飯田 卓 ..... 65

身体から考える 佐藤知久 ..... 70

専門を横断して考える 河合香吏 ..... 74

コメント・総合討論 司会・田中雅一・田辺明生 ..... 78

人文科学研究所社会人類学部門年表 ..... 88

あとがき ..... 90

コラム 記録をたどる

ボナペ島学術調査「1941年」 ..... 31

内蒙古調査「1938〜46年」 ..... 49

「近衛ロンド」今西錦司講演メモ「1965年」 ..... 53

日本人類学会・日本民族学会連合大会「1951年」 ..... 61

カラコラム・ヒンズークシ学術探検「1955年」 ..... 62

アフリカ（類人猿）学術調査「1961〜68年」 ..... 63

ヨーロッパ学術調査「1967〜72年」 ..... 64

## 巻頭のことば——社会人類学部門創設五〇年によせて

谷 泰

京都大学人文科学研究所に社会人類学部門が創設されて五〇年、それを記念すべく、かつてこの部門の活動に関わった方々に依頼し、その記憶のよすがとなることも書き留めた文集を編むことになりました。そして、その切り出しとして、かつて当部門に籍を置いたひとりとして、巻頭のことばを記せということになったのですが、わたしはそれを、記憶装置と同時代的情報のあり方に関する二つのトピックからはじめたいと思います。

その最初のトピックとは、およそ人類学とは縁遠いガリレオ、それも月の表面に凸凹があることに加え、木星の周囲を回る衛星の存在を明らかにした書物『星界の報告』に関するものです。彼はその書の冒頭を、当時彼の庇護者であったメディチ家のコジモ二世への献辞にあてていますが、そこで彼は次のように言っています。偉大かつ高徳な人の名声を永遠に残すのに、長く破壊され、消滅することのない巨大な石の建造物や都市にその人の名を冠する方法があります。ただそれらは、いかに強固に建造されていても、敵の攻撃や天災によって破壊され、無に帰することを免れない。そこでわたしは、破壊しようとしても、誰の手も届かぬ天体、今回私が発見した木星の衛星をコジモ星と呼ぶことで、高潔なる閣下の名声が、永遠に人々の記憶に残されることにしました、と。

じつはこの献辞を読んだとき、西方には、世代を超えて持続する建造物に名を冠することで、その記憶を後世に伝える方途があるが、彼の天体に名を留める措置が、こういう方法の最たるものだという感慨をもったと同時に、こういう方法で人事的出来事の記憶を残すことで、遠い未来の人々にまで、いまの出来事に関与

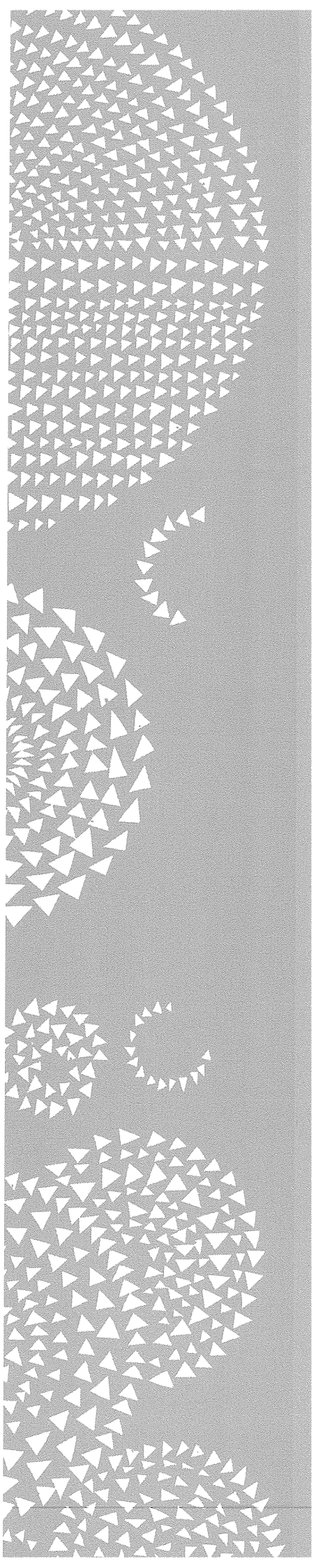
的なものにさせようというその執念に、一種のおののきに近いものを感じたのを記憶しています。

もちろん、こういう機能をもたらすのに、記憶刻印媒体がかならず天体や、都市である必要はありません。モノという、人の死を超えて存続し続ける物質的な刻印媒体であれば、文字記録であれ、画像であれ、それらはほんの束の間の時間的持続しかもたない人事的出来事情報を、それらを目撃した人々の生の延長を超えて、後代にまで担保し続けることができる。かつてわたしが所属した学部の研究室の壁には、歴代の教授の肖像が掲げてあり、今は亡きこれらの人々が、わたしたちをいかめしく見下ろしていたのでした。今こういう出来事情報を後代に残す方途を、モノに託した記憶装置ということにして、今回社会人類学部門創設五〇周年を記念して、先輩たちに過去の出来事を記してもらったこの文集もまた、この種の記憶装置だと言えるでしょう。

ところで、この種の記憶装置と対比的なもう一つの記憶装置として、トピックとしては文化人類学的ともいえる、つぎのような事例を挙げることができます。それは、東アフリカやオセアニアの民族誌的事実、生まれた子供への名づけの方法ですが、ある子供が生れ、名を与えるに際し、その時点に起こった、たとえば大きなレイディングがあったとか、大飢饉で父親が死んだという出来事にちなんで、まさにそういう出来事記述を含んだ名を与えるというものです。もちろんそれだけのことを言ったのでは、それまでのことですが、こういう命名法のもとでは、たとえばどうしてお前は、また彼はしかしかの名をもっているのかと尋ねられた時、実はしかしかのが起こったからだと言明する手がかりがその名に託されているために、こういう方法でも過去の出来事情報が次世代に伝えられることになる。しかも同時代的にいえば、人々は、こういうさまざまな出来事情報を担った年齢を異にする諸個人を順に見渡すことで、一種の年代記的出来事を眼前にしうることになるのです。

いまこういう方法を、さきのモノに託した記憶装置系と対比するとき、その情報のあり方に明らかな差異が生じます。というのも、この方法での出来事情報の仮託媒体は、まさにやがては死すべき個人的身体です。そのためこの記憶仮託媒体は、その人の死とともに、もはや呼ばれることのない無へと帰す。そしてその無化とともに、その個体に仮託された出来事情報も、想起されうる手掛かりを失い、やがては薄明のもと、集合的な神話的世界に送り込まれて消え去ってゆくのです。もちろん人々はたんに消えてゆくだけでない。新たな生の誕生とともに常に共同体のメンバーは補充されます。そして彼らが、その誕生時に起こった出来事情報を担ったものとして、この記憶装置系の情報を補充するために、情報の新陳代謝が起こる。今こういう事態を、記憶装置系内部での情報の時間幅という側面から記述すると、新生子の担う（いま）の出来事情報を起点とし、同時に長寿を全うして死にゆく人々の担った一定の（過去）の出来事情報を終点としており、同時代的情報を詰め込んだ、両切りのたばこの筒のようなものが、時の移行とともに移動し、先端部では補充を、後頭部では消去を繰り返して、内容を変えてゆく姿が見えてきます。

そして、こういう出来事情報の記憶装置系を、モノに託するものと対比して、人の身体に託した記憶装置系と呼ぶことにすると、実は同じことが、わたしたちいずれの共同体でも起こっていることに気付きます。わ



たしたちは、脳という身体的記憶装置をつうじて、個々人の周囲で起こった出来事を蓄積する記憶媒体です。そしてそういう諸個人の集合からなるものとして、一定の同時代的出来事情報を共有することになっているのですが、そこでも誕生と死との繰り返しを通じて、出来事情報の補充と消去が繰り返されているのです。

こうしてわたしは、モノに託した記憶装置と身体に託した記憶装置という二つの装置系を示したのですが、もちろんその前者では、生命的延長を超えた過去の情報が維持され、還流するだけに、過去の知恵が引き継がれると同時に、人々は過去の重荷を引きずることになる。他方後者では、過去の知恵が失われるにしても、その時々を生きるものの過去にとられぬ創発的な再出発が可能になる。

いったいどちらがよいかはさておき、今や文字による記憶装置系をもつわれわれは、この二つの記憶装置系を適宜使い分けて、過去情報をとときには維持し、ときには消滅にまかせているのが実情でしょう。しかも、ここでの過去情報の還流を許し、どの情報を忘却の淵に消去するかは、未来に向けて〈いま〉を生きる新たな世代の決断でしょう。しかもマクロに見れば、ある限られた時間的延長幅をもつて生死を繰り返し、個体のこさねの連なりとして存続する種的生命社会の維持も、生死の繰り返しを通じた身体情報の新陳代謝、出直しの可能性のもと、外部環境の変化に応じた新たな世代の対応で実現されている。とすれば、過去情報をそれなりの判断で許容しつつ、他方でそれを消去し、現在に対処することは、若い世代の権利であり、義務であるといつてよい。

振り返ってみるとき、当社会人類学部門の活動内容ばかりか、広く日本および世界の人類学も、時代とともに大きく変わっています。そして今回、当部門の過去五〇年にわたる出来事情報を記録する文集を、新たな世代の人々のために残すことになったわけですが、どこまでもそれは、〈いま〉を担う人々の自己の位置確認の手がかりとしてあるに過ぎず、過去を超えた新たな跳躍は、つねに今の世代を生きる人のもとにあると言うべきでしょう。

## 若手養成機関なき二二三年

たにゆたか  
谷 泰

京都大学名誉教授

第二次世界大戦での日本の敗戦からほどなく、東京大学では文化人類学講座が開設された。それには、京都大学で、今西錦司を初代の教授とした社会人類学の部門が人文科学研究所に創設されたのは、一九五九年になつてからのことだ。もちろん京都大学では、戦前から今西を中心にボナベ島、北部大興安嶺、内蒙古での学術調査がなされていた。戦後も一九五五年のカラコラムをはじめ、一九五八年には今西がアフリカで霊長類研究を開始している。そして今西の周囲には、中尾佐助、梅棹忠夫、川喜田二郎、岩田慶治など民族学的関心のもと、ネパールや東南アジアでフィールド調査を開始した中堅が育つていた。ただこれらは制度的な講座の枠組みの外で結集した、人的結合にもとづくものであった。そのため京都大学でも人類学の講座設立が切に望まれたのは当然の成り行きだった。

それにしても民族学ないし人類学の講座を学内のどこに開設するかは、大学当局、そして学内全体にかかわる問題である。確かに人文科学研究所には今西を中心に活発な調査隊が組織され、その実力は社会的に認知されていた。ただ文学部には、社会学出身の棚瀬襄爾をはじめ、戦前でのオセアニア研究の実績があり、講座は文学部という根強い動きがあった。こうして二種の綱引きのなかで、付置研究所の人文研に社会人類学の拠点が設立されたことは、京都大学の人類学研究の展開に長く陰に影をおとすことになった。

おまけに、大学付置機関としての人文科学研究所は、その設立当初より、若手養成のための教育は学部任せ、ここでは個人研究のほかは、もっぱら内外の研究者を糾合して共同研究に専念すべしという原則のもとで運営されていた。その東洋部、日本部、西洋部での既存の諸部門の大概は、それに対応する学部、大学院という若手養成機関を学部にもつており、大学院博士課程以上の若手を補充することができた。ところが先の綱引きの事情で、学部での若手を養成する人類学関係の講座を欠くという条件のもと、人文研の社会人類学部門は、共同研究を組織する上でも、人類学志望の若手を養成する上でも、現在の京都大学で人類学を志向する人々には、およそ想像できない条件下にあったといつてよい。

## 今西時代

人文研に人類学関係の部門を開設するにあたり、その部門名を文化人類学にするか、社会人類学にするかは、とうぜん設立時の今西にも考慮されるべき問題であった。そこで一体なぜ社会人類学としたのか。もちろん彼がイギリスを中心とした社会人類学を知らなかったわけではない。ただ霊長類学者としての今西には、霊長類の進化というパースペクティブのもとで人類社会の成立を見通すという関心があり、そういう見通しのもとで社会人類学を選んだことは、彼自身ののちの言葉として聞き及んでいる。

ともあれ今西はこうして、一方で理学部の動物学出身者を従え、アフリカでの霊長類調査を推進するかた



今西錦司(一九〇二—一九九二)



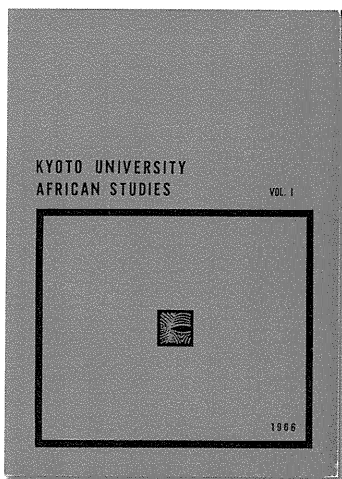
わら、人文科学研究所の社会人類学部門主任として共同研究と人類学的調査を組織・展開することになる。そこで今西が最初に組織した共同研究班は、「人類の比較社会学的研究」というもので、当時すでに発表されていた梅棹の「文明の生態史観」を片方におきつつ、人類の文明史を、その発展類型とその発展段階として記述する試みであった。この共同研究班の参加者を、当時の専門とともに示すと、上山春平（哲学）、中尾佐助（栽培植物起源学）、川喜田二郎（地理学）、吉良竜夫（植物生態学）、岩田慶治（地理学）、飯沼二郎（農学）、梅棹忠夫（動物学、文明学）、藤岡喜愛（精神人類学）、和崎洋（地球物理学）、佐々木高明（地理学）、米山俊直（農業経済学）、谷泰（西洋史学）、石毛直道（考古学）などとなる。いかにもさまざまな人類学外の専門領域を背景にもった人々が参加しており、そこでやがて関西での人類学を担うことになった第二、第三世代の人々が育ったかが伺える。

しかもこの共同研究は、それぞれの班員が自分の専門領域で手掛けたテーマに沿って、その成果を披露するといった近頃はやりの共同研究と違い、新しい共通課題のもと、新たな概念や新解釈を率直に出しあつて、それらを検討、共有財産として敷衍して、新たな認識枠を構築するものであった。ただそうであるだけに、この種の共同研究では、たとえ共同性が高くとも、だれがこのアイデアを最初に出したかといった著作権の希薄化をはらむ。そして、そのアイデアのひとり歩きをまなへに、自分の新見解を出し惜しむという共同研究固有の危険性を内包する。そのために、共同研究の討論は毎回すべてテープにとられ、次回の研究会に、だれがしかしかのアイデアを出したかを記録した全トランスクリプトが配布されることになった。この作業がいかに大変なものだったか。当時の助手たちは今でもその苦勞を記憶している。

ともあれこの共同研究会は、きわめて大風呂敷、つねに喧々諤々な議論が交わされたのだったが、生態学的な視点が基礎にあつた。そしてこの共同研究で発表されたとりわけ注目すべき成果としては、中尾佐助の栽培植物起源論（『栽培植物と農耕の起源』岩波新書）を挙げることで、彼は、固有な稲作起源論、オセアニアの根葉文化論、そして照葉樹林文化論を展開した。そしてこれが、佐々木高明の照葉樹林文化論、日本の農耕文化の系統・起源論を促すだけでなく、日本民族学会での日本文化系統論に関与する人々、農学や遺伝学分野でアジアの農耕起源を問題とする人々にも大きな刺激を与えることになった。

他方、共同研究会の主催と並行して、今西は本格的にアフリカへのフィールド調査をおこなう調査隊を組織し、富川盛道、和崎、米山、石毛、和田正平、福井勝義、端信行というアフリカ研究者が生まれている。そのさい今西は、隊の組織母体として、講座的背景をおよそもたない、ひとつの学内クラブ「京都大学アフリカ研究会(KUARRA)」を立ち上げている。そして旧人文研の裏の空き地に、プレハブづくりのアフリカ研究会オフィスを構えたが、私的組織による公的土地の使用として所内での批判もないわけではなかった。それを強引に認めさせた背景に、今西の腕力に加えて、同僚桑原武夫の支援があつた。また、そこでの成果を発表する機関誌として、欧文の *Kyoto University African Studies* を発刊し、京都大学アフリカ地域研究センター（現在のアジア・アフリカ地域研究科のアフリカ部門）がやがて設立される土台を作った。

ところで、社会人類学部門が開設されたのは、今西が定年を迎えるわずか六年まえのこと、一九六五年、



Kyoto University African Studies 一九六六年



京都大学アフリカ研究会のプレハブづくりのオフィス内

梅棹忠夫がその後を継ぐことになる。梅棹は、終戦前、今西が所長であった中国・張家口の西北研究所のスタッフとして内蒙古の牧民の調査をおこない、その成果をのちにも意味をもつ論文として発表していた。また、一九五五年には京都大学の木原均が率いるカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊に参加し、そのときの旅行経験をもとに、壮大な〈文明の生態史観〉を公にして、論壇に大きな反響をもたらしていた。こういうことが、退官する今西が梅棹を後任に選んだ背景にあったといつてよいだろう。

## 梅棹時代

梅棹が人文研の社会人類学の責任者となつて組織した共同研究班には、そのメンバーの一部として今西時代の班員が引き継がれているものの、そこには梅棹時代に助手となつた石毛、松原正毅、野村雅一をはじめ、多くの若手が参加することになった。

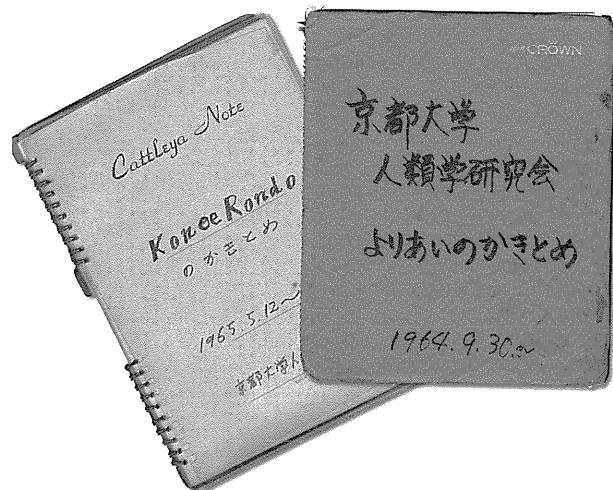
もちろん人類学関係の若手養成機関のない京都大学で、このような若手がどうして養成されたか。それには、一九五六年に発足していた京都大学探検部というものがあつたことも重要である。しかしそれに加えて梅棹は、はやくから人類学をはじめフィールド調査に関心のある若手学生の集まりを、自宅を開放して催しており、それを土台に大学の枠を超えて、参加者が成果を発表する人類学セミナーを〈近衛ロンド〉という名のもとで立ち上げた。そしてこのセミナーに集つた多くの若手が、彼の共同研究班を支えることになった。

梅棹が組織した共同研究班には〈文明の比較社会人類学的研究〉、〈理論人類学研究〉といったものがある。ちなみに当時の人文研の研究班は、原則として三年を単位としており、終了後に共同研究報告を書物として刊行することを義務としていた。ただ、さまざまな地域を対象に、さまざまな関心をもつ人類学者が参集する研究班で、焦点の定まつた特殊研究成果を刊行することは困難であつた。梅棹は、こうして共同研究班は組織したうえで、その成果報告書の刊行義務はさておき、若手の個々の成果を発表する雑誌を作り、それを維持することに精力を注いだ。それが一九七〇年に創刊された『季刊人類学』というものである。当時、民族学、文化人類学研究の成果を発表する場に、日本民族学会の『民族学研究』しかなかった時代、この雑誌がいかにか京都の若手研究者の成果発表の場として役立ったことか。

こうして、京都で文化人類学を志望する田辺繁治、野村、山本紀夫、江口久、吉田集面をはじめ、多くの若手が梅棹のもとに集まることになるが、一九七〇年の万博の企画に参画していた梅棹は、そこでの仮面蒐集の責任を引きうけ、若手を海外蒐集のために派遣している。そして、この万博の跡地利用として記念的建造物をのこすという趣旨での、民族学博物館設立プランが民族学会の要望として提起されたとき、彼はその設立推進者の中心人物として立ち働くことになる。彼の教授時代の後半のエネルギイは、こうして、国立民族学博物館創立のために尽くされたといつてよい。

なお、梅棹時代、人文研西洋部で、ヨーロッパの人々を、他の人々と同等、ひとつのネイティブとし調査するという視点で、ヨーロッパ学術調査隊というものが組織された。そこに梅棹をはじめ、藤岡、谷、松原、野村が参加し、谷および松原の牧民研究がそこで本格的に開始されている。

「近衛ロンド」のかきとめ



『季刊人類学』刊行案内、一九七〇年

# 季刊人類学

0-1 1970

### 刊行のご案内

発行所  
編集委員  
編集長  
発行所  
〒606 京都府京都市西京区  
野村  
編集方針  
投稿者へ  
購読方法  
社会思想社

こうして、一九七四年民博が創設されると、梅棹館長のもと、佐々木、石毛、松原をはじめ、人文研の梅棹のもとに集まっていた多くの人類学の中堅と若手が、大挙して民博に移ることになる。ただ民博ができたからとて、京都大学の若手養成機関の欠如が解消するわけではない。梅棹がそこで、谷を人文研の社会人類学の助教授として推し、当時教養部で文化人類学を担当していた米山とともに、京都での人類学を維持することを託したのであった。

## 谷時代

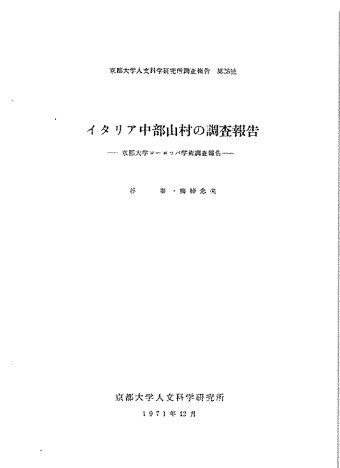
一九七四年、谷が社会人類学部門を引き継いだときに、そこに見いだしたのは、大挙して若手が民博に移動したあとの一種の空白状態であった。ちなみにこの時期のことに関連し、谷が人文研を退いたときに松原が言った、「いや、あのころ僕は、人文の人類学が消えてしまうのではないかと思った」という言葉が想い出される。人文研の西洋部のスタッフの大半は西洋学研究者からなり、人類学に十分の理解があったとはいえない世界であった。そこで西洋学出身の谷が、若手養成をはじめ、いかに人類学としての存在を維持し続けるかに松原は危惧をもったのにちがいない。もちろん谷は、そういう危惧を知る由もない。谷は、一方で米山とともに、梅棹が残した若手養成組織である人類学セミナー（近衛ロンド）を維持し、『季刊人類学』の発刊を続けると同時に、共同研究班を組織し、かつ海外調査を組織することにとめることになった。

谷が初期に組織した研究班は、〈社会と文化の比較人類学的研究〉、〈人類学における方法論的研究〉、〈社会編成の比較人類学的研究〉など、きわめて一般的なテーマを冠したものであった。これもおもに先の自主的人類学セミナーに集った、社会学、地理学、言語学など、さまざまな学科出身で人類学を目指す若手大学院生が参加できる土俵を用意するためのものであり、当時採用した助手松井健とともにその維持につとめた。こうして、ときに学部の教官から白い目で見られながらも、松田素二（社会学）、栗本英世（社会学）、末原達郎（農業経済学）、梶茂樹（言語学）、細川弘明（言語学）、吉田憲司（美学）、西井涼子、棚瀬慈郎（ともに社会学）といった人々が、これらの研究班に参加しつつ、人類学者となっていた。

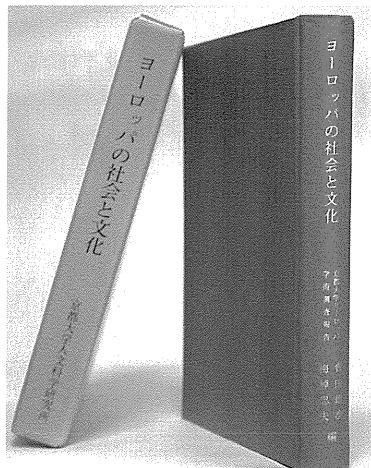
ところで谷は、人文研西洋部のヨーロッパ調査隊への参加を契機に、地中海地域の牧民調査を本格的に開始していた。そして牧畜の表象にみちたユダヤ・キリスト教的思考枠の背景を明かしたいという関心を抱いていた。こうして文部省の海外科学研究費補助金で牧民調査をおこなうことにしたが、そのとき、西アジアでの栽培植物の起源と伝播論の専門家、阪本寧男が共同調査を申し立てた。こうして一九七七年以後、谷は、阪本、松井をふくめて、アフガニスタンをはじめ西アジアを中心に、栽培植物と牧畜という二つの生業文化について「ユーラシア西南部有畜農耕社会の比較文化研究」という調査を三次にわたっておこなう。そして阪本がそれを南アジアを中心に引き継ぐことになった。

他方、谷はイタリア中部での調査以来、古典的な民族誌記述に違和感を感じ、フィールドの生活の現場で交わされる人々の相互行為的事実から、社会的事実がいかに生成されているかを記述する方法論に関心をよく抱きはじめていた。そのため、まず『文化を読む』（人文書院、一九九二）という成果を生む共同研究班（民

「イタリア中部山村の調査報告」一九七二年



「ヨーロッパの社会と文化」一九七七年



「文化を読む」人文書院、一九九二年



雑誌の方法をめぐってを組織しているが、やがて日常の相互行為での会話や身振りなど、記録再現可能なデータから、社会的相互行為を記述する方法を模索する(『コミュニケーションの自然誌』という研究班を立ち上げることになった。ちなみに社会的相互行為を子細に観察して、事実を読み取ることを強いられているのは霊長類学者も同じである。こうして、菅原和孝、北村光二、澤田昌人といった霊長類学出身者とともに、串田秀也(社会学)、水谷雅彦(倫理学)、藤田隆則(民俗音楽学)などが参加し、谷の最後の共同研究班の成果として『コミュニケーションの自然誌』(新曜社、一九九七)がだされている。

なお、谷時代の後半になってからである。それまで社会人類学部門は、今西時代らしい教授ないし助教授一人のポストしかなかったのだが、二人のポストがあたえられることになり、一九八八年、田中雅一を助教授に迎えることになった。彼が英国の社会人類学のもとで育った理論家であることに加え、いまや京都大学に東南アジア研究およびアフリカ研究拠点ができている段階で、南アジアという地域的空白を埋める人材であったからである。

そして谷、田中時代になってからのことだ。それまでの京都大学の人類学のおかれた状況に大きな変化をもたらすことが進行した。教養部改組のもとで生まれる人間・環境学研究科で、念願の文化人類学関係の講座が創設できる可能性が生じたのである。しかもその創設には、人文研の社会人類学の協力参加が不可欠という状況から、人文研の社会人類学のスタッフが大学院教育に協力することが要請された。当時人文研では、なお大学院教育には制度的には関与しないという大原則が維持され続けていた時代である。こうして人文研は制度的に大学院に関与しないというしぼりと、念願を実現するために大学院に協力する必要との二律背反を解消すべく、一定期間の協力という条件で人文研の所員会(現在の教授会)の承認をえたのは、一九九二年のことであった。翌年には文化人類学を学ぶことのできる修士課程が開設された。こうして、人文研に社会人類学の部門ができてから三四年目にして、若手人類学研究者を養成する機関としての大学院が、京都大学に整うことになったのである。

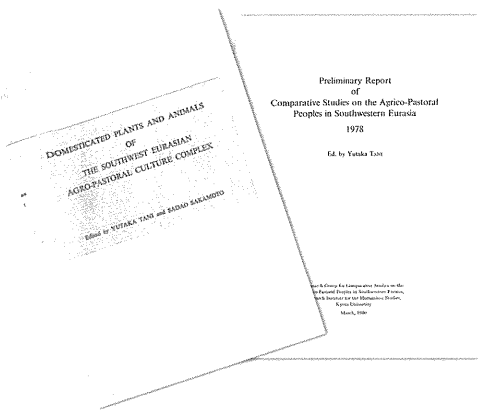
ときに、この時代すでに日本は学術的刊行物が売れない時代に入っていた。止まり木のない若手研究者の論文発表機関としての『季刊人類学』の刊行停止を、赤字理由で講談社から求められたのは、まさに文化人類学の大学院が設立された時期とときを同じくしている。そして自主的人類学セミナーである(近衛ロンド)もその役割を終え、京都の人類学者の集う場としての京都人類学研究会へと脱皮した。

ともあれ、今西時代以来、京都大学に人類学の若手を養成する正式の大学院を欠くという条件下で、人類学外のさまざまな専攻背景をもった人々が、人文研の社会人類学の共同研究班を止まり木として、人類学研究者となっていた。そういう状況が、この大学院の成立とともに解消され、当初からもっぱら人類学を専門とした若手研究者が生まれることになった。この変化は一方で喜ばしいことだが、同時に研究者としての幅を拡げる努力が個々人みずからに求められることになったといつてよい。

「ユーラシア西南部有畜農耕社会の比較文化研究」調査で訪れたアフガニスタン、バダクシヤン地方シエラ高原牧地で。右から隊員の松井健、河原太八、阪本寧男



欧文による「ユーラシア西南部有畜農耕社会の比較文化研究」調査の成果報告書



## 梅棹研究室・一九六五～七二年

いしげ なおみち  
石毛 直道

国立民族学博物館名誉教授

## 今西研究室

わたしは一九六五年一月から七年三月まで、社会人類学部門の助手として人文科学研究所に在籍した。そのときの思い出を、いささか主観的に記そう。

「探検部」の部員であったわたしは、学生の頃から、東二条にあった人文研分館「一九七五年に本館が東二条に建設される」に出入りしていた。当時の社会人類学の教授であった今西錦司さんは探検部顧問であったし、助手の藤岡喜愛さんは、一九六〇年に探検部学生たちが企画した「京都大学トンガ王国学術調査隊」の副隊長として、現地調査をともにした間柄であった。そんなことで、探検や海外調査の計画を、今西さんと藤岡さんに相談しに、しばしば人文研分館を訪れたのであった。

一九六四年の初夏、ニューギニア高地での探検調査からもどってきたわたしは、人文研の今西研究室に帰国のあいさつをしにいった。すると、今西さんは「どや、人文のわしの共同研究会をのぞいてみないか」と声をかけてくれた。

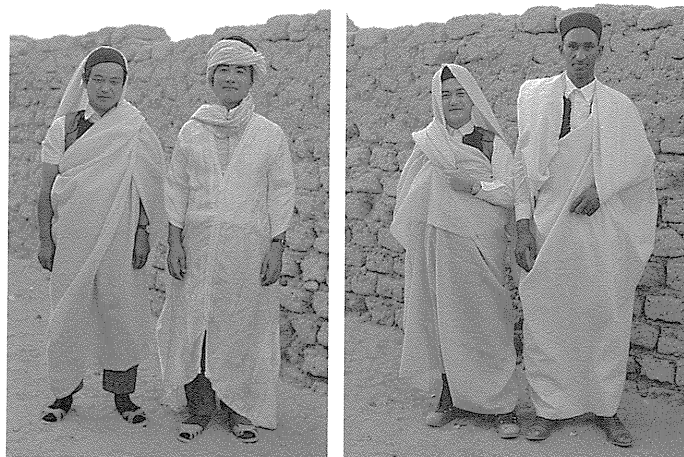
当時、わたしは考古学を専攻する修士課程の学生であった。しかし、ニューギニアで民族調査をおこない、考古学よりも文化人類学に情熱をもやっていた。第二線の研究者たちが討論をかわす今西研究会に参加できるとは、夢のようなことであった。そこで秋から、わたしは傍聴者として研究会に出席した。

今西研究班のメンバーには、探検部顧問の中尾佐助さん、川喜田二郎さん、梅棹忠夫さんなど、顔見知りの人がおおかた。今西さんの共同研究会では、「〇〇先生」という敬称を使わず、おたがいに「〇〇さん」とよびあった。地位や年齢にはかわりなく、平等な研究仲間として遇したのである。その伝統をひきついで、本稿で人名は「さん」でよぶことにする。

この研究会では、書物から得た知識だけを紹介しても通用しない。みずからの調査による論考や、独創的な仮説を提出して、それを参加者全員で徹底的に討論するのだ。まことに創造的な雰囲気の研究であった。その気風は、のちの梅棹研究班にもうけつがれた。

## 梅棹研究室

一九六五年三月に今西さんは定年で京都大学を引退し、その後任として、八月に梅棹忠夫さんが人文研助教授として就任した。そこで、梅棹体制のもとでの社会人類学部門の助手が必要となった。人文研の助手は、



京都大学大サハラ学術探検で民族服を着た梅棹忠夫（右写真左）、谷泰（左写真右）、石毛直道（左）

全国公募をして、入所試験をおこない、合格者を採用するのが慣例である。これに応募したわたしは、幸いなことに合格した。

助手用の研究室が不足していたので、わたしは梅棹さんの研究室に同居することになった。梅棹研究室は、今西さんの研究室をひきついだ部屋である。細長い部屋の壁面の書架には、今西さんが収集した社会人類学、霊長類学関係の洋書がぎっしり詰まっていた。窓際の一角に梅棹さんのデスクがあり、小松左京さんが梅棹さんの人文研就任祝いにプレゼントした電気スタンドが置かれていた。梅棹さんの隣りには秘書の藤本ますみさんの机がある。衝立で仕切られた、もう一方の窓際にはわたしの机があった。部屋の真ん中は会議用の長い机があり、それを囲んで数人の会議をすることが可能であった。

毎日二〇時に、梅棹さんは出勤してくる。昼になると、和食の仕出し弁当が配達され、会議用の机を囲んで食べながら、梅棹、藤本、石毛で打ち合わせをするのが日課であった。

梅棹研究室は多忙であった。梅棹班の共同研究会は、月曜日の二時半から、人文研分館のプレハブ建築の小会議室で開催された。まず、前回の研究会での記録が配布され、その内容を検討する。ついで、班員の二人が二時間程度の研究発表をおこない、それをめぐるディスカッションが五時頃までつづく。自分の専門領域にとらわれることなく自由な発言をする、この討論の時間が、学際的な共同研究のもっとも充実した部分である。ときには、はげしい論争もおこなわれたが、討論がすんだあとに、しこりはこらない。この共同討論のなかから、重要な仮説がいくつも誕生した。

討論を記録してレジメを作成し、次週の研究会に提出するのは、助手の仕事であった。コピーマシンが普及する以前のことなので、手書き原稿の湿式のブルーコピーで複写したのである。悪筆のわたしは、藤本さんに清書を頼むことが多かった。

今西さんのアフリカ研究をひきついで、*Kyoto University African Studies* とつう英文報告書のシリーズを編集・刊行するのも梅棹研究室の仕事であった。のちに述べる『季刊人類学』の編集もここでおこなった。これらの編集会議は、梅棹研究室で開催され、編集実務も研究室でおこなわれた。さまざま原稿をチェックする編集作業にたずさわる体験をしたので、わたしも人びとに読んでもらえるような文章を書けるようになったのである。

研究者や学生を会員とする「京都大学アフリカ研究会」（略称 K U A R A ・今西錦司会長）の事務局も梅棹研究室を拠点としていた。

すでに著名人であった梅棹さんのことである。毎日来客があり、わたしも座談にくわわることもあった。その多忙のなかで、梅棹さんは論文を執筆し、著書を刊行していた。この梅棹研究室での助手時代に、わたしは「知的生産の技術」を、その現場で学んだのである（注1）。

## 共同研究班

今西さんの退官後も、「人類の比較社会学的研究」は年度末の一九六六年三月まで、梅棹班長のもとで継続

（注1）この項の梅棹研究室の雰囲気については、左記の本に描写されている。

藤本ますみ 『知的生産者たちの現場』講談社、一九八四年（『講談社文庫』二九八七年に再録）

## 資料1

重層社会の人類学的研究 班長 梅棹忠夫

昨年度までの研究課題「人類の比較社会学的研究」によって単層社会についての人類学的研究が二段落したので、本年度よりは重層社会、すなわち、文明段階に入った社会を研究対象とすることになった。当初の研究テーマは、国家編成の過程において、宗教のはたらく役割をあきらかにすることにおかれている。

また、「アフリカ社会の研究」というサブ・テーマによる研究会が、本班の有志によって隔週にもたれ、本研究班の課題を現地調査の結果にもとづく具体的事例によって、補強することもおこなわれている。

## 資料2

飯沼二郎、梅棹忠夫、上山春平、藤岡喜愛、谷泰、石手直道（以上所内）、飯島茂（京大農学部）、石井米雄（京大東南アジア研究センター）、伊谷純一郎、森下正明（以上京大理学部）、栗田靖之、松原正毅（以上京大農学部）、西川孝治（京大工学部）、今西錦司（岐阜大学長）、岩田慶治（大阪市大文学部）、梅原猛、林屋辰三郎、佐々木高明（以上立命館大文学部）、川喜田一郎（東京工大文学部）、倉田亨（近畿大農学部）、富川盛道（東京外国大アジア・アフリカ言語文化研究所）、直原利夫、和崎洋二（以上天理大おやさと研究所）、中尾佐助（大阪府大農学部）、星野命（国際キリスト教大教養学部）、米山俊直（甲南大文学部）、和田祐（関西学院大文学部）。

した。六六年四月からは、あたらしい共同研究である「重層社会の人類学的研究」が開始された。『人文学報』二二号巻末の「彙報」から、この研究班の趣旨を引用してみよう(資料1)。

「重層社会の人類学的研究」発足当初の班員は今西研究会から継続した人びとがほとんどであったが、のちにメンバーを補強した一九六七年度の班員をあげておこう(資料2)。このほかに国内留学で人文研に所属する研究者や海外からの客員研究員など、一時的な研究班への参加者がある。最大のときは、研究班の延べ人数五〇人の大所帯であった。注目されるのは、当時大学院学生であった栗田さんと松原さんが班員になっていることである。今西班では大学院生のわたしはオブザーバーであったが、梅棹体制では実力のある大学院生を正式班員として認めるようになったのである。その後も、何人かの大学院生が梅棹班の班員になった。

一九六九年に、共同研究班の組み替えがなされ、三つの共同研究班を同時進行させることになった。その事情を『人文学報』二九号「彙報」から引用する(資料3)。運営にたずさわる梅棹さんやわたしは忙しかったが、それは生産的で活気のある、幸せな忙しさであった。ただし、人文研から支給される共同研究の年間経費は、一研究班分だけであった。

### 近衛ロンドと『季刊人類学』

梅棹研究室と表裏一体の関係にあったのが、「近衛ロンド」である。当時の京都大学で、人類学関係の講座としては、今西さんが開設した理学部の自然人類学研究室しかなかった。世界の文化や社会を人類学的に研究し、後進の教育にあたる講座はなかったのである。

大学に講座がないのなら、自分たちで文化人類学の勉強会をつくろうということでも、探検部の学生や大学院生が中心となつて、一九六三年にちいさな勉強会がつけられた。そのメンバーたちは、「梅棹サロン」の常連であった。その頃、梅棹さんは毎月の第金曜日と第三金曜日の晩に自宅の応接室を開放して、そこに学生や若い研究者たちが集まり、ビールを飲みながら放談をする会をひらいていた。それが梅棹サロンである。

一九六三―六四年、梅棹さんは京都大学アフリカ学術調査隊の一員として、タンザニアのエヤシ湖周辺の村で、人類学者の富川盛道さん、和崎洋さんと一緒に、民族調査に従事した。そのとき、この三人で、京都大学に総合的な人類学科が設立されると仮定して、その講座での講義科目と担当教授を誰にするかという「空想人類学科設立案」を話しあったそうだ(注2)。

梅棹サロンでの集まりのなかで、「空想人類学科」案と学生主体の勉強会が合体して、自主講座「京都大学人類学研究会」が発足した。毎週水曜日の六時半から二〇時まで、近衛通りにある京都大学楽友会館に集まって研究会を開催するので、この会の通称を「近衛ロンド」という。初代会長は今西錦司さんで、わたしが会の運営にあたる幹事役に指名された。一九六四年九月に第一回の研究会が開催されたが、その年のプログラムを記してみよう(資料4)。

水曜日の研究会だけではなく、語学実習の合宿をしたり、六五年度からは東西の若手研究者の交流の場である「東大・京大人類学合同談話会」の京都側の運営を近衛ロンドがおこなうことになった。一九六七年からは、

### 資料3

文明の比較社会人類学的研究・アフリカ社会の研究・理論人類学研究  
班長 梅棹忠夫

四四(一九六九)年六月に、人類学関係の上記の三共同研究班が発足した。文明の比較社会人類学的研究(略称、比較文明論)は、前年度までの重層社会の人類学的研究を引きつぎ、さらに対象を大きな単位として、世界的視野のなかで諸文明の位置づけをおこなう試みである。アフリカ社会の研究班は、前年度まで重層社会の人類学的研究の支班であったものが、班として独立したものである。これは、東アフリカ、北アフリカにおける現地調査の資料にもつき、アフリカ社会の実証的研究をおこなうものである。

理論人類学研究班は、過去三年間、有志のあいだで開かれていた同タイトルによる研究会を正式に班として発足させたものである。この研究班は、人類学的研究における理論的側面、および方法的開拓をめざすものである。

上記の三研究班は、対象とする分野が異なり、各々独立した研究組織ではあるが、班員にはかなりの重複がみられ、たがいに姉妹関係にあるものなので、自分のあった梅棹が三班共通の班長としての責任を負う。

(注2) 梅棹忠夫「空想人類学科設立案」『人類学研究』二号 京都大学人類学研究会、一九六五年(再録)『梅棹忠夫著作集』二二巻 研究と経営 中央公論社、一九九三年

(注3) 近衛ロンドと『季刊人類学』について、くわしくは左記の文献を参照されたい。  
梅棹忠夫「近衛ロンドの五年間」京都大学人類学研究会『季刊人類学』二巻号 社会思想社、一九七〇年(再録)『梅棹忠夫著作集』二二巻 研究と経営 中央公論社、一九九三年

近衛ロンドの例会を、月に一度は日本民族学会と共催での「京都人類学談話会」にあてて、そのときはロンドン会員以外の日本民族学会員も参加できることになった。

初期の近衛ロンドの会員は四〇人くらいであったが、毎回の研究会には二〇人以上の会員が出席した。京都大学関係者ばかりではなく、関西のさまざまな大学の学生や研究者も会員になり、なかには新幹線で東京から通ってくる人もいた。会場費、案内状発送費、機関誌の発行などの費用が必要なので、会費制によって運営される研究会であるが、講師謝礼はない。人文研の梅棹研究班の班員のほとんどがロンドの講師になつてくれたが、謝礼なしでも、こころよくひきうけてくれた。

『人類学研究』というロンドの機関誌を不定期に刊行していたが、頁数がすくなく、論文を掲載できる学術雑誌ではなかった。会員誌ではなく、人類学に興味をもつ一般の人びとが投稿可能で、書店で購入できる学術雑誌をロンドが主体で刊行したいということで、一九七〇年に『季刊人類学』が発刊された。京都大学人類学研究会編で、社会思想社を発行元とする雑誌である。一九七〇年一月刊行の二巻号に記載されている編集委員名をあげてみよう(資料5)。

考古学者の樋口さん以外の編集委員は、梅棹班のメンバーである。わたしは編集事務局長であった。その後、発行元が講談社に変わり、一九八九年の二〇巻四号まで『季刊人類学』は刊行された(注3)。

## フィールドワーク

フィールドワークをおもんじる人類学のことである。梅棹班の班員や近衛ロンドの会員たちは、しょっちゅう海外調査に出かけ、帰国すると、その成果を研究会で発表するのであった。

今西さんから、アフリカの人類学的研究をひきついだ梅棹研究室でのことである。梅棹班発足当時の班員の七人は、東アフリカでの現地調査の経験者であった。それまでオセアニアの調査をおこなっていたわたしも、人文研助手になると、一九六六―六七年にはタンザニアの調査に出かけた。帰国すると、京大アフリカ調査隊人類班の全資料の整理と、それにもとづく報告書作成の仕事が待っていた。報告書の編集は、わたしの担当であった。一九六八年に、京大隊人類班による東アフリカ研究の全成果をまとめた報告書、今西錦司・梅棹忠夫編『アフリカ社会の研究——京都大学アフリカ学術調査隊報告』が、西村書店から刊行された。B4判四三三頁、重量三二キロの大冊である。

一九六七―六八年には、「京都大学大サハラ学術探検隊」による北アフリカ調査がおこなわれた。そのリビア支隊には、梅棹さんと当時人文研助手であった谷さんとわたしが参加した。リビア砂漠のオアシスに、梅棹班の中核が引越したのである。その間、人文研の共同研究会は休業であったが、オアシスの民家に合宿して、酒瓶をまえにしたの三人の共同討議が、毎夜くりひろげられたのである。

四月初旬に梅棹さんと谷さんが帰国したあと、わたしはリビア砂漠を縦断する旅をおこない、六月に人文研にもどつてくると、梅棹研究室は二つのプロジェクトで大忙しであった。ひとつは、七〇年に大阪で開催する日本万国博覧会の準備である。梅棹さん、加藤秀俊さん、小松左京さんは、六四年から「万国博を考える会」

## 資料4

- 九月三〇日 発会式、会則討議
- 一〇月七日 「空想人類学設立案」梅棹忠夫
- 一〇月四日 フロラム討論会
- 一〇月三日 「マリノフスキーとドクリフ・ブラウン——最近の評価を中心に」米山俊直
- 一〇月二日 「スベインについて」宮本久子
- 二月四日 「狩猟と遊牧の世界——自然社会の進化その1」梅棹忠夫
- 二月三日 「狩猟と遊牧の世界——自然社会の進化その2」梅棹忠夫
- 二月八日 「インド半島東部焼畑民の村落と耕地」佐々木高明
- 二月五日 「石包丁について——日本稲作農耕の系譜」石毛直道
- 二月二日 「タンガニカ湖東岸の地方史」端信行
- 二月九日 「アフリカの witchcraft に ついて」米山俊直
- 二月九日 座談会——回顧と展望

## 資料5

飯島茂、池田次郎、岩田慶治、梅棹忠夫、加藤秀俊、佐々木高明、谷泰、西川孝治、樋口隆康、藤岡喜愛、米山俊直、和崎洋一、和田祐一

京都大学大サハラ学術探検隊での谷泰(左端)と石毛直道(右端)





をつくり、七〇年万博の企画をねっていた。二年後に開催がせまった六八年になると、梅棹、加藤両人のいる人文研分館には、万博の実施計画を相談にくる来客が絶えなかった。

もうひとつは、六八年九月に東京と京都を会場としておこなわれる「国際人類学民族学会議」の準備である。これは、四年に一度開催される自然人類学と文化人類学関係の世界会議である。京都会場での実施プランは、京大理学部自然人類学研究室と人文研の梅棹研究室が中心となつてすすめたのである。

この二つの企画が合体する部分が生じた。岡本太郎・プロデューサーが企画した万博テーマ館の地下空間に、世界の民族の仮面と神像を展示するということになったのである。そのためには、若手の人類学者たちを世界各地に派遣して、展示品を収集する必要がある。

その頃、東大で文化人類学を講じる泉靖さんと梅棹さんは日本民族学会の博物館推進委員会のメンバーで、民族学の博物館を設立する企画にたずさわっていた。そこで、テーマ館に展示する仮面や神像のコレクションを将来の民族学博物館の基礎資料にしようということになったのである。

国際人類学民族学会議のさい、各国の著名な研究者を日本万国博覧会協会が招待したパーティがひらかれた。その席上で、パリ大学で民族学を学び、一九三七年のパリ万博が終了後、その跡地に民族学を展示する「人間博物館」が設立されたことを知っている岡本さんは、フランス語で力強い演説をした。「今回の万博のために収集する仮面や神像が、将来設立する日本の民族学博物館の基礎資料となるだろうから、協力してほしい」という岡本さんのことばに、海外の学者たちもふかぐうなずいた。

こうして「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」が結成され、二〇名ちかくの若手研究者が、世界各地での収集にあたることになった。その事務局は、東京側は泉さんの研究室、京都側は梅棹研究室におかれ、のちの国立民族学博物館教授の吉田集而さんが事務局長であった。一九六八年二月から一九六九年三月まで、わたしは松原正毅さんと一緒に東南アジアとオセアニアでの収集に従事した。そのとき松原さんは大学院生で梅棹班の班員でもあった。

万博の収集団が世界各地で集めた民族資料は約二六〇〇点にのぼる。岡本さんの予言のように、七〇年万博の跡地に国立民族学博物館が設立された。収集団の集めた資料は、七七年開館時における展示の重要な部分を占めるものであった。収集団の集めたすべての資料は、現在は国立民族学博物館で保管されている(注4)。

通算してみると、わたしが梅棹研究室に勤務した六四ヶ月のうち、二〇ヶ月は海外調査に出かけていたことになる。在任期間の三分の一ちかくを留守にしたのである。本来、共同研究のマネージャー役の助手が不在では、研究室の運営にも支障をきたす。それでも梅棹さんは、こころよく送り出してくれた。今西グループの、なによりもフィールドワークを重視する気風は、梅棹さんを通じて、のちの国立民族学博物館にもひきつがれた。

一九七七年四月、わたしは人文研をやめ甲南大学に就職し、オセアニアの旅をともした松原さんが後任の助手となった。いまになってふりかえてみると、梅棹研究室時代のフィールドワークと共同研究が、わたしを一人前の人類学者に育ててくれたのである。



「人類学研究」バックナンバー

(注4) 左記の文献は、この収集団の記録である。  
梅棹忠夫(編)『EEM 日本万国博覧会世界民族資料調査  
収集団・記録』日本万国博覧会記念協会、一九七三年

## 見果てぬ夢を

—— 京都大学人文科学研究所と探検部

まつばらまさたけ  
松原 正毅

坂の上の雲ミュージアム館長／  
国立民族学博物館名誉教授

### 京都大学探検部の誕生

京都大学探検部は、一九五六年三月に創設された。創設のまえから、探検部と京都大学人文科学研究所とのつながりはふかい。そのつながりは、もっぱら個人的な紐帯に基盤をおいている。

探検部創設にかかわった本多勝一たち数人の学生は、かなり頻繁に当時京都大学人文科学研究所講師であった今西錦司の研究室や自宅をたずねている。今西は、一九五〇年四月に京都大学理学部をはなれて人文科学研究所講師となった。京都大学理学部規定の行政整理にともなう、当時今西が所属していた動物学教室の講師を一名減らす必要にせまられたためである。今西の理学部から人文科学研究所への移籍を仲だちしたのは、旧友の桑原武夫や貝塚茂樹であった。

探検部は、山岳部からわかれるかたちで生まれた。この背景には、一九四五年度の第二次世界大戦敗北後の歴史が色濃く影をおとしている。敗戦後しばらくのあいだ、海外での学術調査を自由におこなうことは不可能であった。戦後における海外での学術調査の先鞭をつけたのは、今西である。

一九五二年八月、今西はマナスル登山隊偵察隊長としてネパールにかけた。同行者は、中尾佐助（植物学）をふくむ五人である。この偵察隊の役割は、日本山岳会が初登頂を目ざすマナスルについての情報をあつめ、登頂可能なルートをさぐることであった。偵察隊は、同年二月末に帰国している。

一九五四年にはいつて、今西は生物誌研究会を中心にカラコラム・ヒンズークシ山脈への学術調査隊派遣の計画をたてはじめる。一九五五年五月、京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊は日本を出発した。隊長は木原均（遺伝学）、今西はカラコラム支隊長として参加する。梅棹忠夫は、この学術探検隊の一員としてアフガニスタンのモゴール族調査を担当している。本隊は、同年九月に帰国した。この学術探検隊は、戦後始めて文部省からの資金的支援（六〇〇万円）をうけた総合的学術調査隊であった。

京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊には、人文科学研究所所員の岩村忍（歴史学）と岡崎敬（考古学）が隊員として参加している。岩村は、この学術探検隊の人類班の班長をつとめた。人類班には、梅棹と岡崎のほか山崎忠（言語学）が属している。三人の所員（今西、岩村、岡崎）が隊員であつただけでなく、人文科学研究所と学術探検隊とのつながりはふかい。東一条の人文科学研究所分館に、この学術探検隊の準備本部がもうけられたからである。分館の中庭で学術探検隊の装備品が梱包され、五五年三月中旬には一四四箱の荷物が神戸港におくりだされている（注1）。

戦後初の海外調査、カラコラム・ヒンズークシ学術探検をひかえて装備品の箱が山と積まれた東一条の人文科学研究所分館（当時）の中庭



（注1）梅棹忠夫「水河と砂漠のなかの衣食住」『梅棹忠夫著作集第四巻 中洋の国ぐに』中央公論社、一九九〇年一八二頁

一九五六年六月、京都大学・パンジャブ大学合同パンジャブ・ヒマラヤ探検隊が神戸港からカラチへむけて出発した。これは、同年三月に創設された京都大学探検部からはじめて海外におくりだされた遠征隊である(注2)。日本側の隊長は藤田和夫(地質学)、隊員は本多、吉場健二(霊長類学)であった。藤田は、京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊のカラコラム支隊の一員である。パンジャブ大学との合同探検隊のアイデアが芽ばえたのは、カラコラム支隊の活動を通じてであった。新しく誕生した探検部は、このアイデアの芽を実らせる役割をはたしたわけである。

### 京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊の影響

一九五六年六月末には、京都大学中近東学術研究調査部からイラン遠征隊が出発している。この遠征隊の隊長は人文科学研究所所員の吉田光邦(科学史)、隊員は高谷好一、曾根原恵夫、東滋である。三人の隊員は、いずれも京都大学探検部部員であった。パンジャブ大学との合同探検隊が先行して部公認となっていたため、探検部からではなく中近東学術研究調査部からの派遣というかたちをとったのである。

京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊の派遣は、各方面に影響をあたえている。京都大学人文科学研究所にも、直接的な影響があった。一九五九年に人文科学研究所を中心に組織された京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン(イアパ)学術調査隊は、その影響を如実にしめすものである。

京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊の組織化を中心的にすすめたのは、人文科学研究所教授の水野清一(考古学)であった。水野は、一九三六年から四四年にかけて中国北部の石窟寺院の調査を継続しておこなっている。しかし第二次世界大戦での敗北とともに、この中国における調査をつづけることは不可能になった。カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊に参加した岩村、岡崎の情報をもとにして、水野は仏教遺跡を対象とした総合的な学術調査の計画をねりあげている。

京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊は、一九五九年から一九六八年にかけて第一次から第七次までの調査をおこなった。第一次隊は、考古美術、地理、人類技術、歴史言語の四班から構成されている。この隊には、水野、岩村、岡崎、吉田のほか人文科学研究所所員の藪内清(科学史)、林巳奈夫(考古学)、田中重雄(画家)が隊員として参加した。第一次隊と同様な総合調査をおこなったのは、一九六四年の第五次隊だけである。第二次隊(一九六〇)、第三次隊(一九六二)、第四次隊(一九六三)、第六次隊(一九六五)、第七次隊(一九六七〜六八)では、考古美術班を中心とした調査をおこなった。考古美術班の調査は、仏教遺跡の発掘や石窟寺院



カラコラム・ヒンズークシ学術探検の荷出し作業がおこなわれた人文研分館中庭で、多くの関係者の中にカラコラム支隊長の今西錦司(中央)、その右に所長の貝塚茂樹も見える

の測量を主としたものである(注3)。

人文科学研究所では、イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊と並行してもうひとつの大規模な海外調査隊を運営してゆく。それは、一九六二年から派遣が開始された京都大学アフリカ学術調査隊である。この学術調査隊の牽引役をつとめたのは、今西錦司だった。今西は、カラコラム・ヒンズークシの調査の三年後にあたる一九五八年にアフリカでの類人猿調査に着手している。この調査を土台として、類人猿班と人類班からなる京都大学アフリカ学術調査隊が組織された。

京都大学アフリカ学術調査隊の第一次隊(一九六二)には、探検部OBの東滋が類人猿班の一員として参加している。第二次隊(一九六三)には探検部現役部員の谷口穰と端信行、第三次隊(一九六四)には現役部員の福井勝義が、いずれも人類班の一員として学術調査をおこなった。一九六五年三月に今西が定年退官をむかえるとともに、京都大学アフリカ学術調査隊の推進母体は人文科学研究所から理学部自然人類学研究室に移行した。

時代のながれのなかでみると、一九五〇年代後半から一九六〇年代はじめにかけての京都大学人文科学研究所は、海外学術調査という面ではもつとも活動的な時期にあつたといえるだろう。カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊、イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊、アフリカ学術調査隊が、ほぼ切れめなく人文科学研究所を本部としておくりだされていったからである。この当時、大規模な海外学術調査隊の派遣の直前となると、大量の物資を梱包しておくりだす作業で研究所の中庭はお祭りのようになつた(注4)。第一次のアフリカ学術調査隊のときには、現地での宿舎用のプレハブ建築資材も輸送している。

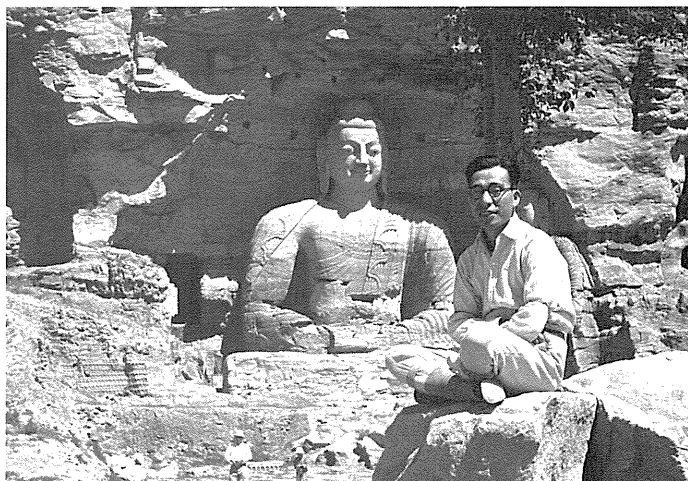
一九五〇年代後半から一九六〇年代はじめの時期は、他の時期にくらべると人文科学研究所と探検部とのあいだにもつとも密接な交流があつたといつてよいかもしれない。人文科学研究所の所員と探検部部員が調査活動をともにすることがあつただけでなく、研究所主宰の海外学術調査に探検部部員が一員として参加することもあつたからである。

## 海外学術調査の継続

一九六八年三月には、水野清二は定年退官した。それにともなつて、京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊の継続事業は文学部考古学研究室と工学部建築学研究室がうけおつている。この時点で、今西と水野がリーダーとなつたアフリカと西アジアを対象とする海外学術調査は、いずれも人文科学研究所の手をはなれた。それでも、かたちをかえながら人文科学研究所主宰による海外学術調査は継続する。

一九六七年からは、京都大学ヨーロッパ学術調査隊が発足する。この学術調査隊の企画者は、人文科学研究所所員の梅棹忠夫であつた。ヨーロッパ学術調査隊の主要な目的は、ヨーロッパ自体を地域研究の対象としてとりあつかうことである。それと同時に、人文科学研究所西洋部に所属するヨーロッパ研究者をすべて現地研究の場におくりこむことも目的のひとつとされている。それまで、ヨーロッパ研究者のおおぐが現地にたつことのないままに研究に従事する例がみられたからである。

中国北部石窟寺院調査における雲岡石窟第二〇洞前の水野清一



(注2) 京都大学探検部の誕生から京都大学・ハンジャフ大学合同ハンジャフ・ヒマラヤ探検隊の成立の経緯については、つぎの文章に詳述されている。

本多勝一「第一部 日本初の探検部、誕生へ」『本多勝一 第四巻 探検部の誕生』朝日新聞社、一九九八年、九一―一四二頁

(注3) 人文科学研究所五〇年史編集委員会『人文科学研究所五〇年』京都大学人文科学研究所、一九七九年、三三―三五頁

(注4) 京都大学アフリカ学術調査隊の第二次隊(一九六二)の出發準備にあつては、当時の探検部現役部員のほとんど全員が手つたいをしている。筆者自身も、この喧騒の渦のなかにはいた。

京都大学ヨーロッパ学術調査隊は、第二次(一九六七)、第三次(一九六九)、第四次(一九七二)と三次にわたって派遣された。第一次調査隊の隊長をつとめたのは、桑原武夫である。桑原は、第一次調査隊派遣後の一九六八年三月に定年退官している。第二次調査隊と第三次調査隊の隊長は、会田雄次がつとめている。第二次調査隊によるユーゴスラビア調査には、探検部現役部員の小林茂がメンバーのひとりとして現地参加している。第三次調査隊では、探検部OBで人文科学研究助手の松原正毅がトルコ班の一員として民族学的調査をおこなった。

三次にわたる京都大学ヨーロッパ学術調査隊が調査対象とした国々には、イギリス、フランス、イタリア、ユーゴスラビア、スペイン、スイス、トルコなどである。このヨーロッパ学術調査は、ヨーロッパのすべての地域をカバーしたわけではないが、ヨーロッパを現地研究の対象として組織的にとりくんだのはやい時期のころみとして評価できるだろう。残念なのは、第四次以降のヨーロッパ学術調査が継続しなかったことである。かりにもう少し長期的な継続調査がおこなわれていたら、日本におけるヨーロッパ地域研究のかたちがかわっていた可能性もかんがえられる。

### パイオニア・ワークを目ざして

京都大学ヨーロッパ学術調査隊の終結を境として、京都大学人文科学研究所がその組織をあげて海外学術調査隊をおくりだすということとはなくなったといつてよいだろう。それとともに、京都大学人文科学研究所と探検部がなんらかのかたちでかかわりあうということもなくなってきた。あきらかに、ここには海外学術調査における時代的变化がみられる。

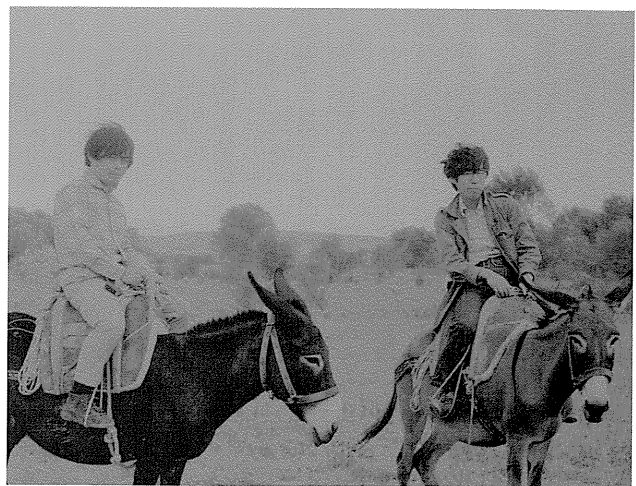
海外学術調査における変化は、一九六〇年代前半と後半で顕著にあらわれている。もつとも顕著な変化は、必要な機材や物資の梱包と輸送のありかたである。一九六〇年代前半のアフリカ学術調査隊やイラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊においては、膨大な量の機材や物資を現地までもちこんでいる。これが一九六〇年代後半のヨーロッパ学術調査隊になると、ほとんどスーツケースひとつで現地にもかうかたちがおおくなった。身がるなかつた海外調査に対応することが、可能になったのである。

こうした変化をもたらしたおおきな要因のひとつに、一九六四年四月の外国為替自由化があったことは確実である。為替自由化によって、外貨を国外に自由にもちだすことが可能になった。それまでは、海外にでかけるに際して、大蔵省や日本銀行などで構成される外貨審議会において外貨もちだしの認可をうけなければならなかった。そのため、海外渡航そのものがきびしく制約されたし、海外学術調査を隊(チーム)としておこなう以外の道はほとんどない状態であった。

海外渡航の自由化にともなう、個人のレベルで海外にでることが可能になっただけでなく、海外学術調査のかたちも多様化してゆく。海外学術調査を実施するにあたって、かならずしも大規模な隊(チーム)をくまなければならぬ必然性はうすれていった。一九六三年からは文部省科学研究費(海外学術調査)補助金が制度化されたため、それ以前の寄付金あつめの苦労はかなり軽減されることになる。それだけ、海外学術調査



「第一次ユーラシア西南部有畜農耕社会の比較文化研究」調査で聞き取り調査をする松原正毅。一九七八年



第三次ヨーロッパ学術調査でロバに乗る前川和也(左)と松原正毅(右)。一九七二年

が特定の学術機関の独占的な事業とはされなくなる。それは、ある意味ではひとつの時代のながれを反映したものともいえる。

こうした時代のながれがあるにしても、京都大学人文科学研究所のなかで海外学術調査はいろいろなかたちで継続している。一九七〇年代末から二九八〇年代はじめにかけて谷泰が主導した「アフリカ・アジア・トルコにおける海外学術調査」「ユーラシア西南部有畜農耕社会の比較文化研究」は、その二例である。もちろん、このほかにも個人レベルや小規模なメンバー構成による海外学術調査も実施されている。

戦後の学術探検や学術調査において先導的役割をはたした今西錦司や梅棹忠夫、本多勝一たちがつねに目ざしたのは、パイオニア・ワークであった。パイオニア・ワークは、先人がたどったのとはちがう道や風景をみいだす努力である。海外学術調査は、パイオニア・ワークが最大限に要求される領域といえる。実際のところ、パイオニア・ワークをつらぬきとおすのは至難の業である。パイオニア・ワークには、見果てぬ夢を追いつづける作業に似た側面があるからだ。しかし、いつの時代にあつても、とくに学問の世界ではパイオニア・ワークの重要性はかわることはない。

今後、京都大学人文科学研究所だけでなくすべての人文社会系の研究機関においては、現地研究の重要性はさらに増してゆくだろう。それを正面からうけとめるためには、現地研究を組織的、持続的に実施してゆくための全体的な制度設計が必要になる。その目標を達成するには、現地研究拠点の網目を構築し、日本だけの視点にとらわれない研究推進体制をととのえてゆかなければならない。最終的な問題は、こうした方向性を共有できる部分が拡大してゆくかどうかだ。



第二次アフリカ学術調査。キリマンジャロ登山途中での休憩。  
一九六三年

# 今西研究班と照葉樹林文化論

佐々木 高明  
ささき たかみ  
 国立民族学博物館名誉教授

「佐々木君、これを読んでみてくれ。」

毎週月曜日に開かれる研究会が終わったあとに、こう言われて、中尾佐助さん（御生前にもそう呼んだし、敬愛の情をこめてこう呼ばせて頂く）から三〇〇枚ほどもある分厚い鉛筆書きの原稿を渡されたのは、九六二年の初め頃だったろうか。後に今西錦司博士の還暦記念論文集『自然——生態学的研究』に収録されることになった「農業起原論」という大論文の原稿であった。読んでみると「ウビ農耕」とか「カリフ農耕」とか、それまで、余り聞いたことのない用語が出てきて難しく往生した記憶がある。

この論文の「ウビ農耕」の記述の終わつたあとに「照葉樹林農耕文化の成立」という項目があり、そこで初めて照葉樹林文化論の提唱が行われたのである（注1）。

## 生態学的な思考の枠組みが生んだ文化論

一九五九年、今西錦司博士の御就任とともに発足した京都大学人文科学研究所社会人類学部門の研究班（通称「今西研究班」）に、私が初めて参加させて頂いたのは一九六〇年だったと思う。当時の研究班のメンバーは、私の記憶によると、梅棹忠夫・中尾佐助・吉良竜夫・川喜田二郎・上山春平・飯沼二郎・岩田慶治・和崎洋一・伊谷純一郎・藤岡喜愛・角山栄・加藤秀俊・米山俊直・飯島茂・谷泰・石毛直道らの各氏であった。さまざまな専攻にまたがる錚々たるメンバーで、毎週月曜日の午後、相互に遠慮会釈なく文字通り喧々囂々の討論が行われた。

研究発表の際に質問攻めに逢い、発表者が立ち往生してしまうこともしばしばだった。このような時にも、しばらくして誰かから「まあ、最後まで話させてやれよ」という声がかかつて、やっと発表が終わるまでつづくということも少なくなかった。

この研究会で常に要求されたのは「外国の文献引用などではなく、自分の足で調査した結果にもとづいて語れ」ということで、たまたま東京方面から招いた某有名教授が欧米の某々先生の説と引用して得意気に発表したのに対し、中尾さんがフィールドワークの結果をもとに完膚なきまでに批判し、大へん気まずい空気になつたという記憶もある。今西研究会は、権威に全く捉われない、本当に自由で闊達な討論の場であつたということである。

その頃（一九六〇年代初期の頃）の研究会の大きなテーマは「人類の比較社会学的研究」で、そこでは、「重層社会」の研究、つまり「余剰に依存した支配層を持たないいわゆる単層社会」から「生産活動に従事する者たちの余剰に依存し、専業で支配する者のあらわれるいわゆる重層異質社会」への社会進化が共通の大きなテーマになつていふように思う（注2）。その課題に沿つて、狩猟・採集社会の特色、農耕や牧畜の発生と展開、国家の形成と社会の発展など、さまざまな問題が広く論じられた。

この場合、研究班の考え方の基礎にあつたのは、生態学的な思考の枠組みであつた。それを具体化したし、研究班の全員が共通の認識として了解していたのが、川喜田さんが発想し、吉良さんがまとめられた温度指数と乾湿度指数にもとづく世界の生態気候区分（図1参照）であつた（注3）。「照

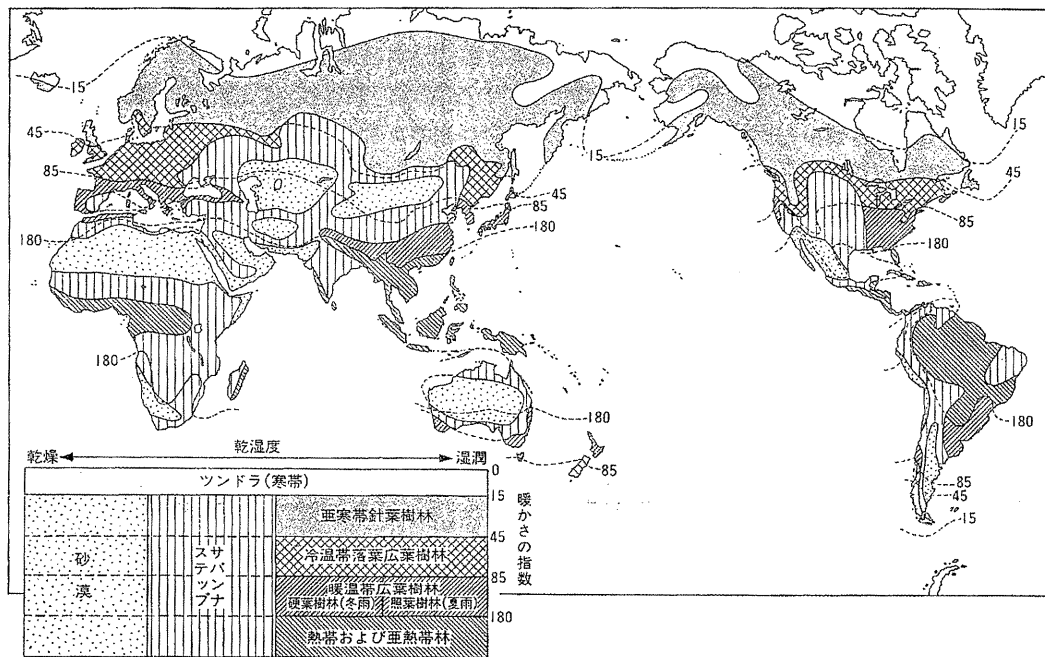


図1 世界の生態気候区分図  
 （「照葉樹林文化」一九六九年 六〇—六六頁より引用）

葉樹林帯」という概念の基礎になったのも、この生態気候区分であったし、この気候区分を背景にして、主としてユーラシア大陸における森林帯(F地域)とオープン・ランド(O地域)が対比され、それぞれの地域における社会の進化や文化の生態学的な特色の比較研究が、研究会での主要な課題になっていた。

このような問題意識の中から生み出されてきたのが、梅棹さんの「文明の生態史観」であり、中尾さんの「照葉樹林文化論」だったということが出来る。「文明の生態史観」は、ユーラシア大陸の中央部には乾燥した巨大なオープン・ランド(第二地域)があり、その東と西には森林地帯(第一地域)がある。この第一地域に属する日本とヨーロッパの間には文明的な類似が著しいことを説いたものである。それに対し、「照葉樹林文化論」は、東アジアに特有な照葉樹林帯という生態地域に注目し、この森林帯に成立した文化の共通性と文化の発展段階を考え、その延長線上に、日本文化の形成を位置づけようとしたものということができる。この二つの文明論・文化論の発表は、今西研究班の発足以前に遡るが、少なくとも、その理論の成熟段階では研究会でさまざまな形で討論を行った覚えがある。

このような今西研究班の研究動向の背景には、研究班の主要メンバーによる戦前の大興安嶺探検(一九四二年)や内蒙古での学術調査(一九四四～四六年)、あるいは戦後のマナスル登山に伴うネパール・ヒマラヤの学術調査(一九五二、五三年)やカラコラム・ヒンズークシ学術探検(一九五五年)など、内陸アジアの調査研究の伝統があったことは間違いない。照葉樹林文化論についても、中尾さんが「それはネパール・ヒマラヤ(のフィールドワーク)から始まった」(注4)と自ら述べているのも、こうした事情の存することを、端的に示したものとすることができる。

## 照葉樹林文化論を生み育んだ学問の伝統

ところで、一九六三年には科学研究費の援助を受け(注5)、「京都大学アフリカ学術調査隊」が編成され、翌六四年にかけて今西・和崎・伊谷・梅棹・米山・藤岡・石毛らの研究班の主要メンバーがアフリカに出发してゆく。

私事に亘って恐縮だが、私も恰度同じ一九六三年度に日本民族学協会が主催する「東南アジア稲作民族文化総合調査団」の第三次隊(隊長・川喜田二郎)のメンバーとしてネパールとインドに向うことになった。このとき、今西・川喜田のお二人の間で、同年輩の米山と佐々木の去就について話し合われ、それぞれアフリカ調査と稲作文化調査に振り分けることが決められたようである。関係者がすべて物故された今となっては、詳細を確かめ得ないが、このような研究調査をめぐる人事についても、研究班が一定の役割を果たしていたことも事実である。私がアフリカの農民社会ではなく、照葉樹林文化の研究となり、その後「稲作以前」に始まる日本文化形成論の研究を深めることになった契機の一つが、このような事にあつたということができる。

照葉樹林文化論のその後については、一九六九年に上山春平編『照葉樹林文化——日本文化の深層』が刊行され、上山さんの司会のもと中尾佐助・吉良童夫・岩田慶治の各氏と考古学者の岡崎敬氏が討論を行い、照葉樹林文化が、我が国の縄文文化に影響を与えた可能性が論ぜられている。また一九七六年には上山・中尾・佐々木の三人の共著で『続・照葉樹林文化——東アジア文化の源流』が上梓され、照葉樹林文化を構成する多くの文化要素とその起源地が確認されて、現在みられる照葉樹林文化論の大枠が、その討論の中で整えられたといふことができる。

こうした照葉樹林文化論の展開過程の詳細については、私の近著、『照葉樹林文化とは何か』(二〇〇七年)の中で論じたのでここでは触れなくておくが、照葉樹林文化論の形成と展開のプロセスで大きな役割を演じたのが『照葉樹林文化』と『続・照葉樹林文化』の二冊だが、その二冊は、いずれも上山春平氏が司会し、中尾さんを中心としながら吉良・岩田各氏や佐々木らがそれに加わった討論(シンポジウム)の形でまとめられていることに注目したい。この事実は照葉樹林文化論が、今西研究班の討論の、ある種の延長線上で大きく花開いたことをよく示す事実であろう。

今西研究班の伝統とその影響が照葉樹林文化論を生み出し、それを育んだ大きな力であつたことは間違いない。

(注1) この論文は一九六六年末頃にすでに完成していたが、還暦記念論文集の刊行が、編集部事情その他で非常に遅れ、一九六七年となった。その間に中尾佐助著の『栽培植物と農耕の起源』(岩波新書、一九六六年)が刊行され、それが照葉樹林文化論の最初の公表の場となった。だが、執筆の時期からみれば「農業起源論」における照葉樹林文化の提唱が最初である。

(注2) 社会の重層化や重層異質社会の問題点などについては、谷泰「乾燥地域の国家——オープンランドにおける重層異質社会」川喜田二郎・梅棹忠夫・上山春平(編)『人間——人類学的研究(今西錦司博士還暦記念論文集)』(中央公論社、一九六六年)の中で詳しく論ぜられている。

(注3) 世界の生態気候区分については、上山春平編『照葉樹林文化』(中公新書、一九六九年)の中で、吉良童夫氏が地図を示し、詳しく論じている。

(注4) 中尾佐助「照葉樹林文化論の誕生」、中尾佐助・佐々木高明(共著)『照葉樹林文化と日本』くもん出版、一九九二年、二二二頁参照。

(注5) 一九六三(昭和三八)年は、戦後の日本経済の発展と外貨事情の好転を背景に、文部省が初めて「科学研究費補助金」に「海外学術調査」の枠を創設することに踏み切った年で、江上波夫(東大)を代表者とする「第四次イラク・イラン学術調査」のほか、七つの調査隊に補助金が交付されている。その中に今西錦司を代表者とする「第二次アフリカ学術調査」と川喜田二郎を代表者とする「第三次東南アジア稲作民族文化総合調査」の二隊が含まれていた。これらは科学研究費による海外学術調査の嚆矢に当たるものである。



# 京都大学アフリカ研究の礎

## —人文科学研究所時代

それはゴリラからはじまった

年譜によれば、今西錦司先生を初代教授として京都大学人文科学研究所（以下、人文研と略称）に社会人類学部門が創設されたのは九五九年とある。その前年の二月、今西先生は伊谷純一郎氏とともにアフリカに向かって飛び立っていた。今西先生のはじめのアフリカ行である（注1）。

このアフリカ行は（財）日本モンキーセンターからの遠征（第一次）で、アフリカにおける野生ゴリラの予備調査と欧米の動物園におけるサル類の収集と管理の実状調査が目的であった。このとき今西先生はウガンダのムハラ山ではじめて自然状態のゴリラを観察している。そして翌年の五九年には、この予備調査を継続するため河合雅雄氏と水原洋城氏がアフリカへ向かい（第二次）、ウガンダそしてコンゴで野生ゴリラの調査をおこなった。この年、人文研に社会人類学部門が創設された。すなわち人文研に社会人類学部門ができたとき、初代教授となる今西先生はすでにアフリカに向けて疾走をはじめたのである。

六〇年には伊谷氏が単独でアフリカにおもむき（第三次）、新たに野生チンパンジーの調査地を探索し、それらの情報をもとに、今西先生は翌年からスタートする京都大学をベースとするアフリカ調査計画を立案しつつあった。これが六年から二年計画の、当時の文部省からの国費による「京都大学アフリカ類人猿学術調査（以下、類人猿調査と略称）であった。この計画は、野生チンパンジーの生態を長期にわたって観察するための半永久基地の建設を含み、また類人猿班のほかには社会人類班も設けるという壮大な計画であった。

この学術調査は、六二年度に入り本格的準備をはじめ、鉄骨プレハブ建築資材を含む三〇トンにおよぶ荷物を送りだし、二月には現地での活動を開始した（注2）。類人猿班は、当初タンガニーカ湖畔

はたのぶゆき  
端 信行

兵庫県立歴史博物館館長／国立民族学博物館名誉教授

に設けられていたチンパンジーの保護地域ゴンベストリームを調査対象としていたが、すでに現地に入っていたイギリス人女性のグドール（ジーン・グドール）の調査が続行され日本隊の調査が許可されなかったため、州都キゴマから南へ約一〇〇キロメートルのカボゴ岬付近の樹林帯にチンパンジーの生息を観察し、カボゴ基地として鉄骨プレハブの長期観察基地を建設して調査を開始した（注3）。また人類班はタンガニーカ北部のエヤシ湖から五キロメートルほど離れたサバナにキャンプ地を設定しエヤシ基地とした（注4）。周囲は牧畜民ダトーガや狩猟民ハツアツピのテリトリーで、このキャンプから南に約六キロメートルのところにはマンゴラの集落があり、さまざまな民族が混住した生活が展開されていた。

### 京都大学アフリカ研究会

こうして二年計画の「類人猿調査」がはじまったが、その二年目の六二年二月「京都大学アフリカ研究会」が発足した。これは、学術調査のいっぽうで研究内容を単なるアカデミズムに終わらせることなく、アフリカについてひろく啓蒙運動をはじめ、とりあえず学内でアフリカの理解者やアフリカへ行くという学生を増やそうという目的で結成されたのだった。そしてその発足記念として、一週間にわたって「公開アフリカ講座」という講習会を当時の人文研分館の大会議室で開催した（注5）。

この「京都大学アフリカ研究会」の発足は、社会人類学部門のアフリカ研究の方向を一段と拡大することになった。その特質は六三年からの調査隊に如実に顕れる。六年からはじまった「類人猿調査」は六三年からさらに二年間継続延長されることになったが、この調査隊の派遣と「京都大学アフリカ研究会」の派遣とが合体して、六三年には「京都大学アフリカ学術調査隊」が派遣されたのである。この調査隊では、両基地を中心に調査隊員が拡充

（注1）今西錦司「私の履歴書」『今西錦司全集第一〇巻』講談社、一九七五年

（注2）一九六六年の「京都大学アフリカ類人猿学術調査隊」には、建設班として当時大阪府企画課に勤務していた片寄俊秀技師（京都大学工学部修士課程修了）が参加し基地建設を指揮した。片寄は後にこのときの体験記「ワナ・トシの歌」を上梓。この著書がきっかけとなって羽仁進監督・瀧美清主演の「ワナ・トシの歌」（一九六五年）として映画化も進められた。

（注3）六年から六二年にかけて類人猿班に参加したのは、伊谷純一郎（京都大学理学部助教授）、東滋（大阪市立大学理学部博士課程）、豊嶋顕達（京都大学理学部修士課程）の三名である。

（注4）六年から六二年にかけて社会人類班に参加したのは、富川盛道（北海道大学文学部助手）、富田浩造（北海道大学文学部修士課程）の二名である。なおこのときの「類人猿調査」には特別参加があり、六二年八月には桑原武夫（人文研所長、京都大学アフリカ類人猿学術調査委員会委員長）が、同年十月には高木隆郎（京都大学医学部助手）がいずれもエヤシ基地を視察訪問した。

（注5）この公開講座は、ハンナイな新書版としてまとめられて、筑摩書房から今西錦司編「アフリカ大陸」（一九六三年）として出版された。

（注6）類人猿班には、伊谷、東、豊嶋に加えて、伊沢敏生（京都大学理学部修士課程）、川辺宗規（大阪市立大学理学部助手）、鈴木晃（京都大学理学部博士課程）の三名が参加し、六四年も継続して調査をおこなった。人類班では、富川、富田の二名に加えて、梅棹忠夫（大阪市立大学理学部助教授）、和崎洋一（京都大学人文科学研究所研究員）が参加し、六四年からは藤岡喜愛（人文研助手）、林薫（長崎大学風土病研究所講師）、日野舜也（北海道大学文学部研究生、和田正平（北海道大学文学部研究生）が調査に加わった。また新たに医学班として、浅井東一（浪速病院院長）が参加し、特別参加として

され、それぞれの調査の充実が図られたほか(注6)、学生隊員の派遣もおこなわれた(注7)。また特記すべきは、この調査隊では映画班が編成され、両基地での調査活動を中心に『ジャンボ・アフリカ』などが製作され、わが国ではじめての本格的なアフリカ映像記録となった(注8)。

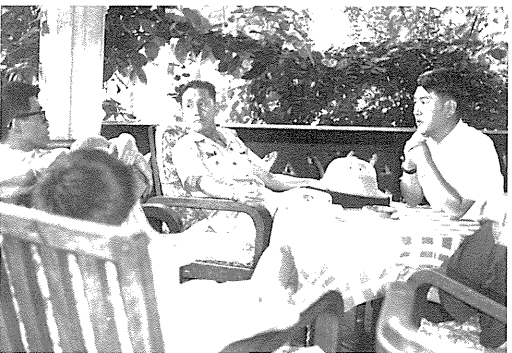
こうしてその活動範囲が拡大し、また帰国後の資料整理等の必要性から、人文研分館の裏庭にプレハブの資料準備室が設けられ、写真資料や映像資料の整理がおこなわれるとともに「京都大学アフリカ研究会」の活動拠点ともなった。六五年三月に今西先生が京都大学を定年退官され、社会人類学部門は梅棹忠夫先生が就任され、この資料準備室は梅棹先生がその管理を引き継がれた。そして一九七四年に国立民族学博物館(以下、民博と略称)が創設されたとき、梅棹先生の民博館長への就任とともにこの資料準備室に残っていたすべての資料は民博へ移された。その後、整理のついでに資料から順に、それらはすべて民博の情報管理施設へ移管され現在も整理が続いている。



1963年、第2次アフリカ学術調査の壮行会で挨拶する今西錦司隊長、手前は中尾佐助



1963年、アフリカ調査のひとつ、奥に座るのが今西錦司



1963年、現地地で打ち合わせをする今西錦司(中)、梅棹忠夫(右)、伊谷純一郎(左)

## Kyoto University African Studies ほか

以上のように、人文研の社会人類学部門の研究活動は、その発足時から今西、梅棹両先生を通じて、アフリカ研究が大きな比重を占めていたと言えるだろう。そして、それらの成果はさまざまなかたちで残されてきた。その代表的なものは、英文による研究年報 *Kyoto University African Studies* (注9)、『アフリカ社会の研究』(注10)であろう。そのほかにも多くの出版活動がおこなわれた。調査隊に参加した研究者の出版物まで入れるとその数は膨大な数に上るのであろう。

またすでに述べたように、出版物以外にも民博に収蔵されている映像記録や写真資料などは、今日からみるとすでに半世紀前の記録である。その希少価値はあらためて言うまでもない。またエヤシ基地を中心に活動した人類班は、その基地の撤収に際して、調査活動中に蒐集した民族資料二三点を日本にもちかえった。それらはいま、京都大学総合博物館の地図・民族資料研究展示室に収蔵されている(注11)。

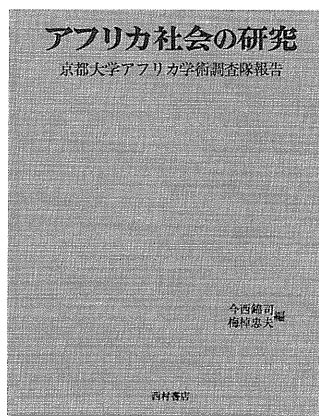
桐野忠大(東京医科歯科大学歯学部教授、川那部浩哉(京都大学理学部講師)が現地を視察訪問した。

(注7) 人類班に、六三年度学生隊員として、京都大学文学部学生の谷口稜、端信行の二名が参加した。そして六四年には農学部学生の福井勝義が参加した。

(注8) 映画班は村上進(ハイスピリット・プロモーション、ディレクター)、河端繁(フリー・カメラマン)、小泉隆三(フリー・カメラマン)の三名であった。

(注9) 京都大学アフリカ学術調査の正式報告は、欧文誌 *Kyoto University African Studies* として人文研社会人類学部門で編集され、一九六六年三月に第巻を刊行した。以後ほぼ毎年一冊を発行し、七五年に第10巻を刊行した。

『アフリカ社会の研究』西村書店、一九六八年



(注10) 今西錦司、梅棹忠夫(編)『アフリカ社会の研究』京都大学アフリカ学術調査隊報告』西村書店、一九六八年

(注11) 端信行「陳列館標本資料室から総合博物館地図・民族資料研究展示室へ——東アフリカ民族資料類末記」京都大学文学部地理学教室(編)『京都大学文学部地理学教室百年史』ナカニシヤ出版、二〇〇八年

(記載した参加者の所属等は参加当時のものである)

# ユーラシア遠征の旅

さかもとさだお  
 阪本 寧男  
 京都大学名誉教授

私は学生時代（一九五〇〜五四年）に京都大学農学部で植物遺伝学を専攻したが、研究の材料となったものは、コムギとその仲間たちであった。コムギがどんな野生祖先型植物から由来したか、私はそのルーツを探ってみたいと考えていた。また、コムギの近縁植物にはオオムギやライムギが含まれるが、これらはすべてイネ科のコムギ連（Tribe Triticeae）に属し、その中に多くの属や種が見出されるので、それらの系統関係を遺伝的に明らかにしたいとも思った。そのため、ムギ類のふるさとである中近東地方を中心とした地域を訪ね歩き、さまざまな野生種を収集して調べる必要があった。

その当時は今とちがって国内には敗戦の混乱と疲弊が色濃く残っており、学生が海外を旅することは夢のまた夢の時代であった。しかし、一九五五年に京都大学から派遣された京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊は、私の夢を刺激するとてもない壮挙であった。

## ムギとその近縁植物の探索

私の願望が実現したのは、三六歳の一九六六年の夏で、京都大学コーカサス植物調査隊の一員として、旧ソ連のトランスコーカサス地方（アゼルバイジャン、アルメニアおよびグルジア共和国）を旅した。外国人に対する旅の制限は厳しかったものの、多くのムギ類を収集することができた。この初めての海外調査で、さまざまな野生植物や栽培植物、村々の佇まいやそこに暮らす人びと、半砂漠ステップ森林帯といった多様な自然景観に接し、フィールドワークの虜になってしまった。その魅力とは、何が見付かるか、どんなことが起こるか、とにかく非日常的な事象にしばしば遭遇し、自分がそれらにどのように対応できるかを体験できたことである。

さらに七〇年の夏、私は京都大学メソポタミア北部高地植物調査隊に参加し、イラク、トルコ東部およびイラン西南部を二ヶ月間旅行した。ザグロス山脈の山麓やアナトリア高原の広大なステップ帯やカ

シの疎林帯に群生する野生コムギや野生オオムギ（写真1）、さらに多くのコムギ連植物の広範な調査・収集をおこなった。

当時はイラク領のザグロス山麓を旅するにはイラク政府の特別の許可を必要とした。この地方に居住するクルド族は自治権を要求してイラク政府と内戦を続けていたためにイラクーイラン国境は完全に閉鎖されていた。現地ではしばしばイラク軍や私服の検問に遭遇したり、採集に熱中していると突然クルド族の民兵に取り囲まれたり、イラン領内の国境守備隊にすんでの所で狙撃されそうになった。そのような状況の中で、コムギ連植物一二属四九種二五二系統を収集することができたことは、まさに幸運という以外の何物でもなかった。

七九年、IBPGR（国際植物遺伝資源委員会）によって、スペイン北部アスツリアス地方にのみ残存的に栽培されている古いタイプのスベルタコムギおよびエンマーコムギ、ならびにマメ類の調査隊が企画され、私はムギ類の遺伝資源を担当する隊員として参加した。カンタブリア山脈北面の山村四三集落を訪ね、収集活動をおこなった。

八〇年には、後述するユーラシア西南部農牧文化複合の研究の二環として、ギリシャ全域にわたり野生コムギとその近縁植物の調査をおこなった。さらに、八八年には、木原記念財団、四川農業大学およびスウェーデン農科大学の合同調査隊に参加し、中国四川省西南部およびチベット高原において、コムギ連植物の広範な調査を実施した。

## イネ科雑穀を求めて

一九六七〜六八年には京都大学大サハラ学術探検隊が派遣され、私は植物班の一員として、アフリカ東北部のエチオピアをくまなく旅し、さまざまな栽培植物の調査・収集に従事した。この旅でアフリカ原産のテフ、シコクビエ、モロコシ、トウジンビエという四種のイネ科雑穀に初めて接し、それらの素朴な美しさ、栽培法、利用法に魅了された。これが動機となって、その後日本国内、韓国、ネパールの山



写真1 カシの疎林と野生コムギの群生 (イラク・クルディスタン)



写真2 シコクビエの穂刈りによる収穫風景 (インド南部)

村において、アワ、キビ、ヒエ、シコクビエ、モロコシなどの雑穀を調べること始めた。

人文科学研究所の谷泰教授を代表者に組織された「ユーラシア（西南部有畜農耕社会の比較文化研究）」調査隊では、七七、七八、八〇、八二年の四回にわたり、アフガニスタン、トルコ、ギリシャ、ルーマニアにおいて、アワ、キビなどの雑穀、ムギ類やその随伴雑草の調査に従事することになった。

七七年、谷さんと私は共同研究の可能性と調査許可の取得などのために、これらの国を訪ねて予備調査を実施した。アフガニスタンではカーブル大学のコムギ専門家のグル教授に会って協力を求め、政府から翌年の七八年四月に首都でクーデターが起こり、ソ連に後押しされた社会主義政権が誕生した。

七月にカーブルを訪ねると雰囲気は「変し、町の中心部に戦車の残骸が放置されたままで、前年許可を取得した政府はすでに存在しなかった。グル教授はきびしい状況のもとでわれわれのために骨を折ってくださり、幸いにも新政府から改めて調査許可を得たが、東北部山岳地帯のバタクシヤン地方に限定された。その後、七九年二月二四日のソ連軍のアフガニスタン侵略により、残念ながら八〇年と八二年の調査は不可能になった。これがその後三〇年にわたるこの国の混乱と混乱の始まりであったとは、そのときは知るよしもなかった。

ともあれアフガニスタンではバタクシヤン地方のアワとキビ、ムギ畑に随伴する雑草ライムギと雑草エンバクを調べ、このような雑草からライムギとエンバクが栽培化された過程を推察した。トルコではキビがあちこちに栽培され、甘い挽き割り粥が食べられていた。ルーマニアではキビは激減していたが、伝統的挽き割り粥の存在を確かめ、かつてモルダヴィア地方の王は「キビの王」と称されていたことがわかった。帰途、フランス、ロワール川流域のアワの栽培地帯を訪れ、この地方にもアワを素材とした挽き割り粥があり、ヨーロッパでは夏作のアワやキビが人びとの食生活を支えてきたことが判明した。

## インド亜大陸独自の雑穀農牧文化

旧大陸における雑穀栽培の歴史を考察すると、その重要なセンター

はアフリカ、インド亜大陸および東アジアである。とくにインド亜大陸では独自の雑穀（サマイ、コド、インドビエ、ライシヤン）と、アメリカから伝播したシコクビエ、モロコシ、トウジンビエが古くから栽培され（写真②）、独自の雑穀農牧文化が成立した。

そこで、八五、八七、八九年の三ヶ年にわたり、私が代表者となって「インド亜大陸における雑穀栽培とそれをめぐる農牧複合の研究」という現地調査をとりおこなった。さまざまな雑穀の変異と特性を分析し、数種の雑穀の二次作物起源、ならびにその食文化を調べ、とくにインド南部では米のみでなく、これらの雑穀がマメ類と組み合わさって、調和のとれた食べ物として人びとの健康に寄与していることがわかった。

八七年には、パキスタン北部カラコラムのチトラール、フンザ、ギルギットおよびバルチスタン地方の山村を訪ねて、アワとキビの詳細な調査を実施した。その結果、カラコラム山村には地域的に明瞭に異なる三型のアワとキビが伝統的に栽培されており（写真③）、とくにチトラール地方のものは、国境を挟んで西のアフガニスタンのバタクシヤン地方のものとはほぼ同のタイプのものであることが判明した。

今も思い出すのは、バルチスタン地方の調査が済み、スカルドからインダス川源流を下りギルギットに向かったときのことである。季節はずれの雨が降り、行く手ニヶ所の谷間から土石流が大量に流れ出し、道は通行不可能となった。また、いきなり落雷のような大きな音が聞こえたと思うと、すぐ目の上の岩山の一角が崩れて目の前に猛烈な音とともに落下してきた。びっくりして人びとも安全な場所を避難した。谷間の警察署で二日間お世話になり、二日間谷間の道を落下した岩を乗り越えて歩いてスカルドに引き返した。やがて軍隊が出動して二週間かけて道路の改修を行い、やっとのことギルギットにたどり着いたのだった。

私のユーラシア遠征の旅は、一九六六年から一九八九年までの三三年間にわたるものであったが、それは谷さんたち人文研の海外学術調査の流れ、さらにカラコラム・ヒンズークシ学術探検ならにさかのぼる京都大学の海外調査・探検の伝統のなかで実現したものである。現在のように各地における長期にわたる国際紛争や内戦が勃発する以前であったことは、真に僥倖な調査行であったといえるであろう。



写真③ インダス川源流域におけるアワの栽培（パキスタン・カラコラム山村）

参考文献  
阪本肇男『雑穀博士ユーラシアを行く』昭和堂、二〇〇五年、二六一頁

## コミュニケーション論通史

すがわらかずよし  
菅原和孝  
京都大学大学院人間・環境学研究科教授

ねらい

本稿では、社会人類学部門が主宰した共同研究のなかで、コミュニケーション論に関わる動向をまとめる。私自身が参画したのは、一九八八年四月からのことである。「前史」に関わる情報については、水谷雅彦氏（京都大学文学研究科）から得た。後述する論文集『コミュニケーションの自然誌』に付された「あとがき」の内容と一部重なっていることをお断わりしておく。

前史

本稿でとりあげる研究動向は谷泰名誉教授が牽引したものである。惜越ながら、以下では日常の呼称にしたがって「谷さん」と呼ばせていただく。

谷さんが組織した共同研究会には、さまざまな分野の学徒たちが引きつけられてきた。もちろん谷さんの専門分野である社会人類学に関心をもつ人びとが多数を占めてはいたが、その他にも、社会学、生態人類学、霊長類学、動物行動学、哲学、精神医学、言語学等々の分野で新しい方法論を模索していた人びとが現れては、新しい議論の渦を巻き起こした。とくに、谷さんにとって二つ目の研究会にあたる「場面行動の通文化比較」（一九八〇〜八四年度）は、日常のコミュニケーションの現場に焦点を定め、そこから人間の社会的な存在様態を解明しようという野心を真正面からうちだした。この研究会の成果が谷泰編『社会的相互行為の研究』（人文科学研究所、一九八七年）である。

この時期、谷さんは、わが国で初めて、日常会話が人類学の思考にとって豊穡な可能性を秘めたフィールドであることを予言

する論文を発表した。その延長線上で谷さんが展開した「笑い」論は、幾多の思索者を魅惑してきた人間存在の深奥から湧きあがる現象を徹底的に相互行為の文脈に据えて理解しようとするものだった。以下に述べる「コミュニケーションの自然誌」の原点はまさにここに胚胎した。

## 「コミュニケーションの自然誌」研究会

「コミュニケーションの自然誌」研究会は一九九二年四月から発足し、一九九四年三月には第二次が終了した。さらに、一九九四年四月より「コミュニケーションの自然誌Ⅱ」と題して継続され、谷さんが停年退官する一九九七年三月をもって終了した。

最初の二年間は班員すべてが共有すべき理論や問題意識を整備するために、文献紹介に多くの時間をあてた。とくに「情報」というもつとも基本的な概念から始まって、ベイトソンの冗長性、ゴツフマンのフレーム、フォコエのメンタル・スペース、マリノフスキーのファティック・コミュニケーションといった概念が詳しく検討された。第一次の二年目と三年目では、演劇、日常会話、挨拶、精神医学の治療場面、パソコン通信、霊長類の相互行為と音声コミュニケーション、さらには言語哲学等々、多彩な素材に基づいた分析が提示された。

第一次終了時の総括を挟んで、第二次の初年度には右に述べたトピックのさらに詳しい分析に加えて、言語学サイドからの研究発表が多くなった。二年目の開始時には今後のとりまとめをにらんで三回にわたって全員で中間総括を行ったのちに、関連性、演劇性、フッティング、そしてもちろんコミュニケーションといった中心的な概念の再吟味が行われた。最終年度である一九九六年の大



『コミュニケーションの自然誌』新曜社、一九九七年

部分は、論文集への寄稿原稿の読み合わせと編集作業にあてられた。全期間を通じて、班員の研究発表のほかに内外の関連分野の研究者をゲストスピーカーとして招き、それぞれに刺激的な議論を展開していただき、視野を広げることができた。

この研究は、当初は人類学的なフィールドワークの成果を発表することに軸足を置いていたが、班員の世代交代に伴い、「言語論的転回」または「認知科学的転回」をくぐり抜けたといってもよい。もっと具体的にいえば、認知言語学や会話分析の微視的で緻密な方法を追究する人びとが大きな勢力を占めるようになってきた。だが、それはけつして狭い人文主義あるいは主知主義への閉じこもりを意味するものではない。班員すべてがいささかの誇りとしたのは、この研究会がいわゆる文系／理系、フィールド派／文献派といったなわばり意識を超えて、さまざまな分野から発想された、それぞれにとつて切実な問いを融合しえたことである。

## 成果出版——『コミュニケーションの自然誌』

谷さんの退官記念パーティの直前に、大部な論文集『コミュニケーションの自然誌』（新曜社、一九九七年）が刊行された。この本は、谷さんの「まえがき」と菅原・水谷の「あとがき」を挟んで、四部で構成される。

第一部「コミュニケーション理論の余白に」では、水谷（倫理学）、木村大治（人類学）、高畑由起夫（霊長類学）が、それぞれ、情報伝達モデル批判、規則性の探索、ニホンザルとチンパンジーの音声コミュニケーションという基本的な論点について論じている。

第二部「会話のつらなりのなかへ」の冒頭で、谷さんは参与者の心内想定の時系列上の変化を微細に追跡しながら、会話における異化経験と関与について論じている。また、山森良枝（言語学）、串田秀也（社会学）、菅原（人類学）が、それぞれ、日本語終助詞の情報処理機能、会話のトピック形成のプロセス、会話における連関性の分岐を説明している。

第三部「語り手はどこにいるのか」では、串田は会話におけるユニゾンに注目し伝達モデルに対置される交感モデルを提起している。定延利之（言語論・松本恵美子（言語学）はアイロニーをコミ

ュニケーション・チャネルの観点から分析している。藤田隆則（民族音楽学）は能の地謡におけることば使用の特性を明らかにしている。

第四部「見える相手・見えない相手」では、菅原、木村は、それぞれ、異文化における交渉の論理、相互行為を打ち切るストラテジーを追究している。細馬宏通（人間行動学）は、電子ネットワークのローカル・ルールとそこに生じるトラブルの特徴を照射している。

「大理論」の復興を期待する人びとは、本書によせられた論文の多くがあまりにもミクロな世界に膨大な分析の努力を傾注していることに目をむくかもしれない。だが、われわれは、自分たち自身が生き続けている（いまここ）の現象に対する正確な記述と認識が、人間と社会に関する新しい理論へと流れこんでゆくだろうという、わくわくするような予感を抱きながらこの本を作製した。

## 現在に至るまで

人文研の共同研究会が終了してからも、「コミュニケーションの自然誌」研究会は存続し現在に至っている。谷さんの退職後二三年の長きにわたり、ヴォランティアなメンバーシップに基づいて、ほぼ毎月の第三月曜日午後二時から研究会を開催し続けている。稀に見るハードな会で、研究発表と長い討論が終わるといつもとつぶり日が暮れている。わが国最高の喫煙者率を誇る集まりだともいわれている。谷さんは、イタリアに居を移されてからも、毎年、帰国されるたびに、参加してください。さらに、この研究会から、木村大治を中心とする「インタラクティブ研究会」（通称いんけん）が分派した。つい最近、木村大治・中村美知夫・高梨克也編『インタラクティブの境界と接続——サル・人・会話研究から』（昭和堂、二〇一〇年）という成果出版を成し遂げたばかりである。

京都大学人文科学研究所社会人類学部門が主宰する共同研究会という独自のシステムがなかったら、世界にもおそらく類を見ない、分野横断的な研究潮流が生まれることはなかっただろう。部門を支えた先達諸先生たち、とりわけ谷泰先生の学恩に深く感謝している。

## 変わらぬ「やり方と思い」

Massimo Raveri  
マッシモ・ラヴェツリ

ヴェネチア・カポスカリ大学東アジア研究学科学教授

社会人類学部門創設五〇周年、まことにめでとうございます。このような記念すべき文集に寄稿させていただき、心から光栄におもいます。社会人類学部門で学んだことは、私にとつて非常に重要な経験でありました。一九七六年、私はイタリアのフィレンツェ大学にて修士号を取得した後、日本の当時の文部省の奨学金を得て、京都大学の研修員として京都に参りました。

私を研修員として受け入れてくださったのは谷泰先生でしたが、その谷先生を紹介してくださったのは、谷先生と深く親交のあった私のイタリア人恩師フォスコ・マライニーニ先生でした。マライニーニ先生は、人類学者であり、旅人であり、そしてまた作家でもありましたが、一九三五年に日本へ行き、何年もの間、京都大学で教鞭をとられていました。私が自分の研究のためにどこで勉強すればいいかと迷っているそのとき、マライニーニ先生はすぐに谷先生を紹介してくださったのです。

### 活気に満ちた知的な「山小屋」

私の研究のテーマは、初めは稲作に関係する祭りなどの年中行事についてでしたが、次第に愛知や岡山の地方にみられる冬の大神楽や、夏に行われる死と密接した儀式や行事、つまり祖先供養、無縁仏・新ほとけの供養などを中心とした研究へと移行していきましました。このため、私はたびたび京都を離れて地方の農村などへフィールドワークに出かけることがありましたが、そのたびに社会人類学部門の研究室に帰るとほっとしたものでした。

あれから長い歳月が経ちましたが、今でも研究室のことは記憶に鮮明に残っています。研究室は棚中に本が並べられ、机の上には本や書類、ファイルが積み上げられていたり、いろいろな地方から持ってこられたものが載せられていた質素な部屋でしたが、いつも教授

や若い研究者たちが出たり入ったりしていました。

当時よく私は研究室のことを、まるで登山者が利用する山小屋のようだと思っていました。そこには調和のとれた、和気あいあいとして、かつ飾らない素朴な雰囲気があったのです。

また研究室には、活気に満ちた知的な雰囲気もありました。京都大学の人類学者たちは、当時のもっとも進んだ文化人類学の理論哲学傾向と同調しており、何年もの間レヴィ・ストロースの構造主義や、社会科学における言語哲学理論といったものに影響を受けていました。谷先生と先生の学生たちとともに、ゼミや研究室で、私たちは方法論について取り組み、儀式の構造や社会的な役割、生態系概念や民族分類、言語過程と文化的力学の関係などについて議論をしていました。

当時、日本社会を研究の領域として選ぶことは、当時の社会科学において議論の中心であった方法論の問題を扱うことを意味していました。その問題というのは、複雑かつ長い歴史的發展を遂げた日本のような国の文化研究において、構造主義のような共時的分析（つまり「ethnologie」と通時的分析（histoire）の間にはどのような関係があるかという問題でもありました）。

さらに、当時、東アジア研究の中でも、特に日本について研究していた西欧の人類学者は大変少ない上に、ルース・ベネディクトの「文化とパーソナリティ論」とつながっている傾向が強くなりました。その根底に横たわるヨーロッパの中で当時広まっていた古い東洋趣味（オリエンタリズム）のようなステレオタイプから抜け出すことは大変難しかったのです。

### 実践的、観念的、そして批判的に

私にとつて社会人類学部門という場所は、厳しく物事を分析する能力を養わせてくれた学びの場所でした。



京都に滞在時に出席した京都大学の国際会議の懇親会で

谷先生や教養部の米山俊直先生、国立民族学博物館の伊藤幹治先生をはじめとする人類学者の先生方は、儀式のもつ象徴的意味というものを、実践的かつ観念的に分析するよう私を導いてくださっただけでなく、農村に住む人たちが長年培った生活経験や農村環境の特徴を敏感に感じ取るようにと教えていただきました。先生方と研究することによって、文化が形成されていく過程とともに変化する自然の生態系が、いかに重要なことであるかを教育してくださったのです。

こうして遠い昔の記憶を辿っていると、当時、研究を続けなければ続けるほど、私は迷い、行き詰まっていたことを思い出します。そんなとき、谷先生は、私の揺らいだ気持ちを落ち着かせ、心のバランスを取り戻してくださいました。時には一緒に食事をしたり、また夏の夕暮れには一緒に散歩をしたりしたものです。谷先生の落ち着きのある、はつきりとした口調が思い出されます。

先生は、私がイタリアで学び（そして理想化してしまった）日本文化の知識と、フィールドワークの場でだけでなく留学中に日常的に目の当たりにしていた現実の、よりダイナミックで複雑な日本文化に対して、批判的な目で見られるようにと指導されました。谷先生はイタリア文化にも造詣が深く、時には鋭く明晰で、時にはあたたかい笑顔をもって私の自国の文化について違った観点を指摘してくださいさたりして、私は自国文化の違った見方を知り、ハッとする思いをしたことが幾たびもありました。

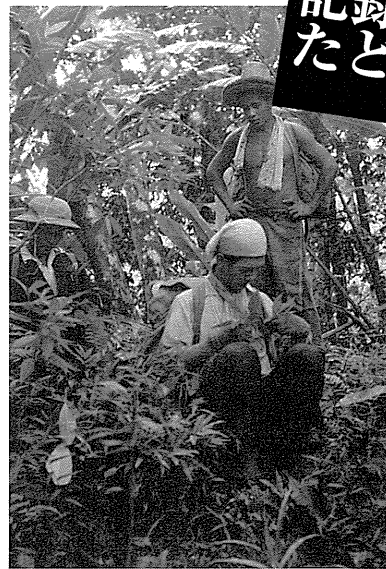
今年度、私が指導しておりますアンドレア・デ・アントーニが博士課程を修了し、研究奨学金を得て、人文研に外国人共同研究者として参ります。アンドレアの指導教員は田中雅一先生が引き受けてくださいました。こうした弟子と師の交代という時の移り変わりをとおもうと、なんだか胸をつかれるような気持ちにおそわれます。しかしながら、おそらく、私を育て次世代の若い研究者を育てることを知った社会人類学部門の先生方が、昔と変わらぬ「やり方と思ひ」をもち続けてこられたことに心から称賛し感謝しているからこそ、私はこうしたノスタルジックな思いにとらわれるのだと思います。

## 記録をたどる

# ポナペ島学術調査

1941年

1939年、旧人文科学研究所の設置と時を同じくして羽田亨京大総長を会長に立ち上げられた京都探検地理学会は、40年代前半、次々と海外へ探検隊を繰り出した。その中で白頭山(朝鮮)およびカラフト(40年)にひき続いておこなわれたのが当時、日本の委任統治領であったミクロネシアのポナペ島の学術調査で、今西錦司(当時京都大学理学部講師)を隊長に隊員は9名。2人のシニア・メンバーを除いて全員が学生で、戦後、そして人文研に社会人類学部門が設置(1959年)された後に派遣された数々の学術探検隊の要員を訓練するトレーニング・エクスペディションの性格をもつものだった。



〈上〉植物調査中の梅棹忠夫と川喜田二郎



〈左〉ポナペ島民とともに写る今西錦司(後列中央)以下、森下正明、浅井辰郎、中尾佐助、松森富夫、秋山忠義、池田敏夫、吉良竜夫、川喜田二郎、梅棹忠夫の9名の隊員たち



# 伝統のリズムにのって

——一九九〇年以後の共同研究のあゆみ

たなかまさかず  
田中雅一

京都大学人文科学研究所教授

研究会の会合は、原則として毎週二回ひらかれるというのが、ちょうどよいのではないか。(中略) とくに東京その他の地方からの参加者も、できれば毎週出席してもらおうことがのぞましいが、おそらくは困難であろうから、その人たちについては特例をもうけてもよい。(注1)

## 三つの対話

社会人類学や文化人類学を専門としてつくづく感じるのは、研究において対話——会話、議論、おしゃべり等々がいかに重要な役割を果たしてきたのかということである。最低三つの種類の対話を想定できる。それらは、まずフィールドでのインフォーマントたちとの対話(フィールドワークはさまざまな対話から成り立っている)、つぎに先人との書物を通じての対話(いわゆる先行研究のレビューを含む広くて深い対話)、最後になんらかの共同研究を母胎とする研究会での対話である。これは、同時代の研究者との対話を意味する。ゼミや学会あるいはシンポジウムの会場でももちろん同じような対話を見出すことはできるだろう。しかし、研究会では、それらとは微妙に異なる集約的かつ長期的な対話が試みられている。理想的には、インフォーマントとの対話や先人との対話の結果が研究会で発表され、数年を経るとそれらがまとめられて本になる。この本を通じてあらたな対話が直接、あるいは間接的に生まれる。こういう永遠に続いてきた学術的なサイクルの一部として研究会は重要でユニークな貢献を果たしてきたのである。以下では制度的な変化や関連事項に言及しながら、私が組織した共同研究について説明したい。

## 『暴力の文化人類学』(一九九八年)

谷先生の勧めもあって、人文研に移ってから二年後の一九九〇年に「儀礼的暴力の研究」という研究班を組織した。これは一九九四年の三月まで四年間続く。

「儀礼的暴力の研究」は、私が国立民族学博物館で勤務していたころ初めて参加した共同研究「文化的プラクティスとイデオロギー——人類学的認識論との関連において」(田辺繁治代表、一九八四―八八年)を強く意識したもので、そのメンバーもかなり重なっていた。民博の共同研究は、その名からも明らかのように、フランスの社会学者ピエール・ブルデュー(プラクティス)とルイ・アルチュセール(イデオロギー)を主題化した研究会であった。私は、ロンドン留学中にブルデューを読んで懲りていた(共感できたのは *Critique of Anthropology* のフランス特集に訳されていた論文<sup>注2</sup>くらいだった)。一方のアルチュセールには多大な影響を受けていたが、イデオロギー

(注1) 国立民族学博物館開館直前の梅棹忠夫の発言(『国立民族学博物館における研究のありかたについて』梅棹忠夫著作集 第二巻)中央公論社、一九九三年、一四一―一四二頁)

(注2) Bourdieu, P. 1979 *Symbolic Power. Critique of Anthropology* 4 (13&14) : 77-85.

論というよりも、そこで言及されている「呼びかけ」interpellationによる主体の形成という考え方に惹かれていた。アルチュセールによると、私たちは外からのさまさまな呼びかけを通じて私、すなわち「主体」になるという。アルチュセールにとって主体は、自立した「主体的な存在」ではなく、呼びかけに「従属する存在」なのである(注3)。

一九八〇年代前半のロンドン大学留学中にモーリス・ブロックの『祝福から暴力へ——マダガスカル・メリナ人の割礼儀礼における歴史とイデオロギー』(From Blessing to Violence: History and Ideology in the Circumcision Ritual of the Merina of Madagascar, 1986)(注4)のドラフトを読んだが、このでもアルチュセールが重要な位置を占めていた。ちなみに私が最初にブルデュのOutline of a Theory of Practice (1977)を読んだのも、一九八〇年のブロックによるゼミを通じてであった。アルチュセールやブロックから儀礼による「従属する主体」に関心を持ち、今村仁司氏によるアルチュセール寄りの議論(注5)に勢いづいて「儀礼的暴力」を主題とする研究会を行おうと決心したのである。「イデオロギー万歳! プラクティスくそくらえ!」という意気込みであった。その後の日本文化人類学界の趨勢は田辺、松田素二両氏を中心にプラクティスへと大きく動き出すが、私は行為そのものより行為をする人間観にこだわってエイジェント論へと向かうことになる。

「儀礼的暴力」の成果は、『暴力の文化人類学』として京都大学学術出版会から一九九八年に公刊されている。タイトルから「儀礼的」という形容が消えているが、これは、当時の出版会の編集主幹であった八木俊樹氏からの提案であった。ストレートな名前のせいだろうか、本書は版を重ねよく売れた(残念ながら今は絶版である)。

私は、序論の執筆を通じてもとの主題であった儀礼による主体化のテーマよりも広い、暴力一般について考えることができた。その成果のひとつは、人類学が異文化の暴力に対しどう立ち振るまえばいいのかという倫理的な問題を再考できたことであった。それは、異文化には異文化の論理がある、それをまず尊重すべきである、という文化相対主義への批判へとつらなる。

『暴力の文化人類学』は、私にとって最初に編集した論文集であるが、いままでの論文集の中でこの書物の序章がもつとも完成度が高い——「序章の鑑」だと自負している。というのも、この序章を読んでいただけでは分かるように、序章での議論と本書の構成は密接に関係しているのである。それはどういうことかと言うと、序章で言いたいことにちょうど対応するような論文が本書にはきちんと含まれているということである。その後の論文集で、私は同じことをなんとか試みているが、うまくいっていない。序章で言わなければならないことと、実際にできあがった論文集(つまり中身)とのあいだにある種の乖離があるのである。そのため、序章の最後にあらためて所収されている各論文の紹介をすることになる。いつかまた、『暴力の文化人類学』のような序章と中身とのあいだにずれのない論文集を編集したいものである。

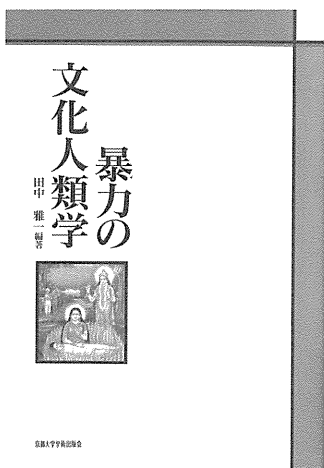
論文集はたいへん満足のいくものであったが、期待していた発表が未収録になるという残念なこともあった。暴力の研究会でのクライマックスは、井狩彌介先生の古代インド・ヴェーダ祭式における供犠論の再解釈だった。供犠は、私の研究歴において最重要のテーマだったこともあるが、当日の発表を聞いて大地が数センチ動いたと

(注3) アルチュセール、ルイ『国家とイデオロギー』西川長夫訳 福村出版 一九七三年

(注4) ブロック、モーリス『祝福から暴力へ——儀礼における歴史とイデオロギー』田辺繁治・秋津元輝訳、法政大学出版局、一九九四年

(注5) 今村仁司『イデオロギーとプラクティス』田辺繁治編『人類学的認識の冒険——イデオロギーとプラクティス』同文館、一九八八年、二二—二四五頁

『暴力の文化人類学』京都大学学術出版会、一九九八年



感じるほどの感動を覚えたものだった。発表のテープ起こしをし、そのトランスクリプトを井狩先生にお見せしてなんとか成果論文集に収めようと努力はしたが、ついに果たすことあたわず。古典文献学者の慎重さを思い知らされた次第である。

### 『ミクロ人類学の実践』（二〇〇六年）

一九九〇年代になると教養部の見直しがすすみ、京都大学に総合人間学部と人間・環境学研究科が設置された。この大学院に総合人間学部の文化人類学研究室（米山俊直・福井勝義・菅原和孝）と人文研の社会人類学部門（谷泰・田中）を核とする文化人類学講座ができたのが一九九三年のことである（後に改組されて文化人類学分野となる）。これによって、人文研の人類学関係の共同研究と大学院教育が接合する。一九九四年から四年間続いた「主体・自己・情動構築の文化的特質」研究班には、文化人類学専攻の博士課程に所属していた院生たちにも参加してもらうことになった。一期生の金谷美和さんがこの研究会で報告するのは、一九九五年のことである。

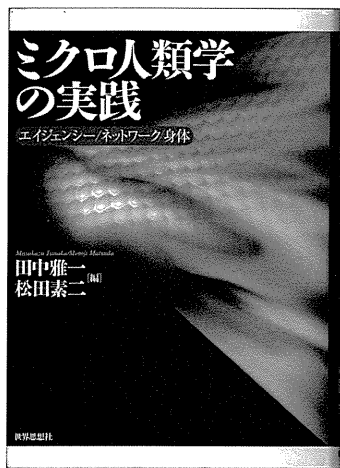
この研究会のタイトルにある「主体」からも分かるように、私はまだアルチュセールやミシェル・フーコーをひきずっていた。しかし、かれらに首つ丈というよりは、どうやって批判できるのか勝算のないまま、研究会を組織したというのが実情であった。

結論が出ないまま予定の研究期間も終わろうとしていたとき、この研究会の問題意識を継承する日本学術振興会科学研究費補助金によるプロジェクト「個をめぐるミクロ人類学確立に向けての基礎的研究——対象・研究者・パラダイムの連関的考察」が採択されるといって幸運に恵まれた。これによって、「主体・自己・情動」研究班は実質さらに三年延びて二〇〇二年まで続くことになった。

研究会の成果である『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／身体／ネットワーク』（二〇〇六年刊、世界思想社）は予定より大幅に遅れて刊行されることになったが、学術雑誌に掲載される先端的な論文では必ずといっていいほど引用されている。その理由のひとつは、本書がエイジェンシーあるいはエイジェントという概念の有効性と限界について取り組んでいたからである。

当時、エイジェントという概念はすでにアンソニー・ギデンズの著作などを通じて社会学の分野では普及していた言葉であったが、それは構造に対比される個人の言い換えにすぎず、私にははなはだ物足りない概念であった。なによりも、ここではアルチュセールやフーコー批判に使うことはできない。かれらは、そのような「主体的な個人」を批判することであらたな社会思想を形成していたからだ。私が求めていたのは、構造や社会に対比されるエイジェントではなく、呼びかけを通じて生まれる「従属する主体」に対比されるエイジェントであった。

転機は突然やってきた。一九九八年二月にトロント大学の本屋で手にしたジュディス・バトラーの『権力の心的生活』（*The Psychic Life of Power: Theories in Subjection*, 1997）に、エイジェンシー概念を使ったアルチュセール批判を扱う章が含まれていたのである。私は「儀礼的暴力」班での井狩報告に接したときと同じような興



『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／身体／ネットワーク』世界思想社、二〇〇六年

奮を覚え、その場に座って読み始めた……（ことわっておくが、外国の本屋で床に座って読むのはけっこうなことではない）。当時の私にとってバトララーは、ゲイル・ルービンやバット・カリフィアなど、レズビアンSMの先端的思想家かつ実践家を批判する保守的なレスビアン・フェミニストでしかなかったから、これはうれしい発見だった（注6）。

しかし、帰国して改めて読んでみると、彼女のエイジェンシー論にも物足りなさを感じた。『ミクロ人類学の実践』の副題にもなっている身体とネットワークへの視点が欠如していたからだ。バトララーには『身体がモノダイド』（*Bodies that Matter*）という身体論の著作があるのだが、まだまだ身体に迫りきっていない。とはいえ、バトララーとのトロント大学での「出会い」によって、私の視点も方向がはつきりすることになる。「主体・自己・情動」や「ミクロ人類学」の共同研究でやってきたことが俄然おもしろくなったのである。バトララーとの出会いは研究会の外においてではあるが、当時共同研究を組織していなければ、こうした出会いも実り多きものにはならなかったであろう。持続的な問題意識が、バトララーの再発見につながったのである（注7）。

### 『フェティシズム研究』全三巻（二〇〇九〜二〇一二年）

二〇〇〇年になると、人文研は改組されて、日本部、西洋部、東洋部の三部は前二者が統合され人文学研究部、後者は東方学研究部に再編されるとともに、大部門化によって西洋部に属していた社会人類学部門は文化研究創成研究部門の一部（人類誌分野）となる。

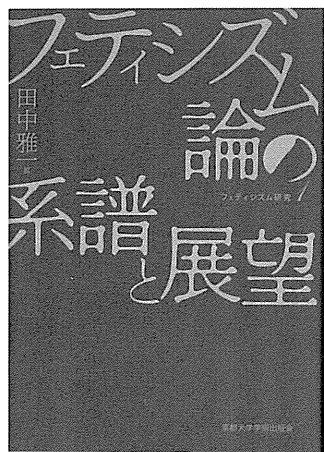
主体やら自己、情動、個人などを研究テーマにしていた反動からだろうか、モノ（物質、物品、作品、品々など）に手を出したくなった。しかし、モノはすでに人類学界では新規なテーマとはいにくかった。ダニエル・ミラーで有名なロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ（University College London, UCL）の人類学科には、私のロンドン留学時代の友人たちが就職して *Journal of Material Culture* 誌（一九九六年刊）の編集に携わっていた。スザンナ・キューヒューラーとクリス・ペニー、どちらも、物質文化や「未開美術」について新境地を開いたアルフレッド・ジエルの学生だった。かれらの仕事を横目でにらみながら、私に何ができるのか考えた結果がフェティシズムである。『ミクロ人類学の実践』では身体が主題の一つであった。フェティッシュの中で脚や髪など身体の部位はすでに古典的な位置を占めていた。ミクロ人類学との連続性を考えるうえでもフェティシズムは今回取り上げるのに都合がよかつたのである。こうしてまず「フェティシズム研究の射程」（二〇〇〇〜〇五年）を、そして二年間補足的な形で「フェティシズムの文化・社会的脈絡」研究班（二〇〇五〜〇六年）を組織した。両研究には、藤田隆則さんの後にあらたに助手になった小牧幸代さんが参加した。

フェティシズムは、呪物崇拜や物神崇拜と訳される宗教概念だが、後にマルクスとフロイトという二人の巨匠によって取り上げられ、宗教学や文化人類学、経済学、そして精神分析にまたがるきわめて領域横断的な概念となった。フェティシズムはまた、現代日本ではフェチという言葉で二部盛り上がりを見せてきた。それゆえに定義も曖昧模糊としている。フェティッシュやフェティシズムの領域横断的で現代的な性格は、障害ではなく異なる学問的背景を有する人たちからなる共同研究にはむしろふさわしい。そう思わせるなにかがフェティ

（注6） たけなほ SAMOIS 1981 *Coming to Power: Writing and Graphics on Lesbian S/M*, Boston: Alyson Publications. V Linden, R.R. et al. 1982 *Against Sadomasochism: A Radical Feminist Analysis*, San Francisco: Frog in the Well. なすを参照。

（注7） なお、ミクロ人類学の科研プロジェクトが始まる二年前の一九九七年から三年間、もつひとつ私にとって重要な研究会が実施された。関西学院大学教授の山路勝彦先生を国内客員教授として招聘して組織された「植民地主義と人類学」である。私は山路先生とはまったく面識はなかったため、客員教授の話には御本人も驚いたことだろう。この研究会は当時重要なテーマとなりつつあった人類学と植民地主義を問うもので、人類学以外の専門の方にも多く報告していた。

『フェティシズム研究1 フェティシズム論の系譜と展望』  
京都大学学術出版会、二〇〇九年



シズムにあった。そのときすでに私はフェティッシュの虜になっていたのかもしれない。

私は、一般的なモノ研究は避けたかったのだが、それではフェティッシュはほかのモノとどう違うのだろうか。端的に言えば、フェティッシュと人間とのあいだには欲望が介在しているということである。モノと人との関係は、合目的か慣習的かという差異があっても、どちらかというところ「さっぱり」している。これに対しフェティッシュと人との関係は「ねっとり」と言っているのではないか。このねっとりさから人について、あるいはモノについて考察したのがフェチ研であった。ミクロ人類学の序章で、非合理的と排除されてきた身体や情動の重要性に触れたこともあり、ここでも人間の非合理的な側面に注目したかった。また、人間中心の考え方を改めて、モノや身体の一部から考えようという視点を導入したかった。その点でフェティズムは願ってもない「胡散臭い」テーマであった。

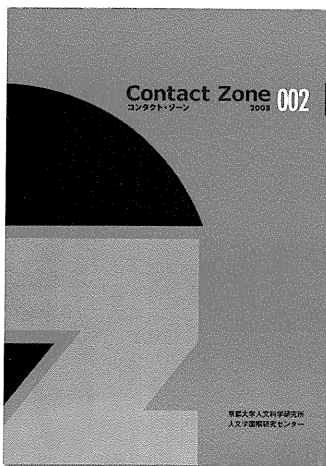
第二巻は理論編、第二巻は呪物や収集・展示、第三巻は身体、ファッション、そして「フェチ」の世界という形で、二〇一一年までに三巻がすべて出る予定である。

### 『コンタクト・ゾーンの人文学』全四巻(二〇一二年)

二〇〇六年に人文研に人文国際研究センターが設置され、私はその運営を任されることになる。このセンターは、イタリア国立東方学研究所およびフランス国立極東学院京都支部との連携のもと、日本の人文学の成果の発信拠点として、また海外の研究者や研究機関との交流を深める交流拠点として設置された。もう一人の専任スタッフである稲葉稜氏の力を借りてセンターの基幹プロジェクトとして始めたのが「複数文化接触領域の人文学」(二〇〇六―一〇年)である。これには小牧さんに替わってあらたに助教となった小池郁子さんが二年目から参加することになった。

複数文化接触領域、すなわちコンタクト・ゾーンは、アメリカの文学研究家のマリールイーズ・プラットが『帝国のまなざし——旅行記とトランスカルチユレーション』(Imperial Eyes: Travel Writings and Transculturation, 1992)で発案した概念である。彼女はヨーロッパを中心とする植民地宗主国(厳密には都市部であるメトロポリタン)と非ヨーロッパ諸国(およびヨーロッパの非都市部)との非対称的な、しかし二方的ではない、「接触」が生じる領域をコンタクト・ゾーンと想定している。ただし、私たちの研究班では、彼女の問題意識を継承しつつも時代的には古代や中世も視野に入れ、文化史的な交流からグローバル化の典型とされる移民や観光現象まで、また文化・社会的な次元から国際結婚のような個人的な経験まで含めた「他者」との出会いと、それによって生じる社会関係の広がりやコンタクト・ゾーンとみなすことにした。

『コンタクト・ゾーンの人文学』全四巻の編集は始まったばかりである。その趣旨説明で私は「グローバル化が進む現代社会において人文学はどのような知見を提示し、私たち人類が歩むべき道を示すことができるでしょうか」と問いかけ、これまでの人文学が欧米中心主義や一国民族主義的な視点からなかなか脱皮できず、日々変貌する現代社会の要求に応えることができていると指摘している。いままお偏狭な視野を維持し、これを擁護しようとする人文学の保守的な傾向には大学の講座制が密接に絡んでいることは想像に難くない。こ



『コンタクト・ゾーン』二〇〇七年

れを克服するには、制度的な改革とそれを正当化するあらたな視点が求められなければならない。たんに対象を拡大するだけでは根本的な解決にはいたらないのである。

「複数文化接触領域の人文学」研究班では、「開放系としての人類社会」という視点を提唱してきた。これは、欧米列強による植民地支配や現代進行中のグローバル化の人類史的な意義を認めつつも、人類社会は、古代よりなんらかの影響を外部から受けながら生まれ、発展し、変化していったという立場である。

コンタクト・ゾーンはまた、文化人類学が直面しているフィールドの変貌を考えるうえでもたいへん示唆的で、文化人類学を専攻する多くの若い研究者や大学院生に参加してもらった。人類学の対象であった「未開社会」が消滅すると言われて数十年が経過しているが、領土、言語、人、文化がきれいに対応する世界（トライバル・ゾーン）は、そのような警告が発せられるよりずっと前に崩壊していたと考えるべきであろう。あたかも対応する世界があるかのようにして私たちは異文化を記述してきたし、そうすべきだと信じてきた。この理念にそって以下のような態度がフィールド選定の際に生まれる。まず、もともと伝統的と思われる社会や文化——秘境や辺境と言っているいかもしれない——を探し求め、そこでフィールドワークを行おうとしてきた。つぎに伝統と異なると思われるようなことがらにフィールドで出会っても、これにはあえて触れないようにしてきた。トライバル・ゾーン志向の態度によつて伝統社会が記述され「創出」されてきたのである。

コンタクト・ゾーンという視点はこのような人類学の考え方を修正し、過度の「伝統化」を避け、より実態にあつたフィールドワークを提案する。さらに、西洋的価値に「汚染されている」とみなされてきたような社会や文化をも研究の視野に入れることを提案する。こうした態度に基づく文化人類学こそ、グローバル時代における人類学によりふさわしいと考えるのである。最後に、人類学者と現地の人びとの関係もまた重要なコンタクト・ゾーンととらえることでフィールドでの人類学者自身のありかたをも考察や記述の対象にしようとしている。本研究は人文学を名乗っているが、文化人類学においても意義深い共同研究であつた（注8）。

### 外国人研究員と京都人類学研究会

以上、共同研究会について主として企画・組織する側から話を進めてきた。共同研究は、あらたな知と人との出会いの場である。この点で見逃せないものとして外国人研究者の招聘制度と京都人類学研究会がある。

人文研では原則半年間、毎年四名を外国から招聘し、研究会に参加してもらうことができる。この制度を利用し、私は、シンガポール大学（当時）のティモシー・ツォ（一九九七年）、ライデン大学の故ヤン・ファン・ブレイメン（二〇〇二～〇三年）、カリフォルニア大学のサビーネ・フリューシュトゥック（二〇〇三年）、エルサレム・ヘブライ大学のイアン・ベン・アリア（二〇〇五～〇六年）、オーストラリア戦争記念館の田村恵子（二〇〇九年）、そしてスコットランドにあるスターリング大学のティモシー・フィッツジェラルド（二〇〇九年）の六名を招聘した。二〇一一年度にはさらに二名の招聘を計画している。かれらとの密な交流を通じて、共同研究もまた刺激を受けて発展してきた。何人かが京都滞在中に本を書き上げているのは、望外の喜びでもある。

招聘した六人のうちツォ、ファン・ブレイメン、田村の三氏は民博勤務の時に知り合った外来研究員だった。



（注8）本研究会の発足と同時に『コンタクト・ゾーン』という雑誌を出版することになった。二〇〇七年に創刊され現在二号まで出ている。

京都人類学研究会二〇〇九年七月季節例会「接待の人類学」より

またフィッツジェラルド氏は客員助教として民博の英語誌を担当していた。他の人たちは、私が二〇〇三年から始めた軍隊についてのプロジェクトに関係していた(注9)。たとえば、フリーシュトゥック氏は京都滞在中精力的に自衛隊の調査を行っていた。また、自国のイスラエル軍についての著作や自衛隊についての論文を執筆しているベン・アリ氏とは在日米空軍基地がある三沢で国際会議を開催することができた。田村氏は、従軍看護婦の調査をされていたこともあり、軍隊の研究会でも報告をしていた。

谷先生が一九九七年に退職されるすこし前に、近衛ロンドの改革が実施され、京都人類学研究会が新たに発足した。これは、京大に文化人類学を学べる大学院ができたために、教育機関として出発した近衛ロンドの役割は終結したという認識と、京都を中心に学内外の人類学を専門とする研究者や学生が集うことのできる場所にしようという意図による。

近衛ロンドと同じく、京都人類学研究会もまた人文研の活動と密接に関係している。たとえば、一九九六年二月に開かれた第一回のシンポジウムは私が企画した「暴力の人類学・人類学の暴力」だった(注10)。二〇〇二年七月には、「記憶と記念碑をめぐる人類学と歴史学の対話」という名前で「植民地主義と人類学」研究班(注11)に関わるシンポジウムが開催され、外国人研究員として招聘していたファン・ブレイメン、ツィ両氏が報告をした。さらに、二〇〇四年七月には「フェティシズム研究」研究班と連携して「複製技術時代の文化人類学」というシンポジウムを企画した。ここで私は「複製技術から複製技術へ」というタイトルで問題提起を行い、「複製技術時代の芸術」の著者、ワルター・ベンヤミンが念頭においていたのは写真や映画であったが、この季節例会では、それだけでなく複製技術の前史としての複製技術や呪術、また模倣や身体の再生技術なども考察の対象とすることで、現代社会における文化人類学、ならびに現代社会についての文化人類学の可能性を探りたい」と述べている。

## おわりに

以上、駆け足で社会人類学部門の歩みを私が組織した共同研究を中心に振り返ってみた。

大学院や人文国際研究センターの設置の影響を受けつつ、国内客員や外国人研究員の招聘制度を利用してこれまで共同研究を組織してきたが、ここまでできたのは、参加した多くの方々の熱意と人文研の主たる活動が共同研究であるという所内の合意があつてこそである。二〇一〇年度から人文研は「全国共同利用・共同研究の拠点」となり、班員を全国から公募できるようになった。しかし、私はこれまでどおり月曜日に隔週で、年に二〇回から三五回くらいの頻度で研究会を行い、密な交流を重ねていく人文研のスタイルを守っていたと考えている(注12)。最初に人文研の研究会に参加したときは、この頻度には戸惑ったものであるが、いまではそれがむしろ心地よいリズムとなつて身体化されている。冒頭で引用した梅棹忠夫の言葉からも分かるように(彼は隔週ではなく毎週の開催を想定していたようだが)、このリズムこそが社会人類学部門の五〇年の伝統の証であり、また未来へと引き継がれるべき実践なのであろう。

(注9) 京都大学教育研究振興財団二〇〇三年度助成事業「アジアの軍隊の文化人類学的研究——ジェンダー規範、地域社会、表象を中心に」、科学研究費補助金基盤研究(B)「東アジアと東南アジアの軍隊に関する歴史人類学的研究」(二〇〇四年～〇七年)、同「アジアの軍隊にみるトランスナショナルな性格に関する歴史・人類学的研究」(二〇〇八年～二年)。

(注10) なお、二回目は谷先生の退職を記念し、一九九七年三月に「牧畜文化の形成と展開」と題するシンポジウムを開催している。

(注11) この研究会については注7を参照のこと。

(注12) 二〇一〇年度からは「トラウマ経験の組織化をめぐる領域横断的研究——ナラティヴからメモメントまで」という研究班を組織することになった。

## 人類学と地域研究

——人文研で学んだこと

たなかあきお  
田辺明生京都大学大学院アジア・アフリカ地域  
研究研究科教授

## 〈人間と環境〉への視点

人類学の最終的な問いは「人間とは何か」であり、地域研究のそれは「私たちが生きる場としての地域はいかなるものか」である。人間とその生きる環境とは切り離せない。生命・生活の営みは社会・生態的環境との相互作用においてこそ成立する。呼吸すること、食へること、性的な交わりを持つこと、おしゃべりをするなど、あらゆる〈生〉の営みは、人間と環境のあいだで物質情報を交換することからなる。その〈人間と環境〉という人生のユニットに対して、人類学は人間のほうからアプローチし、地域研究は環境あるいは場のほうからアプローチする。私の理解では、人間の生を理解するにあたって、両者は補完的である。

京都大学の人類学および地域研究の特徴は、人間の生における空間性と身体性、つまり〈その場に在ること〉の重視にあると私は考えている。その源は、西田幾多郎の「場所の論理」や今西錦司の「棲み分け理論」などに求められるだろう。西洋の哲学や歴史学の多くが、人類や民族や個人といった主体を措定したうえで、その主体がいかに歴史的に発展していくのかという主体の時間的変容に注目してきたのに対して、京大の人類学や地域研究は、いかなる主体が空間的・関係的に構築されているのかを問うてきた。それは上に述べた、〈人間と環境〉をひとつのユニットとしてみるということと通じる。こうした視点はおのずから、人間が身体性をもつてある特定の場に位置を占めること、そしてその主体が他の生命体や事物との関係性において固有の生きる場を形成していること、への注目へとつながっていった。つまりそれは、ひとつの目的論的な歴史観を拒否し、世界における多元的で固有な主体（関係性の中の生命体）と環境（生きる場としての地域）に注目したのであった。

〈人間と環境〉の相互作用的な構築への視点はさらに、人間の個性性と共同性の媒介についての思考へと発展した。人間は二個の身体存在として固有の経験を持つものであると同時に、自らの経験を人にコミュニケーションし、また他者の経験を理解・想像・類推することができる。そして人間は他の人間の経験だけでなく、他の生命体や物の立場に立つて感じたり考えたりすることもできる。莊子を引くまでもなく、人は、水に泳ぐ魚の楽しさを人なりにわかるのだ。さらに人間は、自己、他の人間、生命体、物との関係性の新たな関係の可能性を想像・構想し、その実現のために世界に対して働きかけることができる。

これは人間と環境の新たな関係性のありかた、つまり新たな〈生のかたち〉を構想し、その実現に向けて行なうことができるということだ。このことは人間が自分以外の立場に立つてものを考えたり想像したりする



能力を持つことと関連している。人間は身体を持ちつつ、共感と記号の能力を通じて、「今ここ」から脱した思考をすることができる。こうして人間は、(その場に在る)ことを基盤としながら、自己と環境における過去と現在の関係性を再帰的に吟味し、その未来の新たな可能性を想像・構想できるのだ。

## フィールドのなかからの知

京大の人類学と地域研究で重視されるフィールドワークは、こうした人間の環境理解の能力を学術的に用いようとしたものである。それは単なる仮説証明のための現地調査とはまったく異なる意味を持つ。

フィールドにおける現実には混沌としている。しかし不思議なことに人間は、自らの育った環境とは違う環境でも、しばらくそこに生活し、その新しい環境との相互作用を続けていると、その環境について何事かを了解することができる。それは経験の蓄積を踏まえたうえでの、(直観)の作用である。環境世界を理解するうえで決定的に大事なものは、関係性の(かたち)を把握することであり、それは、既存の命題から結論を論理的に導く演繹(ダイダクション)や、複数の類似の事例から一般化した命題を導く帰納(インダクション)によつてのみでは得られない。むしろ身体存在にとつての世界理解は、経験とイメージからの推測を通じた直観的認識、つまりアブダクションといわれる認識作用によつて獲得されるものである。

アブダクションとは、経験的に観察された諸事実を最も適切に説明する理解の枠組みを推論することである。煙をみて火事が起きているかもしれないと思ったり、顔色が変わったのをみてその人が怒ったのを感じとったりといった如くである。その認識は、頭の論理だけで行うものではなく、身体全体で経験を蓄積することを通じた世界了解であるといえよう。アブダクションによつて、自己をとりまく関係性のかたちを理解し、自分が生活する環境を把握することができる。環境の意味を知るとは、自分と他者と事物とがどのような関係性におかれているのか、その関係性のなかで自分および他者はどのような行為をすることができるのか、そして、そうした行為はその関係性をどのように変える可能性があるのかということを実践的に知ることである。それは、対象についての客観的な知(knowing that)や、目的達成のための技術知(knowing how)とは異なり、生きる場のなかからの知(knowing from within)であるといえるだろう。

そして人類学また地域研究とは、フィールドに在りつつ、自社会の人々が通常は理解できにくいような生とその環境のかたちについてフィールドワークという生の経験の蓄積に基づくアブダクションを通じて把握し、それを理解できるように翻訳する営みである。京大での「とにかくフィールドに行つて来い」という学生への指導には最初は少々戸惑ったものの、フィールドにおける(直観)が重要視されること自体は、理論的にもきわめて正統である(注1)。

## 個から広がる世界の総合理解

私がこうしたことを曲がりなりに少しずつ理解できるようになってきたのは、京大という環境に身を置いて暮らして、その知を身体化してきたからかもしれない。私が一九九八年に京都大学に赴任してきたときに、

(注1)ただここで学生諸君のために付け加えておきたいのだが、何も準備をせずにただフィールドにいけばよいというものではない。本を読む必要なんかない、と京大でしばしばいわれるのは、真理はフィールドにこそあるから、そのことは間違いない。フィールドで頭でつかちの理論をふりまわしても詮無いことだ。しかし、フィールドに行く前に、さまざまな学問の蓄積を自らの血肉としておかないと、天才でもない限り、みえるものもみえないし、研究者としての直観さえも働きようがない。自分の得た直観をデータや言葉に翻訳していくためにも、読書を通じた教養は必要である。「本なんか読まんでええぞ」とおっしゃる諸大家は、古今東西の古典を読みつづけた方々である。賢人の言葉を字面だけで理解しようとするなかれ。フィールドで本を忘れるためにこそ、フィールド前には本をしこたま読みたおしておくことをお勧めしたい。むろん準備をしつづけることなぞありえない。時がくれば、「とにかくフィールド」に行こう。

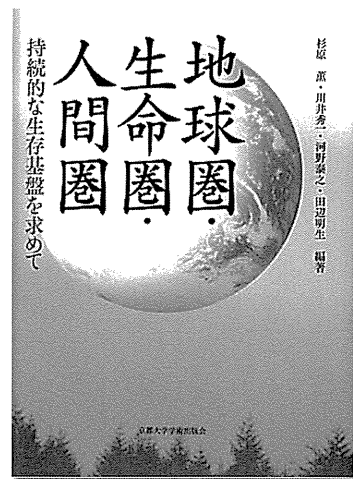
田中雅一氏主宰の「個をめぐるミクロ人類学確立に向けての基礎的研究」の研究会に出席させていただくようになった。これは「主体・自己・情動構築の文化的特質」研究班（九九四〜九八）を継承する科学研究費補助金によるプロジェクトであった。人文科学研究所で行われていたこの研究会は、京都大学に在籍する多くの人類学者が集う場であり、きわめて刺激的であった。

最初に特にとまどい、かつ興味深かったのは、研究者自身の経験や嗜好性（食や性に関わる欲望を含む）が前面において問われることであった。それは、「体を張った実践」としてのフィールドワークが重視されることから当然のことかもしれないが、フィールドのなかの自分を消してはいけないということがしばしば文学的にのみ解決されることが多い人類学的営みを見てきた私にとって、こうした会話は（ときにはかなりどぎつくりもあつたが）とても新鮮であつた。個の経験や欲望に関する問いを互いに投げかけつつ打打発止の議論をすることは、「自己」の境界を互いに侵犯しあいながら、親密感と緊張関係の同居する知的な共同体をつくっていく過程でもあつたように思う。

この研究会の成果として出版された『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／ネットワーク／身体』は、人類学の新しい方向性を示した書として長く読み継がれるだろう。それは、身体存在としての個を出発点としながら、その身体がネットワークを通じて共同世界に開かれていること、そして他者と響応する身体は新たな世界を生み出すエイジェンシーを有することを高らかに宣言している。

こうしたミクロ人類学の成果に立ちつつ、現在私たちは、人間の生とその環境について、社会文化の視点からのみではなく政治経済そして自然生態の視点からも理解することが求められている。また関係性のかたちの空間的把握だけでなく、その歴史性と未来可能性、つまり〈かたち〉の現れとその潜在力についての理解をも促進する必要がある。別言すれば、ミクロとマクロ、地域と地球、そして空間と歴史を総合した世界理解が求められているのだ。それは個から広がる世界のありかたを総合的に把握しようとするミクロ人類学の論理的帰結でもあるだろう。

人類学と地域研究が手を携えて、人間とその生存基盤の全体を明らかにしていく総合的な知の営為は、これからますます重要性を帯びることを確信している。その一例として、私も共編者の一人として加わつた『地球圏・生命圏・人間圏——持続的生存基盤を求めて』は、人間とその生きる環境を総合的に理解するための学際的な試みである。古くて新しい根本的な課題に諸専門家の知を結集して大胆果敢にとりくむ、こうした本にも京大らしさが現れているように思う。京大というフィールドにますます豊饒なる実りがあることを祈りつつ、自らもそのなかで果敢に学んでいきたい。



『地球圏・生命圏・人間圏』京都大学学術出版会、二〇〇年

# 転換期の「知的生産者たちの現場」の目撃者Ⅱ当事者として

小牧 幸代  
高崎経済大学准教授

私が社会人類学部門の助手をしていたのは、一九九八年四月二日から二〇〇六年三月末日までの八年間である。この世紀の転換期に国内大学・研究機関は大きな変化を余儀なくされた。人文研にも、日／東／西から人文／東方への改組、独法化、さらに助手制度の改革という荒波が次々と押し寄せた。それはまだ漂着点も定まらぬままに進行中なのであるが、私が過ごした日々、とりわけ前半はまさに「人文学の桃源郷」さながらであった。理想的な環境で研究に従事する仙人のごとき先生方の姿に、私は幾度となく感動を覚え、そのたびに目を丸くして小さく息を漏らしたものだ。

人文研の助手になるには、助手試験を経なければならなかった。当時、社会人類学部門は西洋部に属していたので試験科目は「ヨーロッパ近代語」「二カ国語と専門科目」そして面接であった。二月二五日、筆記試験ののち、昼食休憩を挟んで所長室で面接がおこなわれた。大きなテーブルを介して七人八人の先生方と向き合い、筆記試験の結果を知らされるとともに、事前に提出していた書類に基づいてフィールドでの出来事の仔細を問われ、答えに窮した。控え室に戻って外套と荷物を抱えると、京都にはもうしばらく来ることもなからうと思いつき、延泊を決めた。そうして自宅に戻ったところ、留守電で結果を受け取ったのだ。年度が改まって、苦い経験をしたあの所長室で、面接時には中央に座っておられた山本有造所長から辞令を手渡された。

## 共同研究の事務局として

社会人類学部門は、こうして井狩彌介教授、田中雅二助教授と私の三人で構成される運びとなった。着任早々、田中先生は『知的生産者たちの現場』を貸してくださいました。梅棹忠夫先生の秘書を務められた藤本ますみ氏の著作である。亀石や舟形、千鳥ですっかり童心に返っていた私は、自分が立っている場所の歴史と伝統の重みを教えられ、おおいに不安になった。「知的生産者たちの現場」で、私は目撃者Ⅱ当事者となることができるだろうか。助手は隔週で開催される共同研究班の事務局を任される。初仕事は関西学院大学の山路勝彦先生を班長とした「植民地主義と人類学」班の事務作業であった。ここに現場の目撃者となりえた裏方の仕事を記録しておきたい。

まず白羽の矢を立てた研究者に発表を依頼し、研究会の予定を立てる。二週間前までに発表者にタイトルと要旨を尋ね、案内状を作成して班員に送付する(注1)。三つ折りにした案内状を封筒に収め、宛名を書き、「郵便物送付票」に全ての送付先を記入し庶務に持っていく(注2)。研究会当日は、午前のうちに研究班の名称と発表者およびタイトルをロビーのスタンド看板ホワイトボードに書き込み、レジュメをコピーし、用務員の方にお茶の準備をお願いし、会場となる西館大会議室の空調設定をする。終了後は飲み会となるのが通例のため、



所内の消防訓練を行う小牧幸代(右端)と井狩彌介(その左)

(注1) 最初は電子メールではなく、電話や手紙でやりとりをしていた。そのため、年度初めには研究班ごとに「班員名簿」という住所録が更新された。

(注2) 宛名書きはその後、タックシールにして貼ることを覚え、「郵便物送付票」への記入も極小ポイントで作成し印刷したものをさらに縮小コピーして貼り付けるなどの工夫をした。

休憩時間に出欠をとり、近隣の居酒屋(門IIゲート、写楽、大文字など)に電話予約を入れる。後日、欠席者にレジユメを封書で送る作業がある。これが一年くらい続いたが、徐々に電子化されたり簡略化されたりして、事務作業量は大幅に軽減されていた。

共同研究班は二年後、田中先生を班長とした「フエティシズム研究の射程」に移行した(注3)。通称「フエチ研」は、植民地班以上に学際的で刺激的であった。もともと関西を中心とした各地から多くの研究者が集結していたが、この研究班ではさまざまな経歴をもつ異分野・異業種のゲストスピーカーとの出会いに恵まれた。特に画家の中村宏氏と経営学の長尾晃宏氏は印象深い。両氏の話の内容もさることながら、出会いまでの道のりが普通ではなかった。いずれも発表依頼をする際に田中先生から渡されたのは、たった一枚の紙片だった。中村氏の場合は美術専門出版社の連絡先、長尾氏に至っては新聞記事であった。ネットで検索したり、電話やファクスをしたりなどして来所が実現した。自宅の居間でくつろいで雑誌や新聞をめくるときでさえ、知的生産者のアンテナは決して圏外にならないのだということを、このとき知った。

人文研では、多くの共同研究班が曜日や時間帯を違えたり重ねたりして同時に開催されていた。山本有造先生、井狩彌介先生と藤井正人先生、濱田正美先生、竹沢泰子先生の研究班や、助手有志で構成された「助手班」にも参加の機会を得て、各分野の著名な研究者の話をつぶりとかがい、耳学問を深めることができた。

## 研究室での日々

私の「東山東二条生活誌」の残りの部分は個人研究(南アジア・イスラーム研究)に当てられる。朝は「登庁」の札を誰よりも早くひっくり返すのを愉しみたが、小南一郎先生にはしばしばっかりさせられた。昼食はルネ(注4)で済ませるのが普通で、いつも決まってお会いする所員の先生方がいた。書籍、文具、食品、雑貨などあらゆる必需品のほとんどが大学生協で間に合った。保育所も敷地内にあり、大学がまるで宇宙であるかのように、そこで生活が完結した。職住接近ゆえに、八年間のほとんどが自宅と人文研を往復するのみであった。私の隣の研究室におられた前川和也先生は、助手時代、研究室にずっと籠もりきりで粘土板に彫り込まれた情報の解読に専心されていたという。そこまではいかずとも、私も英領インド期のセンサスを読み込んだり、聖遺物関連の資料を整理したりなど、時間を気にかけずに文献史資料に向き合うことができた。

驚いたことに、私の研究室の本棚には年代物の「京大式カード」が未開封のまま大量に積み上げられていた。調査資料を縮小コピーし、このカードに切り貼りして、時系列と項目別の二種類のファイルを作って博士論文を完成させた。B6サイズのそのカードが、それと分かったのも、藤本氏の著作のおかげである。藤本氏は一九六〇年代の「知的生産者たちの現場」の目撃者であったが、私は世紀の転換期その現場の目撃者であったと同時に当事者であったと信じたい。人文研を去るにあたって、田中先生は「君のさ、これからの一〇年間の仕事はさ、人文研での研究の成果だからさ」とおっしゃった。間違いないと思うのだと思う。遅筆な私に残されているのはあと六年。その間にどれだけだけの論文・書籍を出せるのか、心許ないが当事者たるからには果たしたい責務だと、いま強く感じている。



ゲストスピーカー(中央奥)を囲んでの「フエティシズム研究の射程」研究会

(注3) フエチ研はフエティシズムの文化・社会的脈絡とあわせて五年間続いたが、その間、研究班用のコピーカードの取り扱いには神経を尖らせた。なにしろそこには「フエチ班・小牧」と書かれていたのである。

(注4) 大学生協のカフェテリアの名称。

## 民族誌記述の転換点に立ち会う

よしだけんじ  
吉田 憲司

国立民族学博物館教授

## 『ライティング・カルチャー』 ショック

私が、京都大学人文科学研究所・社会人類学部門の共同研究に深くかかわったのは、谷泰教授——以下、日頃の呼び方を踏襲して谷さんと記させていただく——を代表として二九八六年度から一九八九年度まで続けられた「民族誌記述の方法をめぐって」と題する研究会でのことであった。研究会の始まった八六年四月当時、私は、二年間のザンビア、チエワ社会でのフィールドワークを終え、帰国したばかりであった。そのフィールドワークで得た民族誌的資料をもとに、その後『仮面の森——アフリカ・チエワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』（講談社、一九九二年）と題する民族誌を発表しているから、谷研究会は、私にとつて、民族誌をいかに書くかを、理論的な省察を繰り返しつつ、実践の面で鍛え上げていく、いわば「道場」のような存在であった。

研究会で、ジェイムズ・クリフォードとジョージ・マーカスの編になる『ライティング・カルチャー』（James Clifford and George E. Marcus eds. *Writing Culture: The Politics and Poetics of Ethnography*, 1986）を分担して紹介し、検討するという場がもたれたのは、初年度の末のことであったと思う。同書刊行の直後のことである。

周知の通り、同書は、その後、人類学の世界に、カルチャー・ショックならぬ、『ライティング・カルチャー』ショックとでも言うべき、大きな衝撃を与えた。長期にわたる現地でのフィールドワークによる直接観察を前提に、ひたすら客観的な知を求めていたはずの人類学が、じつところ対象社会をそれ自体で完結したままとまりとして描き、個々の社会の動きや変化に目をとざしていたことが明ら

かにされ、人類学も結局のところは客観的な知ではありえないという事実が突き付けられた。以来、人類学的な知の歴史性・政治性の分析を焦点化した研究が生み出されていく一方、研究者とインフォーマントの個人と個人の対話の過程を前面に出したり、あるいは一人称単数による記述など、知の構築の現場そのものを記述するという手法の模索が進められていく。

## 記述の方法の転換と模索

今となって振り返ってみれば、それは、いかなる知の営みもその時々の歴史や社会制度に制約されたものでしかないことが改めて確認され、それを前提とした知的営為が求められるようになったという、人文科学・自然科学をも巻き込んだ、大きな知の「地殻変動」＝パラダイム・シフトの「断面」であった。ただ、当時、そのような動きのただなかで、それまでひたすら対象社会に寄り添うことで民族誌の精度を上げようと腐心して来た研究者のなかには、当惑のまましばし立ちすくんだ者も少なくなかったように思われる。『ライティング・カルチャー』のあとで、文化をどう描けばいいのか。いや、他者の文化を描くことはそもそも可能なのか、と。

谷研究会での私自身の発表をたどってみると、八六年の「仮面の民族誌」、八七年の「チエワ社会の変身の構造」、八八年の「構造論再考」、八九年の「秘儀の虚構」と、構造的な民族誌記述の再検討を進める一方で、しだいに「民族誌的事実」の虚構性に目を開いていく過程がうかがえる。私自身、民族誌に対する根源的な問いの前で、試行錯誤を繰り返していたようである。

谷さんによる「民族誌記述の方法をめぐって」という研究会の発足と『ライティング・カルチャー』の出版は、奇しくも同じ年で

あつたが、谷さん自身は早くから既成の民族誌記述に根本的な疑問を抱かされていたようだ。谷さんが『牧夫フランチェスコの一日——イタリヤ中部山村生活誌』(日本放送出版協会)を上梓されたのは、一九七六年のことである。個人を前面に出した民族誌実践の嚆矢として、谷さんのこの著作は、研究会の場でも繰り返し話題にのぼった。今読み返してみても、「平均的な規範としての文化に従つてのみ、人間は生きているのではない」「規範化された行動様式、構造化された認識のパターン、そういった異なる文化との比較を通じて明らかにされる形式の記述よりも、接触を通じた個人の生きざまを理解する方が、異文化の人びとを、より身近に感じさせてくれることがある」「私の求めたのは、イタリヤという文化を異にする地域に住んでいる、われわれと同じ人間の生きざまを記すことであつた」と、その後の人類学・民族誌記述が見出ししていく方向性と重なる記述が並んでいる。その慧眼には驚きを禁じ得ない。

## 民族誌記述から民族誌展示へ

「民族誌記述の方法をめぐって」という研究会を通じて得られた認識は、私の場合、民族誌記述だけでなく、民族誌展示の形で結実することとなった。一九八八年に国立民族博物館(民博)に職を得、その後、国内外における民族誌展示の現場に深くかかわることになったからである。

国立民族学博物館(民博)は一九七七年に開館した。そこで展開された民族誌展示は、生業や宗教といった文化項目別に展示物をまとめ、それを「構造的」に配して地域文化の全体性を示そうとしたものであつた。それは、おそらく文化相対主義的あるいは構造・機能主義的な民族誌展示を世界で最も徹底的に実現した展示として位置づけられる。しかしその展示が、地域文化の特徴を追求するあまり、「伝統的」な生活ばかりに焦点を当て、それぞれの地域があたかもそれ自体で閉じた、変化のないものであるかのような印象を与える結果を招いていたことも否めない。

民博では、二〇〇八年度から本館の常設展示の全面的な刷新に取り掛かった。その先頭を切つて改修することとなつたアフリカ展示の更新にあつて、私が最も心を砕いたのは「働く」というコー

ナーの展示であつた。従来のアフリカ展示では、上述の通り、農耕民、牧畜民、狩猟・採集民といった生業の区別をもとに、その生業に用いられる道具のバリエーションが示されていた。しかし、その展示からは、それらの道具を用いて生活している人びとの生きた姿はみえてこない。さらに、今日では、たとえば、農耕を主な生業とする社会にあつても、農閑期になると、男たちの大半が町へ出稼ぎに出るのが一般的である。そうでなければ、現金収入が得られないからである。そうした生活を送る人びとを、果たして「農耕民」といった用語で一括りにして呼べるものだろうか。

新しい展示では、一人一人の個人に焦点を当て、その人物の顔写真とともに、その人物が実際に労働に使つている道具を取り付けた等身大パネルを用意した。そして、そのパネルに組み込んだ映像やメッセージの中で、それぞれの人物に自分の「仕事」についての思いを語つてもらふことにした。具体的な名前をもつて私たちと同じ時代を生きているアフリカの人びとの姿を浮かび上がらせようとしたのである。同時代人としての共感をはぐくむ展示として、この手法は、国際的にも新しい民族誌展示の方向性を提示しえたものと秘かに自負している。

民博の新たな展示について、やや詳しく述べたのはほかでもない。改めて振り返つてみれば、この新たな民族誌展示の淵源は、間違いなく、谷さんを囲んで進めた「民族誌記述の方法をめぐって」の研究会での議論と、谷さんの初期の著書『牧夫フランチェスコの一日』の視座に求めることができるように思われるからである。私は、先ごろ、研究会の議論の触媒の役割を果たした『ライティング・カルチャー』の編者、ジェイムズ・クリフォード氏とフォーラムで議論をかわす機会をもち、人類学と博物館のこれからの方向性について、認識を共有していることを確認した。その直後に、この拙文をしたためているというにも、何か縁(えん)のようなものが感じられる。今改めて、谷研究会の学恩をかみしめている。



二〇〇九年に新たに公開された民博・アフリカ展示の「働く」のコーナー。個人に焦点を当てた民族誌展示が試みられている。

# 生の土台につながる對抗知を 養う場

あおき えりこ  
青木 恵理子  
龍谷大学教授

京都大学人文科学研究所との出会いは一九八〇年代末。足かけ五年に渡る人類学のフィールドワークを終え、雑多なデータ、濃厚なフィールドワーク経験の記憶、始まったばかりの子育てに圧倒されている頃だった。

人類学の研究会ではあったが、参加者の専門領域も年齢層も職業も多様だった。当時のテーマは、供職。最年長者は、谷泰先生だった。研究者としての成熟度の違いにかかわらず、同じ土俵で議論できる、快く張り詰めた雰囲気があった。私のような初学者でも、谷先生のような成熟した研究者の、ストレートな質問を受けることによって、自分の研究を進めることができた。人文研での研究会は常に、生の具体性と深みを覗き込むよう誘い、学生の保護膜を脱ぐように促した。

## 人類学の知とその様相

私が学生として人類学に触れ始めたのは、一九七三年、東京。人類学の先生が小さな居酒屋で語った。「知るといふことは、そこに闇があつたと気づくことである」。大学二年生だった私は、なかなかの名言だと思った。けれども何かが私のなかでざわざわとした。今ならば、光や眼差しとしての知、闇としての対象という構図はあまりにも啓蒙主義的であり、近代の知への反省がないなどと簡単に批判されてしまうかもしれない。ざわざわはそれだけのことではないように思われる。

知にはさまざまな様相がある。当時、自然科学系から(文化／社会)人類学に進学した私は、社会科学系の知の様相にかなり戸惑っていた。人類学の主な対象は小規模社会であり、私たちの暮

らす複雑な社会では見えにくいことを、小規模社会を通じて科学的に知る。自然科学なら視野におさまる実験を行うことによって科学たりうるところを、視野におさまらざる小規模な社会を対象とすることにより、科学的であることを担保する。そのように考えられていた。研究の知は科学的でなければならぬという一般社会にも浸透した考え方を前に、人類学のアカウンタビリティのためには都合のいい説明ではあった。

高校生の頃、サクサクとした自然科学の面白さにはまり、これでも人間のことも世界のことも分かるような気がして、自然科学の研究を志した。ところがである。大学入学後一年するかしないかのうちに、私が知りたいのは、自然科学によってサクサクと切り分けられるような「人間や世界」ではないという確信が滾ってきた。

遥かな地では、人々の言葉は異なる響きとなり、空間を満たす。一挙手一投足が、表情の二つが、固有の彩りを放ち、世界は異なるものとして顕れている。フィールドワークを通じて、その地の人々と同じ言葉話し、その身振り表情を帯び、異なる世界に住まうようになった私は、この私なのだろうか。そのようなプロセスを経て可能になる知が、自然科学と同じ様相をもつはずはない。それにもかかわらず、人類学の知が、私が意を決して後にした自然科学の知を範としているのは納得できなかつた。しかしその一方で、研究の知として自らを確立し社会的に認められるには、科学であることが必要だという強迫に突き動かされてもいた。

そんな折に惹かれたのは、レヴィ＝ストロースの「社会科学および人文科学のなかで科学的といえるのは、言語学である。人類学はそれに倣うべき」という記号論的立場であった注1。人間の営み

(注1)レヴィ＝ストロース、C.「構造人類学」みすず書房、一九七二(一九五八年)、三七―三三頁

を自然科学とながらにサクサクと腑分けしてゆく。一九九六年に上梓した博士論文まで通奏低音として響くことになる。

その後、私は、人類学の知の意義を、近代社会における諸科学の自明性を問う可能性という、フーコーによるその位置づけのなかに見出した。彼は、近代諸科学が、「主体としての人間」および主体と対象の明確な分離とともに、歴史的に成立したことを指摘した。それにもかかわらず、諸科学は普遍的な真理を明らかにするものという自明性を獲得している。彼は、それらが歴史的に構成されたものであることを露わにする可能性をもつ対抗科学の一つとして、人類学を位置づけた(注2)。

レヴィ・ストロースとフーコーは、それぞれ構造と言説という方法の提示によって、社会科学における言語学的転回を画した。この節の冒頭にあげた名言同様、彼らにとつて知とは、明るみに出すことである。しかしながら、メルロ・ポンティが語るように、「言語の透明さは、暗い土台に根差したものである。探求を進めていけば、…言語の原初的な萌芽を情緒的な身振りのうちに求めざるをえなくなる。人間はこの情緒的な身振りによって、所与としての世界の上に、人間による世界を重ねたのである」(注3)。言語や言説によつて構築される明るい領域は、分節化されていない暗い生の土台へと根をはり、それこそがまさに生ざられたものとしての分節化を可能にしている。人類学はこの両方の領域を同時に探求して行かなくてはならないだろう。暗い領域は暗いままに。

幼い頃、明るい領域への問いと同時に、この暗い生の土台への問いを、誰でもが抱くものではないだろうか。しかしそれは、明るい領域を中心化する後期近代社会においては、大人になってゆく過程で、知らず知らずのうちに隅へと追いやられてしまう。

## 幼き日の問い

幼い頃怖かったのは、形ある物を溶かしてしまう池。それは、サンリヤ毒蛇が群れなしている洞窟よりも怖かった。溶解池は見ただけではわからない。それなのに、ひとたび足を踏み入れてしまうと、やがて液体の一部になってしまう。当時始めて間もないテレビ放送の子供番組の影響もあったと思う。子供番組の数はもち

ろ少なかつた。画面はモノクロで、全体は暗く、しつかり観ようとする注視しないではいられないようになっていた。

サンリヤ毒蛇の洞窟は、若くて美しい主人公たちの試練。溶解池は、その悪ゆえに醜く見える大人たちへの懲罰として、物語の最後に登場したように思う。イメージは何度も反芻され、逆に物語を作ってしまったかもしれない。理由もなく反芻してしまうほどそのイメージを怖れていたにもかかわらず、幼い私は、そのイメージから目を離すことができないほど魅かれていたにちがいない。悪人たちが液体のなかへと姿を亡くしてしまうイメージに、胸のすく思いと同時に哀れの情を抱いたりしていた。万が若くて美しい主人公たちがサンリヤに刺されて死んでしまったとしても(物語のなかではそういうことは起こらないのだが)、美しさや、善良さや、正しさはなくならないだろう。ならば、悪者たちの、醜さや、悪さ、背徳は液体になってしまうことよてなくなるのだろうか。もし、なくならないなら、なぜ悪人たちを溶かしてしまう必要があるのだろうか。

次のような問いも抱いた。小学校入学の日。陽光あふれる教室のなかで、互いにつきあったり、笑いあったり、不安と期待ではしゃいでいる子供たち、私も含めて。そこに若い母親たちも加わった。教室は、萌えるようだったにちがいない。昭和三〇年代の半ば、学校は今のよう複雑なイメージをもたされてはいなかった。澄んだ明るさのなかで私は、すべての人の体のなかには骸骨があることに茫洋と思いをはせていた。くつきりとした死を内包した生。誕生を繰り返して、累々と骨を残して行く地球全体の生。でも、それはなぜどうして起こるのだろうか。

長じた私たちは、幼い人たちのもの思うまなざしにしばしば出会った。また、幼い人たちから、生の土台への問いかけを受けた経験も、誰もが持っているのではないだろうか。もちろん、幼い頃に右のような言語化ができたわけではない。幼い口から発される問いは、例えば左のように単純なものであるが、幼い人たちの抱くイメージは、右で言語化を試みたように、深いものであろう。「赤ちゃん、どこから来るの?」「おじいちゃんは死んじゃったの?」「赤ちゃん、どこから来るの?」「○○ちゃんは、なんで死んじゃったの?」

(注2) フーコー、M 『言葉と物』新潮社、一九七四年(一九六六)年

(注3) メルロ・ポンティ、M 『表現としての身体と言葉(知覚の現象学)から』メルロ・ポンティ、コレクシヨ、一九九九年(一九四五)年、八―六〇頁、ちくま学芸文庫、三五頁



妹をたいたから?」「朝はどこから来るの?」

近代社会においては多くの場合、大人になる過程で、幼き日の問いやイメージは隅に追いやられるのだが、ある種むきだしに生に直面する状況のなかで再び息づくことになる。困難な時代における宗教的現象の隆盛やサブカルチャーを含めた芸術的現象の高揚などは、近代以降の社会においても、人々の生が暗い生の土台から切り離されえないことを示しているように。しかし、社会的困窮や時代的緊迫状況にあるわけではないのに、社会内のいたるところにおいて安定的に、生の土台への問いが、大人にも常に開かれている社会がある。少なからぬ人類学者が、そのような諸社会においてフィールドワークを行ってきた。

## 「生の土台に開いた知」をめぐる旅

一九七九年八月、私は東インドネシアのフローレス島中央山岳地域でフィールドワークを始めた。辞書もテキストもない言語を、それが使われている生活のなかで学んでゆくという楽しみとともに、舌と唇と喉が新しい言語音と声の彩を習得し、身振りと表情が組織しなおされてゆく。食事に招かれ、たどたどしく談笑し、葉を乞われ、病んだ子の傍らに赴く。日常的なやりとりのなかで、社会関係と呼べるようなものが次第に生まれる。人々の暮らしを知るプロセスは、このような全体的変容の中に埋め込まれたものであった。

やがて、その地の人々が、「オランベオ ora mbe, o (ora) (名詞化する語) mbe, o 知る」という、詩的形式を持つ知を重要視していることがわかってきた。私とその地の日常知が織り交ぜられ、さらに、人類学的に知ろうとする営みが、時に明確な形を残さず織りこまれ、時に撥ね退けられるプロセスのなかで、「オランベオ知」を理解し習得していった。

オランベオ知とは、いったいどのようなものなのか。それは、世界や人間を見通し、病気を治し、山刀や妖術の攻撃を無化し、山河の精霊たちとの交流を可能にし、作物を稔らせ、子孫繁栄をもたらす。畏敬の念を引き起こし、影響力を発揮し、すべての物事をうまく行かせる。オランベオ知とは、さまざまな呪文、大地や

祖先の物語、啓示、儀礼の唱文など。いずれも、隠喩の多用、対句形式、踏韻、喚起性の高い用語など、詩的形式が色濃い。殊に、その核心とされる「母なる部分」は、必ず詩的形式を持つ。オランベオ知の概要の体得は、その知に長けた人々の模倣や彼らとの交流によるが、真のオランベオ知は、夢見などを通じて、祖先や精霊からもたらされる。

祖先は時として確実に感じられるが、目には見えない。精霊が見えるのは、特別の能力を持つ人に限られる。そのような能力も、オランベオ知によることが多い。しばしば行われる祖先や精霊との交流も、その知によつて形作られる。

オランベオ知とは、生の土台へと人々をつなぐ、情緒的身振りに満ちた詩なのである。私のフィールドワークは、そのような知をめぐる濃厚な経験と、それについての雑多なフィールドデータを積み重ねてゆく旅であった。人文研との出会いは、最初の長い旅を終えて間もない頃だった。

## 現代の逆説と人文研への期待

かつて人類学は、地理的距離によつて生まれる文化的差異によつて、自らを確立し養ってきた。シェイクスピアの『お気に召すまま』で、王都に住まう人々が、暗いアーデンの森に赴き、これまでとは異なる形態の理想的な生活を始めたり、王都での秩序を回復したように、人類学者は、近代の「明るさ」に侵食されていないオルタナティブな生や都市での秩序の回復を求めて、生の土台に根ざした遙かな地へと赴いた。

岩井克人は、『ヴェニス商人』のなかに、共同体(暗い生の土台につながるムラ)の論理が、資本主義と実定法的司法の論理に逆説的に敗北してゆく物語を読み解く(注4)。共同体間の差異に拠る遠洋貿易に携わる主人公のアントーニオは、血を一滴たりとも含まない肉との等価交換という、証文に示された資本主義交換と司法の論理によつて、裁判には勝利するが、自らの拠り所である共同体の解体と共同体間の差異の解体をもたらしてしまう。

グローバル化の影響下、世界中の人々が多かれ少なかれ、アントーニオが陥った逆説的状况におかれている。自らのムラの知

(注4) 岩井克人『ヴェニス商人の資本論』ちくま学芸文庫、一九九二年

「フエティシズム」研究会で使用した「PICOカード



を、資本主義経済と行政の論理に翻訳しなければ生き残れないような状況である。資本主義経済や行政の知は、人々や世界を重複や矛盾のないカテゴリーで分類・数量化し、さらに生の土台から切り離されているという意味で、最も「明るい」。首都や大都市を拠点に、できるだけ多くの領域をその統治下に取り込もうとする知である。暗い生の土台につながっているムラの知とは対照的である。

ムラの知と生の土台との関係が変容し始めている。そして人類学もまた、アントニーニオと同じ逆説的状况におかれ、地理的距離によって保証される異文化を研究すると主張することは、もはや自己欺瞞でさえある。既にデイシプリンの習慣的知と枠組み自体を問い、おのれ自身から離脱していかなければならない状況にある。これまで人類学と呼ばれてきた知の波動が、おのれ自身から離脱していかなばならなくなったのだ。

人類学は、さまざまな人々の生を架橋する、都市の知である。しかしそれは、生の土台へと開かれ、同じく都市を拠点としながら、生活世界を漂白してゆく資本主義経済や行政の「明るさ」に対抗するような知でなくてはならないだろう。このような対抗は、「明るい」監査と評価による統治が人類学自体にも及ぶなか、ますます重要になった。

私が保護膜を脱ぐよう促されてから二〇年の間、人文研の人類学研究会は、情動（「主体・自己・情動構築の文化的特質」一九九四〜九八年、「個をめぐるミクロ人類学確立に向けての基礎的研究」一九九八〜二〇〇二年）やらフエティシズム（「フエティシズム研究の射程」二〇〇〇〜〇五年、「フエティシズムの文化・社会的脈絡」二〇〇五〜〇六年）やら、人類学というデイシプリンの慣習に不協和音を響かせるようなテーマを掲げ、生の具体性と深みを覗き込むよう参加者を誘い続けてきた。私もその誘いをうけて「頭痛治しは蠟燭を灯して——東インドネシア・フロレス島における身体と世界」と「親密性と身体——フエティシズム現象と人類学の地平」という論文を書くことになった。そしてこれからも、脱中心の都市京都にあつて、生活世界を光漂白する知に対抗する知を醸成するような場であることを、人文研に期待したい。

記録をたどる

## 内蒙古調査

1938～46年

ボナベ島（1941年）、中国の北部大興安嶺（42年）をはさんで行われた内蒙古調査は、44年には中国張家口の西北研究所の所長について今西錦司のもとで進められた。次長にはその後東大のアンデス学術調査隊の隊長をつとめた石田英一郎、梅棹忠夫なども嘱託職員として従事した。戦況悪化のなかで車は軍用に徴発され、ウマとラクダでの調査行だった。

〈右上〉遊牧民の天幕のなかで

〈右下〉張家口にて

〈左下〉1938年の内蒙古調査。中央が今西錦司



# 「植民地主義と人類学」研究班のこと

やまじかつひ  
山路 勝彦  
関西学院大学教授

日本の人類学の歩みを振り返ってみた時、研究者が取り組んできた理論の栄枯盛衰の激しさに気づかされる。ある時代には一つの理論が大きくなり、やがて押し寄せ、そして程なく引いていくという過程が浮かび上がってくるのである。

戦後間もない頃に限っても、アメリカ流の総合的な文化人類学が脚光を浴びたことがあったし、他方ではイギリス流の社会人類学が研究者の関心を引き寄せていた時期もあった。この社会人類学はラドクリフ・ブラウン流の機能主義に代表される人類学の一派で、とりわけ社会構造の研究に重点がおかれていた。それが、一九七〇年代頃からはフランスのレヴィ・ストロースに代表される構造主義が研究者を魅了し、人間精神の普遍性を求める思索の旅路へと多くの人類学者を誘っていった。彼の著書、『野生の思考』（大橋保夫訳、みすず書房）が日本で翻訳されたのは一九七六年であった。

それから一〇年後、日本の知識人全体に大きな衝撃を与えた、サイードの『オリエンタリズム』（板垣雄三ほか監修、平凡社、一九八六年）が翻訳されている。近代文明の覇者としての西欧が東洋（オリエンツ）に対峙した時、支配する側としての眼差しが絶えず潜んでいると論じたこの著作は、人類学にも多大な影響を及ぼした。それまで「未開社会」と言われ続けてきたアジア・アフリカ社会を研究する人類学者の姿勢が問われ、研究者が立脚する基盤を内省する動きが広がっていったのである。

人類学者が活躍するフィールドは主に植民地の住民が住む世界なのに、その事実には無自覚であったことが反省され、こうして「植民地主義と人類学」を主題にする研究が九〇年代になるとおおい

に盛んになっていった。

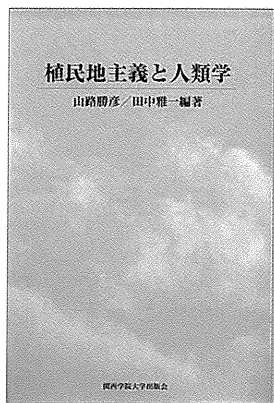
## 植民地研究の反省と模索

人文科学研究所の田中雅一教授は、こうした研究史を踏まえたうえで研究班の組織を提案したと思う。ちょうどその頃、筆者は台湾の植民地化の過程を調査していて、人類学者の研究を再考している最中であった。当時の台湾は先住民運動が盛り上がりつついて、日本の植民地政策の検討を抜きにしては人類学の成果が得られない状況にあった。しかも、こうした台湾の趨勢はけっして台湾だけにとどまらず、ひろく人類学上の比較研究を必要としていることは筆者なりに理解していた。

そこで、田中教授の要請に応じて、筆者は客員教授として参加して「植民地主義と人類学」研究班を立ち上げることにしたのである。一九九七年四月からはじまり、二〇〇〇年三月に終了したのであるから、三年という研究期間は標準的であったと思う。とはいえ、実施した研究会数はたいへん多く、合計して四四回、延べにして八〇人余の発表者を迎えている。この数字を取り上げてみただけでも、この研究会に投じた班員のエネルギーは大きかったと言える。その成果は『植民地主義と人類学』（山路勝彦・田中雅一編、関西学院大学出版会、二〇〇二年）として刊行されている。

現在、一〇年前を回顧してみようことは、実に多くの研究者に発表をお願いしたことである。人類学者だけでなく、隣接する専門分野の研究者にも議論への参加を求めたため、多角的に問題点を把握できたことは喜ばしいことであった。当初から、人類学史の検討も視野において、日本、イギリス、フランスなどの人

『植民地主義と人類学』関西学院大学出版会、二〇〇二年



類学者が自国の植民地で行った研究を批判的に検討する意図を持つていたので、取り組んだ地域は広域にわたっていた。

さらに、人類学という看板を掲げている以上、研究領域は経済や法制度の問題にとどまらず、文化一般も対象に据えられていた。例えば、現在、人類学では先住民問題やエスニック・マイノリティの研究が重要視されているが、植民地統治を受ける過程で住民たちは自己の認同(アイデンティティ)をいかに作り上げてきたのか、議論の対象になった。

こうした多くの知識の集積のもとで、この研究会では従来の研究史に対しても批判的であった。例えば、支配と被支配との二項対立の図式を分析枠組みとしてきた従来の植民地研究の方法を反省し、植民地化された人々の生活体験を掘り上げることにも多くの努力を傾注したこともこの研究会の特徴であった。

例を引いてみたい。オーストラリアのアボリジニの世界にはキリスト教が浸透し、その教義とともにジェンダー規範や家族生活を営むうえでの規範の導入が見られた。だが、アボリジニは一方的にキリスト教義を受け容れたのではなかった。家や労働の規範から選択的に特定の要素を取り入れ、実践していったのである。この研究の強みは、フィールドワークに裏打ちされた世界を対象にしているということである。ミッションの活動のみを取り出して、その植民地的役割を論じるのではなく、アボリジニの生活世界にまでおりていって、ミッションに向かい合いながら主体的に生活を営んでいる人々の世界を記述すること、こうした作業の重要性を理解したのである。

## フィールド調査に根ざした学際研究

実際に、本研究会の発表には、意識的にせよ無意識であるにせよ、生活世界からアプローチした論考が多い。植民地主義を政治制度、あるいは経済関係だけから見るとはならず、人々の生活に植民地支配がどのように及んでいるのか、あるいは支配権力を逆に流用し、自己の生活を再組織していく人々の能動的行動に着目した研究もある。このアプローチは、フィールド調査に根ざしたもので、まさしく人類学者ならではの研究であろうと思う。

本研究会は人類学者だけではなく、国語学、経済学、法学、思想史、歴史学、文学など多くの分野の研究者が参加して組織されていた。言うまでもなく学際的研究を出発点に置いていたのである。それぞれの専門との交流は研究領域を広げたし、かつ深めもした。東アジア世界での植民地研究はこれまで歴史系の分野が主にかかわり、人類学者の発言が比較的弱かったと言える。こうした状況下にもかかわらず、他分野の刺激のもとで成果をあげられたのも、人文科学研究所で学際的研究として組織されたからだと思う。

二〇〇〇年代になって、「植民地主義と人類学」のテーマはいぜんとして人々の関心を惹いている。筆者は植民地で開催された博覧会に関心を寄せ、資料の収集をしている。植民地統治は多様なメディアを使ってなされていたからで、植民地博覧会はそのうちの二つである。フィルム、写真、絵葉書など、画像・映像メディアの収集もこれからの仕事である。多くの埋もれた資料の整理はまだ残されたままである。

このことを踏まえたうえで、将来的に「植民地主義と人類学」のテーマがより充実していくなら、人文科学研究所の果たした意義はいつそう大きくなると思う。

最後に、人類学史という主題に関連させて、国立民族学博物館での共同研究を紹介しておきたい。この共同研究会は二〇〇七年度からはじまり、今年度(二〇二〇年度)で終了する企画であつて、山路が代表者になり、田中雅二教授も参加している。主題は「日本人類学史の研究」である。明治一九(八八六)年に、坪井正五郎が組織して「東京人類学会」が成立したことからうかがえるように、日本の人類学は長い歴史を持つている。その歴史を見ると、国内を除けば、日本の人類学者は主に台湾、朝鮮、満洲、ミクロネシアなどの植民地を主要なフィールドワークの舞台として活動していた事実を知ることができる。それだから、日本人類学史の叙述には、当然、「植民地主義と人類学」というテーマが含まれることになる。民博での共同研究も、人文科学研究所での共同研究の発展であり、その成果の一つなのである。

# 晴「行」雨読の日々

## —人文研と修学院の八ヶ月

Timothy Tsu  
テイモシーツ

関西学院大学国際学部教授

わたしは田中雅一先生のご好意により、一九九七年四月から八ヶ月間人文研を訪問する機会を得た。当時わたしは日本植民地時代台湾における民俗と宗教に関心を持っており、以前、千里にある国立民族学博物館(民博)ならびに台北の中央研究院民族学研究所に所属していた関係で、日本の人類学者の方々と頻繁に交流していた。職場はシンガポールであったが、年に何回かは日本を訪れ、研究テーマに関する日本語の文献を積極的に集めようとしていた。

しかし様々な制約に阻まれ、文献収集はなかなか思うようには捗らない。そのとき民博時代に面識のあった田中先生から京都に來ないかと打診され、即刻このチャンスに飛びついた。南洋理工で修士課程の勉強を始めたばかりの妻をシンガポールに残してではあるが、シンガポール国立大学に無理をお願いして前例のない長期休暇を認めてもらい、八ヶ月間思いのままに本を読みほうける理想郷を思い描きながら一人京都に來た。

### 耽想の空間

わたしのような訪問者から見れば、人文研はまさに研究者の楽園である。研究費や出張費を申請することができ、個室があてがわれ、書庫へも自由に出入りできる。また、いくつもの研究会があり、そこで関西二円ないし全国から新鋭の研究者が集まって議論する仕組みは、長い間「日本文化概論」や「日本史入門」といった講義をしてきたわたしにとって、絶好の学習の場であった。

また、研究会の後にたいい飲み会があることは、シンガポールのような「ドライ」な国で仕事をしてきたわたしにとって、このうえない喜びであった。とにかく毎日人文研へ行くこと自体が、もう満足そのものだったのである。

東一条の本館四階の北東角のわたしの研究室からは遥かに連なる北山が眺望でき、そこでの散策の醍醐味を想像し、また目下に拡がる日仏会館の庭園に目をやれば、またそこで飲む夏のビールのうまさを感じ、白昼夢を見ながら申し分のない研究環境を堪能していた。学生も來ない、授業もない、会議もない、毎日が土曜日のような、そんな夢のような日々を淡々と過ごすことができた。

活字と遠くの山しか見ないせいか、身の回りの些細なことが自分の精神世界にもぐりこんで來て、そこでじわじわと膨らむことがよくあった。たとえば、研究室の東の壁に斜めに横切るヒビのような亀裂は、マグニチュード四の地震でもきたらどのように崩れるかを何度シミュレーションしても飽き足りない魔力があった。もしかすると人間は、天災地変という非日常な出來事に惹きつけられる特性を備えているのかも知れない。

### 山の誘惑

先に人文研は研究者にとつての楽園だと述べたが、滞在先の京大国際交流会館はもう一つのパラダイスであった。なぜなら、叡電修学院駅からほんの数分という利便さにある一方で、比叡山の麓

に位置するこの宿舎は、「山行き」に出るにはもってこいのロケーションにあった。

天気の良い朝、駅前の商店街でおにぎりや飲み物を買えば、もう即興登山の準備完了である。そのまま方向転換して、比叡山山頂をめざす。鷲森神社の境内を通りぬけ、曼殊院、そして関西セミナーハウスを抜けるとキララ坂にでる。そこからは山らしい登山道に入る。

八ヶ月の間にいくつかの違った登山口から確か五回近く比叡山に登った。シンガポール大学の同僚を道連れにしたこともあれば、休みにシンガポールから遊びに来た妻と神戸在住の七〇歳の義理の母と一緒に歩いたこともあった。そのうち、シンガポールの友人達は、登山はしないことをまず念押ししてから、わたしのところに遊びに来るようになった。

もちろん、わたしを魅了したのは比叡山だけではなく、鞍馬の奥にある天ヶ岳から岩倉あたりの低い山々まで、天気さえ許せば（暇はいつもあったので）山中をさまよった。雨や雪が降れば研究室へ行って勉強する。そうでなければ、山を歩く。このようにして晴「行」雨読の生活リズムがいつも知れず出来上がったのである。幸いなことに雨の日も少なくなかった。

### 「人文的」余裕

最後に一言加えたい。わたしは人文研に来て、日本の人類学の包容力を再認識した。人文研の人類学の研究会は日本のみならず外の世界に目を向け、方法やテーマを問うことなく、できる限り多くの研究者を集めて意見交換できる場を提供している。そんな場所であったからこそ、わたしのようないく人もなく動物でもない「分類しがたい人間が、非常に居心地のよい環境を見つめられたわけだ。

二年前のこの八ヶ月の間に経験した多くの刺激や啓発は、すぐに「業績」に直結しないものが多いけれども、今もまだ本を読み、文章を書き、そして学生に接しているわたしは、その恩恵を存分に受け続けているのである。

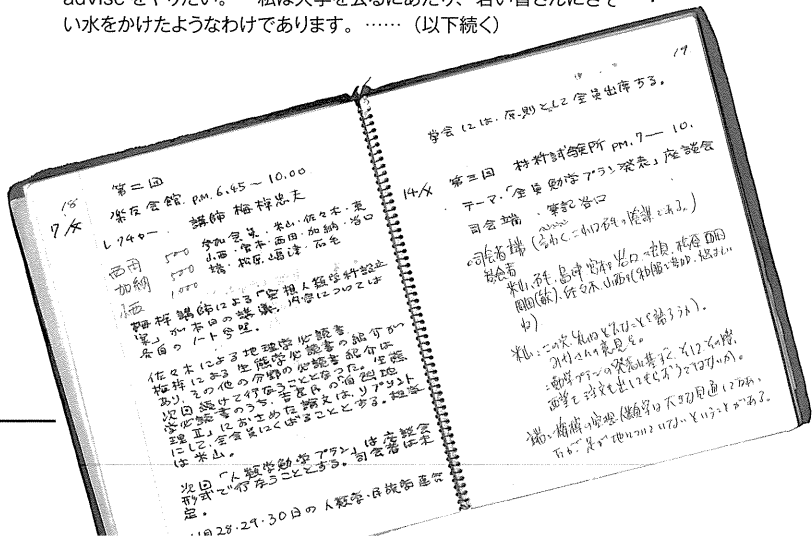
## 記録をたどる

# 「近衛ロンド」今西錦司講演メモ

「近衛ロンド」第14回 今西錦司講演メモ  
1965年1月20日 於・楽友会館

定年間近で今まで人類学をやってきた感想をいささか述べたい。  
(梅村) 今西錦司著作目録を全員に配布  
動物をやめようとして(内) 蒙古へ行った。当時教養の教授の話があった。  
学校はやめても人類学を続ける。かえって雑用が減ってやりやすい。  
Fieldのintensiveな仕事は、61年からアフリカ調査に人類班を作成した。  
学問である以上は、仕事をして新しい物を発見するというところでなかつたら第一線の専門家ではない。  
これからは満足の行く仕事ができることを期待している。  
人類学は(このままでは)如何に面白くないかを話そう。男の仕事としてやりがいがあるとは思えない。ここにいる皆は未開社会に入って報告を書くことをめざしているのだから。しかし、そんなのが積もっても博物館入りするだけである。  
他に何か back bone がなかつたらだめだ。僕には何か loose な所があった。  
趣味的 or 好事家がその人の気ままな問題を追及しておつたらよい。日本で言えば民族学協会の時代は、大変その点で楽しい会であった。おいおい学会的な雰囲気が出てきて趣味的なものから脱皮しようとしている。しかし back bone が伴わねばならない。  
国立大学には東大に一つだけ人類学講座が設けられている。日本で何故虐待されているかを考えていると、趣味的に過ぎ、また日本は貧乏である。Apply(応用)面の働きが弱い。その理論検証が応用面でどれだけ果たされているか。それで人類学をやって、世の中の役に立ちたいと思う人がでてくる。  
しかし理論をやる人はさしていやしくない。若い人が、いよいよ professional な仕事をする場合、この仕事がどのように活かされるかを考えてから行わなければならない。  
最近ダーウィン百年祭で進化論がとりあげられ、人類学ももともととりあげられてきている。人類学の弱みは実証性に乏しい。大体後ろ向

きの学問。Originの問題は面白いが、前向きのことにも着目せねばならない。例えば cultural change でいえば、これは前向きだが、今のところ theory がない。学問において collect して整えるのも面白いが、私はまず、作業仮説をたて、自分で歩いて検証する。これは冒険を伴う。学問に冒険はあってもよいと思う。  
Mangola は色々な部族が集まっている。彼らはそれぞれ歴史的な背景をもつから、生活様式が異なる。半農半牧のムブルー、その他にバンツ系の開拓民は、内部は雑多ではあるが彼ら全体をみずからスワヒリと呼ぶ。彼らを単に比較するだけでは学問ではない。ここに作業仮説を立てる。たとえば将来、彼らが共通の場をもつに違いない。このまま放任しておいても、誰かがまとめてくれるだろうというだけでは面白くない。可能なものなら追々自分で検証して行きたい。我々は気が短いから応用面を考えたくなくてくる。  
そうすると事の善悪がすぐりあげられてくる。Tribe 間の discommunication がなくなるのは善いことだ。我々の理論的基盤から応用したくなる。しかし理論がしっかりせねばならない。政策的な advise をやりたい。私は大学を去るにあたり、若い皆さんにさそい水をかけたようなわけでありませう。……(以下続く)



## 人文研の懐の深さ

Sabine Prützbeck  
カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授

私が人文科学研究所で過ごした期間は、国際的な視点から近代史や社会文化人類学に関心を持つ、近・現代日本の専門家としてのキャリアを確立するうえで、多くの面で特別な意味をもっていた。

最初は一九九二―九四年に研究生として在籍し、富永茂樹教授の指導のもと、博士号取得に向けた研究をおこなった。この充実した二年間で、その後の私の研究プロジェクトは形成、統合されていった。夕食後、夜遅くまで及んだ数えきれないほどのセミナー討議などを通して、今でも触発される優れた研究者と知り合うこともできた。

また、人文研での最初の二年間は九六年にウィーン大学に提出した博士号論文だけでなく、二冊の本の出版にもつながった。最初の本は九七年にドイツ語で出版され、タイトルは *Die Politik der Sexualwissenschaft: Zur Produktion und Popularisierung sexologischen Wissens in Japan 1908-1941* (Vienna: Institute for Japanese Studies, 1997) 二冊目は、その後、調査研究を加え英語で出版した *Colonizing Sex: Sexology and Social Control in Modern Japan* (Berkeley: University of California Press, 2003) である。

二回目には人文研に在籍したのは二〇〇三年、現在務めているカリフォルニア大学からの外国人研究員としてだった。田中雅一教授を中心とした新しい研究グループに招かれ、後に英語で出版した *Uneasy Warriors: Gender, Memory and Popular Culture in the Japanese Army* の調査研究を終えようとしていた時期だ。同書は二〇〇八年に原書房から日本語で『不安な兵士たち——戦いを禁

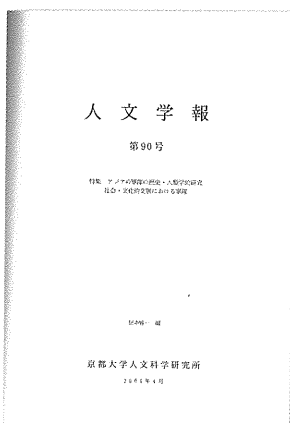
じられた軍隊のアイデンティティとは？ニッポン自衛隊研究』（花田知恵訳）として出版された。この時も、グループや人文研の教授たち、大学院生らの活発な討議から大変多くのものを得た。

## 新しい学問領域をめぐって

一九九〇年代後半まで、日本の「性」や「性認識」に関する米国の研究者は、全くといっていいほど近代以前の文学作品に研究の拠り所を求めてきた。そうした研究成果の中には極めて優れたものがあり、これからも広く読まれる内容を持つ。これは察するに、過去と文学研究、という形で現代の生活から二重の意味で隔てられ、保守的な米国会にも許容されたためだ。この隔離が無ければ、当時「性」というテーマを歴史学や人類学で取り上げることは「わいせつ」とみられたり、あるいは研究者としての経歴を傷つけることと見なされたであろう。この「隔離状況」は今世紀にならび変わってきたといえる。

これに対して、「(国家による)暴力」「戦争」に関する研究は、未だにかつての「性」研究が置かれていた状況にあるといえる。歴史学や人類学では、この距離感は極めて重要な意味を持つのだ。

このことが、他の学問領域には当てはまらない点は注目に値する。例えば国際関係の研究者は常に、戦争の不可避性とか将来の戦争勃発の可能性について言及する。批判をこめてそうする者もいれば、嬉々として語る者もある。文化や視覚、メディアの研究者たちは、メディアや芸術作品に取り上げられる戦争の中に、その美学や政治力学を見い出してきた。こうした学問領域においてはしばしば、暴力は一種魅力的な何かへと変質しているのだ。それが



「アジアの軍隊の歴史・人類学的研究 社会・文化的文脈における軍隊」を特集した『人文学報』第九〇号、二〇〇四年

国家による暴力なら、一層魅力は増す。そしてこの場合でも、現代生活から遠ざかれば遠ざかるほど、魅力の度合いは増すというわけだ。

日本研究を例にとると、(国家)暴力はアニメの中で消され、芸術作品や映画で検証され、また過去の偉大な戦略家との関連で思索のテーマとなる。戦争に関する写真や文学作品は安全で心地よさを提供し、感情的な満足を与えて反響を呼ぶ。そしてしばしば、既知の事実を確認するのみだ。それは「戦争は醜い」ということ。安全で適度な距離を持って見る者にとって、「醜い」は「美しい」よりずっと興味を引かれる概念となる。

## 自衛隊の研究へのまなざし

同様に、日本研究の分野には近代以前の武士文化や、一九四五年度の終戦をもつて廃絶された近代の軍隊に関する優れた社会史的な研究成果がある。良心的な知識層、人類学者として、我々の多くは戦争に反対し、おそらく軍にも反対の立場だ。しかし、現代日本の軍やその戦争への関与を研究する、社会文化人類学が事実上存在しないことについて、どう説明がつけられるのだろうか。距離を保つことの重要さを研究が無視かというふうに通りに使いつけていることを、どう正当化できるのだろうか。

この問題は、何も日本に限ったことではないが、日本ではより眉をひそめさせることになる。私が一九九八年から二〇〇三年まで日本の自衛隊を実地調査していた間、自衛官や単なる知人、同僚の研究者に至る多くの人たちは、自衛隊の本とはいったい何についての本なのか全くわからないようだった。

社会学者からの様々な反響のうち、次の三つが印象に残った。まず、戦時中の天皇の写真などに関する著書を持つある社会文化人類学者は、私に「何故、自衛隊を研究するのか。戦争に参加したことがないのに、研究することがあるのか」と問うた。別の学者は、隊員の生活や見解を調べたからといって、それが何になるのかと声に出して疑問を呈したうえで、「自衛隊員は政府の手で作られた粘土細工のようなもので、政府は自衛隊を最も恐ろしい目的のために使うこともできるのだ」と断言した。三人目の学者は、自

宅の近所に住む女性隊員を多く知っていたが、私がインタビューしたので紹介してほしいと頼んだところ、大学教授の立場としては、自衛隊の研究者を支援しているから見られることは自衛隊の合法化を助けることになるので、それはできないとの返事だった。

これらの回答は三通りの異なる見解を伝えるものだが、一つの事項で接点を持つと想定できる。すなわち、人類学者は軍隊や戦争を研究対象とすべきではないということだ。

## 人文研のグローカリゼーション

振り返ってみると、当時の自衛隊研究も、現在の私の研究テーマである二〇世紀における子供の軍事化というテーマとともに、世界のある地域では「きわどい」と受け止められている。この事実を理解するに至ったことは、興味深いことだった。そして、これらのテーマに対して人文研で数えきれない多くの形で支持していただいたことは、関西の文化が関東に比べて荒っぽいのが懐が深いという定評を実感するものであった。

学問的成果が劇的に変化している環境のもとで、人文研が国際化(グローバルイゼーション)ではなく、世界に視野を向ける一方で自国、地域を重視するグローカリゼーションの立場を維持していることを喜ばしく思う。そして、その人文研の研究活動に、ささやかながら関わる機会を与えていただいたことに、大きな感謝の意を表したい。



陸上自衛隊姫路駐屯地を訪問したとき、姫路城で田中雅教授と撮影した記念写真



京都大学人文科学研究所社会人類学部門創設50周年記念シンポジウム

# 人類学の誘惑——京都からの回顧と発信

京都大学人文科学研究所・人文アカデミーは、京都人類学研究会(前身は近衛ロンド)との共催で社会人類学部門創設五〇周年を記念するシンポジウム「人類学の誘惑——京都からの回顧と発信」を二〇二〇年四月二七日に京大大会館にて開催した。このシンポジウムでは、社会文化人類学やその隣接領域で活躍されている菊地暁、飯田卓、佐藤知久、河合香吏の4氏に、人文研に関連する社会文化人類学のこれまでの蓄積を踏まえて、「京都から考える」「辺境から考える」「身体から考える」「専門を横断して考える」というタイトルでそれぞれ報告を依頼した。そして、コメントには人文研の助手をされていた石毛直道、野村雅の両氏を迎えた。

まず谷泰先生が挨拶をし、その後、上記の四氏が報告をおこなった。休憩を挟んで、石毛、野村両氏のコメントがなされた。シンポジウムの後半では田辺明生氏が田中から司会を引き継ぎ、フロアからの質疑やコメントを受けた。

当日は京大大会館の一番広い部屋(三〇人定員)を確保していたが、およそ二〇〇人以上の参加者があり、たいへんな盛況であった。また打ち合わせなどしていなかったにもかかわらず、人文研を中心とする人類学の歴史がうまくつながら、内容においても申し分のない完成度の高いシンポジウムであった。満杯で入場をあきらめて帰られた方もいたし、京都人類学研究会の学生幹事の中には、会場整理と椅子運びでシンポジウムを聞くことができなかつた者もいたようである。以下の記録を通じて、当時の様子に触れていただければと願う次第である。

この場を借りて本シンポジウムの報告者、モデレータの方、多忙の中参加していただいた方々に感謝したい。また、と

くにチラシの配布から会場案内まで事務関係の仕事を手伝ってくれた、学生幹事代表の武田龍樹さんをはじめとする京都人類学研究会の事務局のメンバーの方々、人間・環境学研究科の文化人類学専攻の院生（とくに修士二年の方々）、そしてコメント・討論のテーパー起しをお願いした博士課程の嶺崎由美子氏にあらためて感謝の意を表したい。

なお、シンポジウムでの谷先生のごあいさつは、本冊子の「巻頭のことば」に使わせていただいた。

田中雅一



京都大学 人文科学研究所 社会人類学部門 創設50周年記念シンポジウム

# 人類学の誘惑

京都からの回顧と発信

2010年 4月17日(土) 13時~18時

京大公会館 1F (〒606-8501 京都市北区田辺町15-9)

共催 人文研アカデミー、京都人類学研究会、同世代 人文科学研究会、京都大学 社会人類学部門

## シンポジウム

- 別会
  - ごあいさつ (16時) 田中 雅一 (京都大学 名誉教授)
  - 個別報告
    - 「京都から考える」 菊地 暁 (京都大学 人文科学研究所)
    - 「辺境から考える」 飯田 卓 (国立民族学博物館)
    - 「身体から考える」 佐藤 知久 (京都大学 人間学)
    - 「辺境を横断して考える」 河合 香史 (東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所)
    - コメンテーター
      - 石毛 直道 (国立民族学博物館 元館長・名誉教授)
      - 野村 雅一 (総合研究大学院大学 副学長)
    - 総合討論 (16時)
      - コーディネーター
        - 田辺 明生 (京都大学 アフリカ地域研究センター)

講演者・聴衆共に 事前に申し込みをせずに、当日会場にお越しください。

人文研アカデミー2010 人類学の誘惑 京都からの回顧と発信

京都大学 人文科学研究所 社会人類学部門 創設50周年記念シンポジウム

プロフィール

|  |  |
|--|--|
|  | <b>田中 雅一</b><br>京都大学 名誉教授<br>1932年 - 1997年。専門は文化人類学、社会人類学。1997年、京都大学を退学。1998年、京都大学を退学。1999年、京都大学を退学。2001年、京都大学を退学。                   |
|  | <b>菊地 暁</b><br>京都大学 人文科学研究所 教授<br>1942年 - 2009年。専門は文化人類学、社会人類学。1997年、京都大学を退学。1998年、京都大学を退学。1999年、京都大学を退学。2001年、京都大学を退学。              |
|  | <b>飯田 卓</b><br>国立民族学博物館 准教授<br>1947年 - 2009年。専門は文化人類学、社会人類学。1997年、京都大学を退学。1998年、京都大学を退学。1999年、京都大学を退学。2001年、京都大学を退学。                 |
|  | <b>佐藤 知久</b><br>京都大学 人間学 准教授<br>1948年 - 2009年。専門は文化人類学、社会人類学。1997年、京都大学を退学。1998年、京都大学を退学。1999年、京都大学を退学。2001年、京都大学を退学。                |
|  | <b>河合 香史</b><br>東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授<br>1950年 - 2009年。専門は文化人類学、社会人類学。1997年、京都大学を退学。1998年、京都大学を退学。1999年、京都大学を退学。2001年、京都大学を退学。 |
|  | <b>石毛 直道</b><br>国立民族学博物館 元館長・名誉教授<br>1951年 - 2009年。専門は文化人類学、社会人類学。1997年、京都大学を退学。1998年、京都大学を退学。1999年、京都大学を退学。2001年、京都大学を退学。           |
|  | <b>野村 雅一</b><br>総合研究大学院大学 副学長<br>1952年 - 2009年。専門は文化人類学、社会人類学。1997年、京都大学を退学。1998年、京都大学を退学。1999年、京都大学を退学。2001年、京都大学を退学。               |
|  | <b>田中 雅一</b><br>京都大学 人文科学研究所 教授<br>1953年 - 2009年。専門は文化人類学、社会人類学。1997年、京都大学を退学。1998年、京都大学を退学。1999年、京都大学を退学。2001年、京都大学を退学。             |
|  | <b>田辺 明生</b><br>京都大学 アフリカ地域研究センター 教授<br>1954年 - 2009年。専門は文化人類学、社会人類学。1997年、京都大学を退学。1998年、京都大学を退学。1999年、京都大学を退学。2001年、京都大学を退学。        |

会場案内図

会場：京大公会館 1F (〒606-8501 京都市北区田辺町15-9)

交通：京大前駅 徒歩5分

お問い合わせ：075-753-5000 (受付時間：10時~17時)

主催：人文研アカデミー、京都人類学研究会、同世代 人文科学研究会、京都大学 社会人類学部門

チラシデザイン・(株)アクティブKEI 伊藤 恵

# 京都から考える

——京大人類学の二つのオリジン

## はじめに——人文研探検

このたび、京大人文研・社会人類学部門の五〇周年を記念するこのシンポジウムに、部門スタッフでもない私が「前座」を務めさせていただきますことになりましたのは、私が同僚の岩城卓二さんとともに「人文研探検」（二〇〇七年四月〜二〇一〇年三月）という奇妙な共同研究を主催していたからだと思えます。

二〇〇八年、東二条西北角にありました人文研の旧本館が、本部構内の現本館へと移転したわけですが、その際、人文研に収められた資料を無事に移転させるため、さらには、それらの資料を二〇〇九年の人文研創立八〇周年記念事業に活用するため、いわば緊急避難的に発足したのが「人文研探検」です。結果的には三年間、研究所のためこまれたウヅウムゾウのガラクタ整理に終始したのですが、とはいえ、いろいろ興味深い資料を再発見できたことも事実です。

たとえば、民俗学者・柳田國男が人文研の東洋史家・藤枝晃に宛てたハガキが見つかりました（写真1）。柳田特注、自分の写真を印刷したハガキです。今西錦司、梅棹忠夫、藤枝晃といった人たちが中心となって『自然と文化』という雑誌を刊行していましたが、柳田はこの雑誌のために執筆していた原稿の遅れを言い訳するため、このハガキを送ったよう

す（注1）。

また、一九六六年からは今西錦司を中心に「京都大学アフリカ学術調査」が実施されますが、このとき、今西がアフリカから送った書簡が「アフリカ通信」として残されておりまして、これが大変面白いものです。「美貌の誉れ高いグドー」「霊長類学者ジェーン・グドール」もマラリアのせいとか、大分やつれてみえた」が同行者は涙を流して喜んでいたりとか、「妖花のようなアフリカ美人」の「毒気にあてられて下痢するものが続出」したとか、下らない話もいろいろありますが、独立で活気つく一九六〇年代初頭のアフリカの様子や垣間見える非常に貴重な内容です。これは創立八〇周年記念パンフレットに全文が掲載され、人文研のホームページからダウンロードすることができます。

さらには、共同研究班や「近衛ロンド」を録音したオープンリールテープも二五〇本ほど保管されておりまして。梅棹忠夫の「論文の書き方」講座、『季刊人類学』の合評会、「民族学博物館設置計画座談会」など、いろいろ興味をそえられるものがあり、いくつかがデジタル化してみました。サウンドオンリーですが、当時の様子を彷彿とさせるもので、「梅棹班はとにかく声が大きく、よく笑う」「いちばん静かな研究班とくらべたら、お通夜と寄席ほどのちがいです」と『知的生産者たちの現場』（藤本ますみ著 講談社文庫、一九八七年）に書かれていたのが、なるほどと

## 菊地 暁

きくちあきら  
京都大学人文科学研究所助教

得心されます。

紹介していくとキリがないので、このあたりで切り上げますが、こうした資料を手がかりとすることで、京大の人類学の歴史を、また違った角度から考えられるのではないかと考えております。

## ひとつのオリジン——京大生態学派

ここで、社会人類学部門の流れを簡単に確認しておきたいと思えます（注2）。

京大人文研・社会人類学部門は、一九五九年、今西錦司を初代教授として設置されました（注3）。一九五〇年の人文研着任以来、永らく「万年講師」だった今西をなんとか教授にしようということ、この部門が設置されたといえます。今西退官後は梅棹忠夫が引き継ぎ、梅棹が国立民族学博物館設立のために転出すると谷泰さんが引き継ぎ、さらにその後を田中雅二さんが引き継ぎ、今日の目を迎えております（注4）。

さて、京大の人類学者の



写真1 藤枝晃宛柳田國男ハガキ  
（一九五二年六月二四日）  
写真2 和辻哲郎寄贈 ジャワの影絵人形



オリジンが、今西・梅棹をはじめとした理学部・農学部出身の生態学者たち、といえますか、学士山岳会の登山家たち、探検部の探検家たちにあることは、みなさますでにご承知のことかと思えます。じつさい、フィールドワークは戦前からすでに始まっており、白頭山(一九三四)、南樺太(一九三七)、ポナペ島(一九四二)、大興安嶺(一九四二)、内蒙古(一九四四～四六)といった学術探検がなされ、その経験が戦後のカラコラム・ヒンズークシ(一九五五)、アフリカ(一九六六～六七)、そしてヨーロッパ(一九六七～七二)といった京大人文研を中心としたフィールドワークにつながっていくわけです。

そして、研究者たちの結節点となり、新たな人材の供給源ともなった、探検地理学会(一九三九年設立、以下も同様)、自然史学会(一九四八)、生物誌研究会(一九五二)、探検部(一九五六)、近衛ロンド(一九六四)等々の研究会・団体が、上記のフィールドワークを支える重要な役割を果たしたことも忘れてはならないでしょう(注5)。

このような、京大生態学派、今西・梅棹グループを中心とした、研究機関／研究会／学術調査プロジェクトのゆるやかな連鎖のなかで、京大の人類学はそのユニークな調査研究を推し進めてきたわけです。

### もうひとつのオリジン——京大文化史学派

こういった京大生態学派の系譜は改めて申し上げるまでもなく大変重要ですが、次の飯田卓さんのご報告で詳細にとりあげられるようですし、なによりその当事者である大先輩たちが本日この場にお集まりですので、私のほうから申し上げるのはこの程度とさせていただきます。

以下では、京大生態学派に比べてあまり言及されることはありませんが、京大の人類学を考える上で

見過ごすことのできない文系の人類学の系譜、京大文学部史学科を中心に活躍した「京大文化史学派」について紹介したいと思います(注6)。

そもそも、帝国大学は二つではないかん、切磋琢磨するライバルがいなければ、ということ、一八九七年、京都帝国大学が設立されまして、文科大学(後の文学部)は日露戦争の影響で若干遅れ、一九〇六年に設置されます。これには哲史・文の三学科が置かれ、史学科は一九〇七年の設置です。

この新たに発足した京大史学科は、東大への対抗を意図して作られたわけで、じつさい、そこに集められたスタッフたちもその意欲は満々だったわけですが、そのことはいろいろな点に現れます。ひとつは、旺盛な学問的越境。東洋史の内藤湖南が『日本文化史研究』(一九一四)を、西洋史の原勝郎が『日本中世史』(一九〇六)を著すかと思えば、日本史の三浦周行が旅行記『過去より現代へ——欧米観察』(一九二六)を発表する、といった具合に、互いの専門領域へのオーバーラップがしばしば試みられます。

もうひとつは、史料(資料)の拡張。そもそも史学科の五つの専攻のなかに人文地理学、考古学という非文字資料を扱う専攻を含んでいた点が注目されるのですが、さらには、史料編纂所や国立博物館といった国家的収集機関と遠く隔たっていたということも手伝って、スタッフ全員が丸となって資料収集に尽力する姿勢がみられました。そのなかには国内外の民族資料も相当含まれており、珍しいところでは、和辻哲郎が寄贈したジャワの影絵芝居の人形なんというものもあります(写真2)。そんなわけで、文献史料のみにとどまらない、史料の広範な探索と活用がなされたわけです。

さらに、史学科五専攻が「陳列館」という一棟を占め、その場における日常的交流を通じて方法論を

深めていたことは決定的に重要です(写真3)。当時の京大の歴史学は政治史中心の東大に対して「文化史学」とよばれていたわけですが、そこには、それを支える人的、資料的、空間的なさまざまな条件が作用していたわけです。

このような雰囲気の中で「文化史学」の申し子となったのが、京大史学科二期生にして国史学教授となる西田直二郎(一八八六～一九六四)です。大阪生まれ、天王寺中学、三高を経て京大で国史学を専攻した西田は、日本史の教授以外にも、東洋史の内藤湖南、西洋史の原勝郎にも指導を仰ぎ、学際的な研究を推し進めていきます。そして、欧米留学でケンブリッジ大学の人類学者W・H・R・リヴァーズを受講したことは、彼に「人類学的方法論による歴史学の革新」という着想を与え、それは後に『日本文化史序説』(一九三三)にまとめられます。

この西田の「文化史学」に魅せられた史学科の学生たちは、一九二七年、京大民俗学会を結成します。名称は「民俗学会」ですが、実際には、歴史



写真3 文学部陳列館

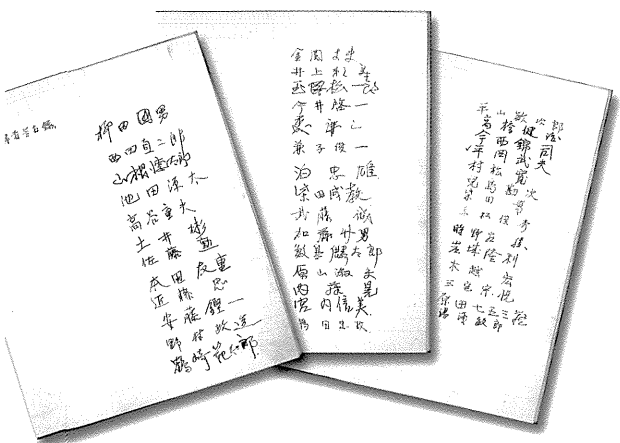


写真4 京大民俗学会の会務ノ一ト、一九三四年五月二七日の研究会参加者名を記す

学、考古学、地理学、言語学、人類学と多様な分野を横断した非常に学際的な研究会です。たとえば、一九三四年五月二七日、洛友会館での研究会には、柳田國男を招いて、当時柳田を中心に実施されておりました「山村調査」についての討議がなされていますが、会場には今西錦司も駆けつけていたことが、残されたノートからわかります(写真4)。また、研究会のほか、近畿二府での民俗調査や図書の収集を行い(写真5)、マリノフスキー『未開社会における慣習と犯罪』を原典講読していたことも、残された英文プリントからわかります。

研究会の参加者は必ずしも専門の民俗学者・人類学者にはならないのですが、他の分野の専門家となりつつも、民俗学的・人類学的関心を持ち続けることとなります。たとえば、京大民俗学会の結成に関わり、後に京大人文研教授となった水野清一(一九〇五〜七二)は、戦時中の雲岡石窟寺院の調査成果を『雲岡石窟』全六巻三冊(九五〜九五)にまとめ上げ、学士院賞を受賞した著名な考古学者ですが、考古学調査のかたわら、現地の民俗学的探集もおこなっています(写真6)。一昨年、北白川の人文研分館の収蔵庫から当時の様子を収めた二六ミリフィルムが発見されたのですが、それを見ますと、石窟寺院遺跡とともに、磁州窯の陶器生産の様子などが収められており、水野の調査隊が遺跡のみならず風俗習慣にも関心を寄せていたことがわかります。ついでにいっておきますと、戦時中の雲岡調査、そして戦後、やはり水野を中心に実施されたイラン・アフガニスタン・パキスタン調査(イアパ、一九五九〜六八)の経験は、京大人文研に学術探検隊を送り出す貴重なノウハウを与えたわけで、この蓄積が今西、梅棹にも活用されていくこととなります。

時間も限られますので他の例を挙げる余裕が

りませんが、ともかく、京大史学科の「文化史学」という学風が民俗学・人類学の受容にプラスに作用したことは事実です。

さらには、そのような機運を受けて人類学専攻の設置も模索されておりました。考古学の教授で京大総長となった浜田耕作は、東大理学部に自然人類学専攻を設置する動き(一九三九年に設置)があることにふれて、「京都大学にも人類学教室を作る心算です。早急にやると総長の椅子を利用してやつた様に思はれるから、まあ、総長を辞める時にでも置土産に作り度いものです」と語ったといえます(注7)。残念ながら、浜田が総長在任中、一九三八年七月に病で倒れたため、このプランは実現しませんでした。浜田の思惑の詳細はわかりませんが、この人類学専攻が自然人類学をさすのか文化人類学をさすのか、設置されるのは文学部なのか理学部なのかはまた医学部なのか、それは全くわかりませんが、当時の京大史学科の雰囲気を考えますと、そこに文化人類学が含まれたことは十分にあり得たことだと思います。そうすると、本日この会は京大に人類学の講座が設置されて五〇周年を迎えたことを記念しているわけですが、その歴史がさらに遡る可能性もないではなかったわけですね。

そんなわけで、日本の人類学がアカデミズムに制度的に確立される以前、人類学に興味関心を抱く人々がどこに集っていたかという点、理系ならば生態学、文系ならば歴史学だったのではないかと思います。京大生態学派の存在感の影に隠れて、あまり表立つことはありませんでしたが、人類学、そしてフィールドワークの受け皿ないしは依り代として、歴史学のもった意義は、より積極的に認識されてよいはずですね。

## おわりに——人類学史の無用の用

以上、ここ数年私が出くわしましたトリビア的な資料をまじえつつ、京大の人類学の歴史について思うところを述べさせていただきました。最後に、人類学史の存在意義といったことについて、若干私見を述べたいと思います。

といいますのは、失礼ない方かもしれませんが、日本の人類学史についてあまりご存じない、という印象を持っております。たとえば、日本文化人類学会の前身である日本民族学会が一九三四年に設立されたとき、初代理事長となったのは東洋史家の白鳥庫吉、二代目は文部官僚の西山政猪、三代目は社会学者の高田保馬、と、人類学者にはあまり馴染みのない名前が並んでおり、そもそもこのことをご存じの方がそれほど多くないのではないかと思います(注8)。

それが良いのか悪いのかといいますが、と、アプリアリに悪いとは思いません。学祖の業績を知らなくても当面の研究には差し障りはないわけで、むしろそのほうがノーマル・サイエンスとして正しいというか、あるいは、いつも柳田・折口を引張り出さないと学問的定位ができない民俗学などのほうが、逆により異常なのかもしれません。ローカルな、あるいはナショナルな人類学の伝統をことさらに顕彰する必要はおそらくないと思います。



写真6 水野清らが内蒙古調査の際に撮影したモンゴル相撲(一九三〇年?)



写真5 京都府天田郡金山村上野桑八幡神社神事田楽(一九三〇年代中頃の撮影か?)

とはいえ、では、日本の人類学者の仕事が、グローバルあるいはメトロポリタンな人類学にキチンと位置づけられているのかというと、それは疑問な気がします。欧米の人類学のジャーナルのビブリオを眺めても、そうそう見知った日本人の名前に出くわすことはないわけで、日本の人類学者の仕事がどこでどう蓄積され消費されているのかという問題は考の価値があります。

そんなわけで、私たちの人類学的な営みが、京都(ローカル)、日本(ナショナル)、世界(グローバル)といった位相にそれぞれどのように位置づけられるのか、ときどき、人類学の歴史を振り返ってみることは、やはり必要なことでしょう。そして京都は、そのための大変興味深い「フィールド」であると考える次第です。

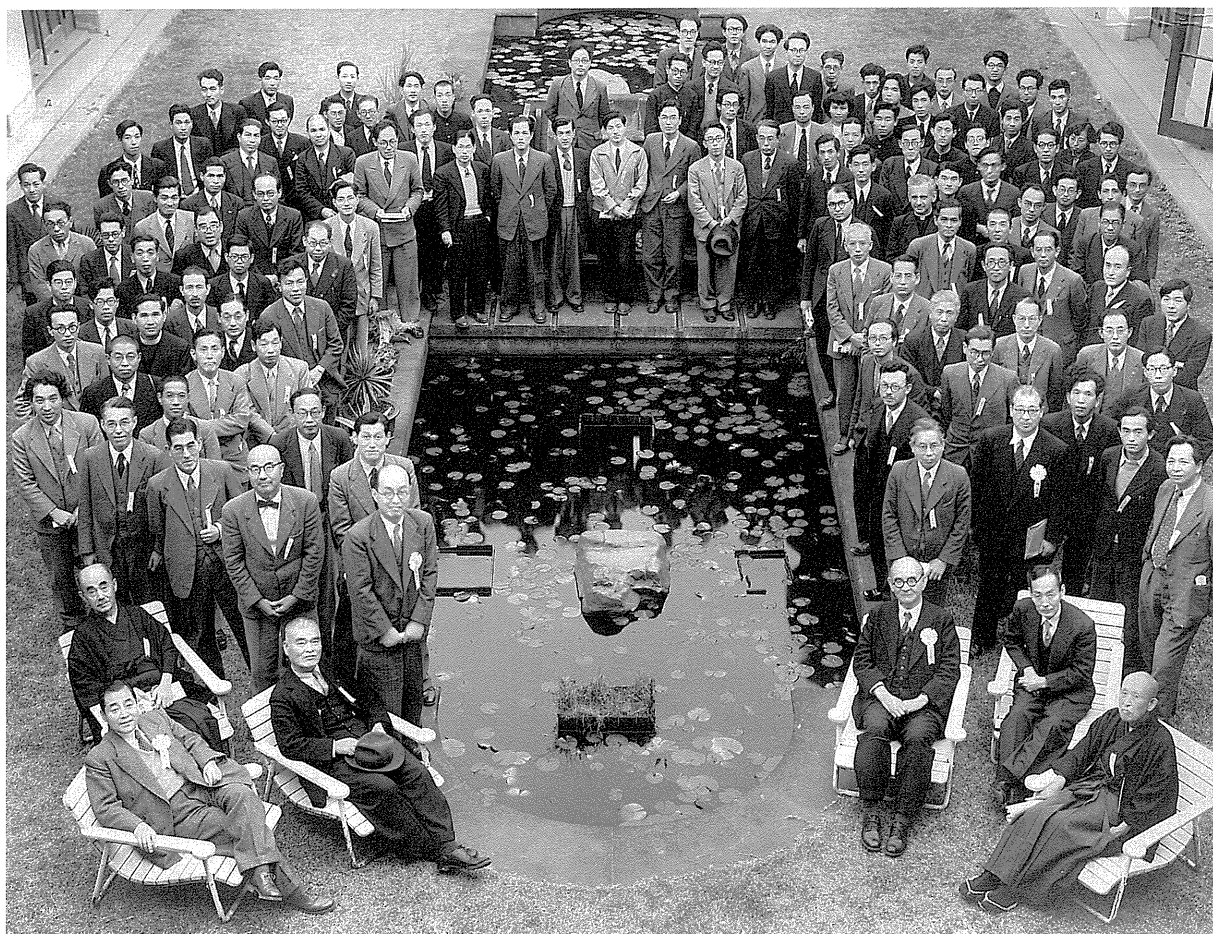
注

- (注1) 菊地暁「柳田国男の藤枝晃宛ハガキ」『漢字と文化』一五、二〇〇八年参照。
- (注2) 基本文献として、京都大学人文科学研究所(編)『人文科学研究所五〇年』一九七九年、梅棹忠夫『研究経営論』岩波書店、一九八九年、京大探検者の会(編)『京大探検部』一九五六〜二〇〇六、新樹社、二〇〇六年、を挙げておく。
- (注3) レウィーストローを初代教授としてコレージュ・フランスの社会人類学講座が設置されたのも同じく一九五九年。
- (注4) 社会人類学講座は二〇〇〇年の改組で人文科学研究部文化研究創成研究部門人類誌分野となった。
- (注5) 探検地理学会については、山野正彦『探検と地政学』大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向』『人文研究』一五(九)、一九九九年が参考になる。
- (注6) 詳細は、菊地暁『京大史の「民俗学時代」——西田直二郎その「文化史学」の魅力と無力』丸山宏他(編)『近代京都研究』思文閣出版、二〇〇八年、菊地暁「敵の敵は味方か?——京大史学科と柳田民俗学」小池淳(編)『民俗学的想像力』せりか書房、二〇〇九年を参照。
- (注7) 八幡郎「濱田先生を追慕す」『考古学論叢』八二、一九三八年
- (注8) 財団法人民族学振興会(編)『財団法人民族学振興会五〇年の歩み』一九八四年

を  
る  
記  
録  
た  
ど  
る

## 日本人類学会・日本民族学会連合大会 1951年

連合大会は、1884年設立の東京人類学会(設立時は「じんるいがくのとも」、1941年より「日本人類学会」)、1934年設立の日本民族学会(現・日本文化人類学会)が、学問的交流を深めるため、1936年より始めた学術大会である。研究分野の多様化にともない見直しははかられ、第50回(1996年)をもって終了した。

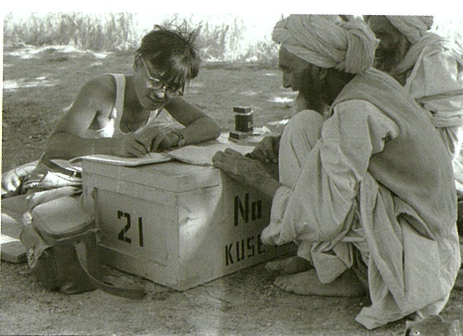


京大人文研(北白川)の中庭で撮影された第6回日本人類学会・日本民族学会連合大会参加者(1951年10月27日)。左下角に椅子に座るのが滋澤敬三。その上の和服の人物が柳田国男。その後方に貝塚茂樹、今西錦司、藤枝晃などが立っている

# カラコラム・ヒンズークシ学術探検

1955年

戦後初のエクスペディション(探検)として派遣されたカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊は、農学部の木原均を隊長に組織された総合的学術調査隊であった。しかし実行委員長に人文研所長の貝塚茂樹が就き、カラコラム支隊長の今西錦司以下3人の所員が人類班として参加、事務局も人文研に置かれるなど、人文研のエクスペディションと呼ぶに値するものだった。この探検隊はその後、所内で組織化されたイラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊(1959～1968年)をはじめ、内外各方面に影響をもたらした。



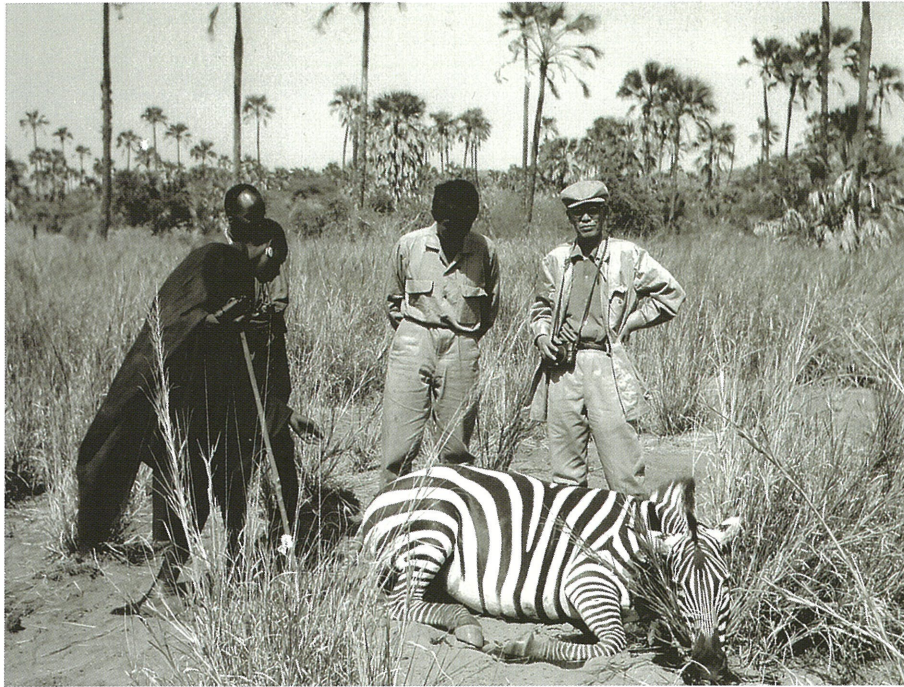
〈左〉ヒンズークシ隊はモゴール族の住むゴラート地方を馬で進む  
 〈右上〉調査途上のキャンプ宿営  
 〈右下〉モゴール族の村はずれの木陰でことばや生活の聞きとり調査  
 〈下〉カラコラム隊は氷河地帯を進む。河原の広いバシャ河を渡河中の人夫隊。1955年6月



# アフリカ(類人猿)学術調査

1961~68年

人文研所内ではイラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊と並行して、戦後日本ではじめての大規模なアフリカ調査も組織された。社会人類学部門の初代教授をつとめた今西錦司はカボゴ基地の類人猿班とエヤシ基地の人類班を統括し、人文研を退職する1965年春まで隊長をつとめた。その後、隊長は理学部の伊谷純一郎に引き継がれ、調査は1968年まで6回にわたって実施された。



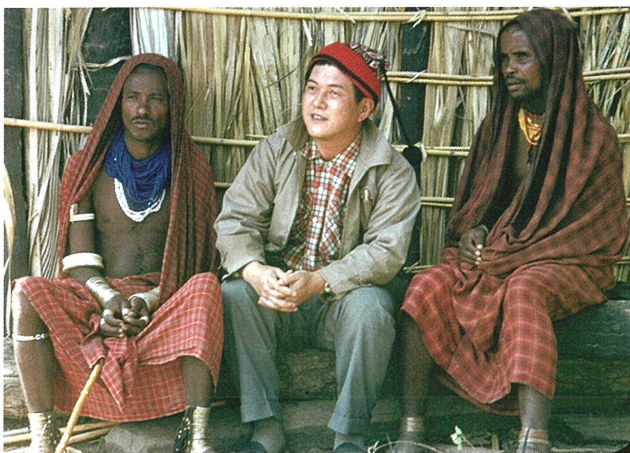
〈左〉1961年から62年にかけての第1次アフリカ学術調査において、62年8月には桑原武夫人文研所長も京都大学アフリカ類人猿学術調査委員会委員長として人類班のエヤシ基地を視察した(写真右)

〈中左〉アフリカ調査中の梅棹忠夫

〈中右〉エヤシ基地で隊員と打ち合わせをする今西錦司

〈下左〉長期観察を視野にいれた類人猿班の調査基点として建てられた鉄骨プレハブ作りのカボゴ基地前で

〈下右〉調査基地で装備品の荷下ろし作業。各箱に記された番号は参加隊員にふられた番号に対応させたもの

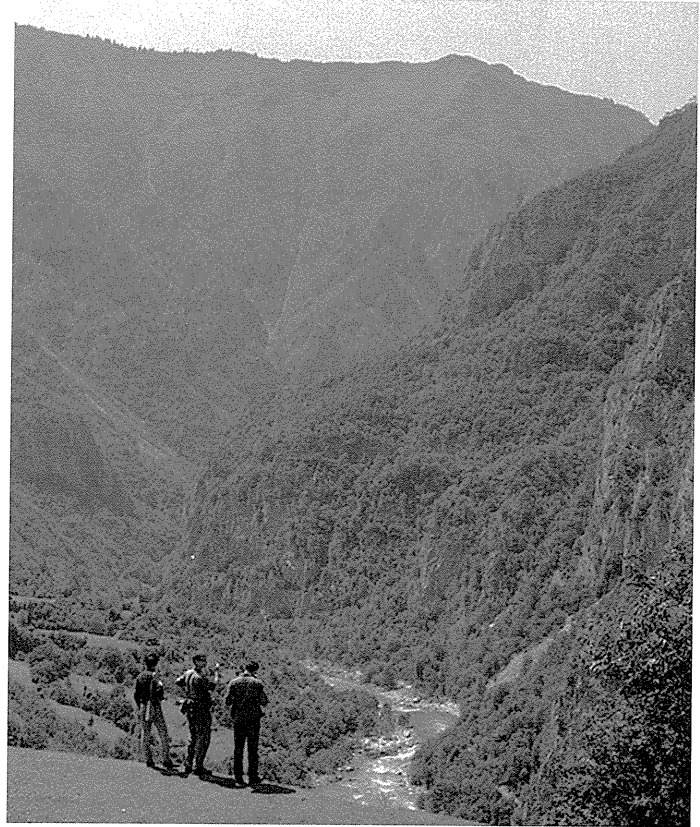
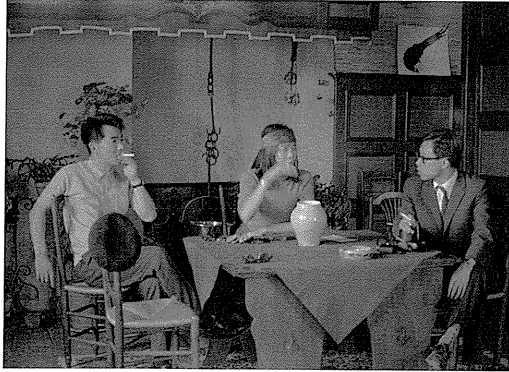




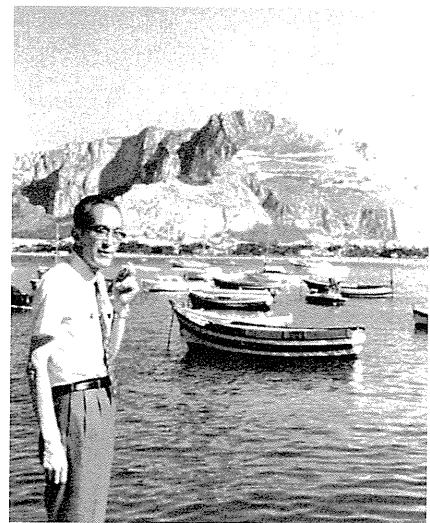
# ヨーロッパ学術調査

1967~72年

10年近くにおよぶアフリカ調査の経験をふまえて行われたのが、梅棹忠夫を中心に3次にわたって派遣されたヨーロッパ学術調査隊であった。ヨーロッパを文明の規範とする従来の固定的な観念を破り、ヨーロッパもアフリカや他の地域と同等に相対的な価値を置いた画期的なエクスペディションとして、20人を超える研究者がイギリス、フランス、スペイン、イタリア、スイス、トルコの村々に分かれて調査した。



〈左上〉第2次ヨーロッパ学術調査隊の谷泰(左)と野村雅一(右)。1969年  
 〈左中〉農家を訪問するとまずシュリヴォヴィツァ(プラム・ブランデー)が提供される。左から梅棹忠夫、青年探検家クラブの学生、同行した地理学者のプレヴィナツ教授。1969年7月15日。旧ユーゴスラヴィア、ツルナゴラ(モンテネグロ)、ドルミトール山群のみえる高原の村、ポドコーラで(下の写真も)  
 〈左下〉調査の合間に、宿泊していた学校の庭で、青年探検家クラブのメンバーに日本語について英語で講義する梅棹忠夫。青年探検家クラブの学生により、セルビア語に翻訳され、質疑討論がおこなわれた。うしろ手前にすわっているのは、同行した丸尾兼平。1969年7月19日  
 〈右上〉渓谷調査。1969年  
 〈右下〉第3次ヨーロッパ学術調査での会田雄次隊長。1972年



## 辺境から考える

——知識共有の手段としてのエクスペディション

ただいま、菊地暁さんから、京大人類学の「もうひとつのオリジン」について話題提供がありました。人文研の社会人類学班を創設した今西錦司と、「もうひとつのオリジン」に深く関わった水野清二には、共通点があります。それは、複数研究者の共同によるフィールド調査を重視したという点です。

文化・社会人類学や生態人類学では、フィールド調査で得られた資料が欠かせません。これは、実験データや文献資料にもとづく諸科学との大きな違いです。フィールド調査の重要性は、人文研で社会人類学部門が創設された頃、すでに常識となっていました。しかし、当時はさまざまな理由で、研究者個人によるフィールド調査を海外でおこなうことはむずかしかった。そこで、多数の研究者に呼びかけてひとつのグループを作つて、日本政府や渡航先政府と交渉をおこなう必要がありました。

今日の話では、こうしたグループ形態の海外調査をエクスペディションと呼んでおきたいと思えます。海外調査がエクスペディションというかたちをとらざるを得なかった当時の状況を、今日はふり返つてお話しいたします。それが今日の論点のひとつです。

しかしそのいっぽうで、エクスペディションという調査形態は、しかたなくとられたわけでもありません。エクスペディションにおける協働は、共同研究における成果共有とパラレルに考えられていたふしがあります。共同研究が資料分析プロセスの共有だとすれ

ば、エクスペディションは資料獲得プロセスの共有だというわけです。共同研究については、後の河合香史さんが詳しくふれられます。わたしの話では、エクスペディションの概要を中心に、それが共同研究とのつながりで考えられていたようすを紹介したいと思います。これが今日の論点のふたつめです。

### 人文研のエクスペディション

人文研におけるエクスペディションの始まりは、菊地さんのご紹介にあったように、水野清二の中国調査に求められます。彼は、一九三八年から四四年にかけて七回にわたつて、人文研所員とともにエクスペディションを組織しました。その調査のなかでは、雲岡石仏を実測するなど、現在からみてもユニークな資料収集をおこなっています。

こうした東洋史学者や文化史学者の活動とほぼ同じ頃、人文研の社会人類学部門を創設することになる人たちも、エクスペディションを基礎とした學術活動を始めていました。京都探検地理学会が発足するのは、一九三九年です。その幹事六名のなかには、水野清二も含まれています。この会では、月一回の例会をとおして、さまざまなフィールド調査の成果が披露されました。それと同時に、今西錦司が隊長となつて、学部生レベルの研究者たちを率いてエクスペディションに出かけています。学部の指導教官から離れたところで実地教育がおこなわれていた

## 飯田 卓

国立民族学博物館准教授

わけで、その点でも当時はめずらしかつたといえましょう。一九四二年にはボナペ島を調査し、一九四二年には北部大興安嶺の探査をおこなっています。ふたつの調査に参加した学部生のひとりに、のちに人文研の社会人類学を担う梅棹忠夫がおりました（京都大学総合博物館編二〇〇二）。

一九四〇年代後半と一九五〇年代前半は、戦争とそれに続く占領統治のため、海外エクスペディションは組織されなくなりました。国内のフィールド調査がおこなわれてはいましたが、大学自体が改革のうねりのなかにありましたが、學術全般が停滞してもしかたのなかつた時期です。

一九五〇年代後半以降は、人文研からたて続けにエクスペディションが派遣されます。研究所の五〇年史（京都大学人文科学研究所編一九七九・二八）や『要覧』（京都大学人文科学研究所編一九九三・八二）には、戦後のエクスペディションとして、次の五つが列挙されています。①カラコラム・ヒンズークシ學術探検（一九五五年）、②イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査（一九五九～六八年）、③アフリカ類人猿學術調査（一九六三～六八年）、④ヨーロッパ學術調査（一九六七～七二年）、⑤ユーラシア西南部有畜農耕社会の比較文化研究（一九七七～八二年）、などです（注1）。

②から⑤までは、人文研の教授が隊長となつてい



ましたので、人文研のエクスペディションと考えてさしつかえありません。しかし①は、京大農学部の木原均が隊長をつとめていました。それにもかかわらず、この調査を人文研のエクスペディションに含めた理由について、『五〇年』は記していません。これには、以下のような理由があります。

まず、隊員のなかには、人文研所員が少なくありませんでした。日本人隊員五名のうち、新聞記者や映画カメラマンを除くと二名、そのうちの今西錦司、岩村忍、岡崎敬（年齢順）の三名が人文研所員でした。また、梅棹忠夫は、当時大阪市立大学の助教授でしたが、人文研講師の資格で隊に参加しています。

また第二に、この探検隊の派遣母体としてカラコラム・ヒンズークシ委員会が組織されましたが、その実行委員長に人文研所長だった貝塚茂樹が就いています。委員長は学長の滝川幸辰でした。おそらく、広報や募金活動など事前準備の責任を、貝塚は担っていたのだと思われれます。

また第三に、この隊の事務局は人文研に置かれ、装備の送り出しも人文研からおこなわれました。このときのように、中尾佐助（一九五六）や梅棹忠夫（一九九〇）が詳しく書いています。おそらく、戦前からエクスペディションを意識的におこなってきた今西錦司の采配で、出発準備の体制が整えられたのでしよう。

なお、カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊は、人文研のエクスペディションを担う二つのグループの共同事業としても、意義深いものでした。二つのグループとは、のちにアフリカ学術調査をおこなう今西・梅棹らの社会人類学グループと、イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査をおこなう岩村・岡崎らの東洋史グループです。

## なぜエクスペディションか

昭和三〇年代の二〇年間は、エクスペディションという調査形式が日本でもっともさかんにおこなわれた時期でした（飯田二〇〇七、二〇一〇）。戦後最初の本格的な海外調査といわれるカラコラム・ヒンズークシ学術探検は、一九五五（昭和三〇）年です。また、一九六三（昭和三八）年になると、海外業務渡航の制限が緩和されると同時に、文部省が制度的に海外調査を認めるようになり、この二つの年によって区切られる時期には、研究者がマスメディアと積極的に連携しながらエクスペディションを組織し、学術をいわば大衆化していきました。それには次のような背景があります。

まず、海外渡航費用が高額にのぼったということがあげられます。当時は、一ドルが三六〇円に固定されていた時代です。個人の資金で海外渡航をおこなうのは困難でした。そこで、エクスペディションの派遣を企業などから支援してもらう必要があります。具体的には、著名な学者を隊長に据えて、学術的な意義も掲げながら、大学に対して寄付をしてもらう。そしてそのために、新聞社の後援を受けたり、エクスペディションの映画を一般映画館で上映させたりする。いわば、社会的認知を得るために、あらゆる仕掛けがほどこされたのです。

また、寄付を集めるためだけでなく、外貨使用許可のためにも、社会的認知が必要でした。当時、日本から外貨を持ち出すためには、大蔵省に「対外支払許可申請書」を提出して、渡航目的の審査を受ける必要がありました。そして、そこで許可された額を上限として、外貨使用が許されたのです。審査では、渡航目的の社会的重要性が検討されましたから、許可を得るために、著名人やマスメディア

の協力がおおいに役立ったわけです。

こうした状況は、一九六三（昭和三八）年に変化します。業務渡航については、この年に外貨割り当ての審査がなくなり、個人旅行については、翌六四年に自由になります。この動きにあわせて、一九六三年には、文部省が科学研究費補助金に海外学術調査というカテゴリを設置して、海外調査を積極的に支援するようになります。つまり、企業の寄付に頼る必要もなくなったわけです。このため、海外調査に対しては社会的認知でなく学術的意義が問われるようになります。また、組織的な寄付集めが不要になると、調査の個人化も進みます。このような理由のために、昭和四〇年代以降は、エクスペディションと個人調査の区別が次第に曖昧になっていきます。

## フィールド研究の振興

このように、昭和三〇年代当時、海外調査はエクスペディションというかたちをとらざるをえませんでした。しかし、当時の関係者が書いたものを読めば、やむをえずそのようにしたとは思えません。むしろ、エクスペディションという調査形態に積極的な意味を見だし、その形態を必要としない国内調査にも拡大させようというような、そんな意気込みが感じられます。フィールド研究に関わる九つの学会が代表者を選出して九学会連合対馬調査を実現するのは、一九五〇（昭和二五）年のことで、カラコラム・ヒンズークシ学術探検より五年も前です。しかしその後、能登調査（一九五二～五三年）、奄美大島調査（一九五五～五六六年）、佐渡調査（一九五九～六〇年）、下北調査（一九六三～六四年）、利根川調査（一九六六～六八年）、沖繩調査（一九七二～七三年）、ふたたび奄美調査（一九七五～七七年）と回を重ねるなかで、海外エクスペディションの考えかたは国内調査にも影



響していきました。

エクスペディションという方法は、フィールド研究によつて得られる資料の重要性を、学界に広く認めさせることになりました。それまで文献研究をしていた学会の重鎮が、エクスペディションに深く関わるとその学会ではフィールド研究が否応なく認知されるようになります。文化人類学の例でいえば、神話学者だった松本信廣が、日本民族学協会の東南アジア稲作民族文化総合調査団(第一次、一九五七年)を率いたようなケースです。九学会連合に参加した学会では、多かれ少なかれ、フィールド派の力が増していったように思います。

文献研究や実験室での研究に対抗して、フィールド研究を盛りたてようという意図は、人文研の社会人類学部門に関わる人たちが当初からもっていたものでした。たとえば、今西錦司はこのようなことを書いています。

帰国の途すがら私は神戸付近の惨憺たる戦災のあとをみて、これでは復興も容易ではあるまいと思つた。……それとともにこの調子では、これから金のかかる実験的な仕事を始めてもどうしてアメリカに勝てるはずがない。そうとすれば親譲りの身体を動かし、あとは鉛筆とノートと望遠鏡さえあればできるフィールド(野外)の仕事で、太刀打ちする以外にはない。……われわれのようにきたない身なりをしてフィールドを駆けまわり、望遠鏡をのぞいているのは研究でないかのように取り扱われがちであったが、そろそろわれわれの仕事もその真価の間われるときがきたのではないか、と思つたのである。(今西一九七五、四六五―四六六)

ここでは実験室での研究に対抗する意識がうかがえますが、文献研究に対しても、梅棹忠夫が次のように書いています。

日本学術の伝統的な傾向として、むしろ実証よりは思索、現象の観察帰納よりは原理よりの演繹の説明という傾きがより強力であったことは否めない所であろう。……実は日本探検が今まであまり振わなかつたというのも、一つは探検がその生命とする実証的精神が、日本においてなお確固たる伝統を樹立していなかつたという事情に負う所多いのである。(梅棹一九四三、一一五)

ここで梅棹が「探検」と呼んでいるのは、今日の発表というエクスペディションのことだと考えてほばまちがいありません。エクスペディションというヨーロッパの概念はさまざまな日本語で訳されますが、探検はもつとも一般的な訳語です。

### 知識共有の手段

昭和三〇年代当時において、エクスペディションという方法論がもっていたもうひとつの意義は、知識共有の手段としての意義でした。冒頭で述べましたように、複数の研究者がエクスペディションに参加して資料獲得のプロセスを共有し、帰国してから共同研究会で資料分析のプロセスを共有する、そうした二連の知識共有プロセスが、あたらしい知見を生みだすと考えられていたのです(注2)。

このことに関して、梅棹は先述した京都探検地理学会に関わつた同世代研究者の方法論を紹介する叢書の刊行趣旨のなかで、次のように書いています。

経験の継承や知識の集積は、集団的におこなわなければならない。グループをくんで協働の課題を追う以上は、おたがいの経験がちぐはぐであつ

てはまずい。グループの知識は、すくなくとも標準化されている必要があるのである。われわれがここに、わざわざ刊行というマス・コミュニケーションをえらんだのは、ひとつにはそつう理由があったのである。／逆にいえば、この冊子は、グループのためのものである。自然史学会中の青年有志と名のる人たちのためのものである。

(中略)

学問の世界にも偏狭なるコンパートメントリズムが根をはる。専門をこえた協力が必要であると口ではいけれど、じつさいに協力をスムーズにするための具体的手段が、どれだけでもふうされたであろうか。また、学問の世界にも軽薄なるジャーナリズムとサロン談義が横行する。口ざきと指さきで学問をしようとするのであるか。暖房や冷房のある場所をはなれよう。素朴なる野外において、なまの自然にまなぶすべを身につけるべきである。質実剛健は、いまなお科学の母である。／もう一度伝統ということばをくりかえすならば、専門をこえた共同研究と、豪放なる野外作業のふたつこそは、自然史学会(注3)の伝統であった。このような刊行物のくわだて自身が、まさにおなじ伝統の精神の産物にちがいない。(梅棹一九九二、四九五―四九六)

ここでは、野外調査つまりフィールド調査の方法論を意識的に標準化し、共有することによって、偏狭な専門家意識をうち破ることが目指されています。フィールド調査と共同研究はほんらいまったく別のいとなみですが、エクスペディションという研究体制をとることによって、ふたつが統合されると考えられます。この文章には、エクスペディションをつうじて知の共有を実現しようという、強い意思が感じられます。

のちに『知的生産の技術』を著し、情報集積の装置として民族学博物館を構想した梅棹の、知についての考えかたがここにはよくあらわれています。

梅棹以外の所員についてはどうだったでしょうか。梅棹と同じく理系の出身で、ロールシャッハ心理テストに関する業績で人文研に着任した藤岡喜愛は、次のように書いています。

私は生物誌研究会(略称F・F)の事務をつとめるようになってから、もう数年になる。また所内の共同研究に参加し、農村調査に参加している分野に接する機会にめぐまれた。気がついてみれば、共同研究の必要はすでにながらく唱えられているが、それが京都ではもう育ちはじめているのだ。体験を通してつくづく思うのは、探検計画などを含めて、共同研究が育つには、京都はまったくよい環境にめぐまれているといつことである。(藤岡一九五七、一九)

生物誌研究会(F・F=F fauna and Flora Society)というのは、カラコラム・ヒンズークシ学術探検が京都大学の事業となる以前、探検計画を立案した母体です。探検隊の事務局が人文研に置かれた大きな理由のひとつは、F・Fの留守番役として藤岡が人文研にいたためでしょう。この文章で藤岡は、エクスペディション(探検)を共同研究の形態としてとらえています。この文章に続けて、彼は次のようにも書いています。

私自身は共同研究の成熟を必要だとしているので、現状では「人文研の共同研究に対して」かなり無理な注文もつたくなっている。／第二に事務局の必要性がもつと正面から理解されねばならない。現在では事務局は一種の必要悪「いやら

され仕事」の意か」にすぎない。F・Fでは、探検おくり出しという事業がともなつたため、まずもつて事務局がつくられざるを得なかつた。また事務局がある程度はととのえざるを得なかつた。しかし一般の共同研究ではまだ充分でないように思われる。(藤岡一九五七、一九)

ここでも藤岡は、エクスペディションを共同研究会の一形態としてとらえ、事務局が円滑に機能する点で先進的だととらえています。おそらく、この考えは梅棹にも共通していたのでしょう。のちに梅棹が組織する共同研究の事務局は、電話や郵便で連絡をとったり、研究会の発言を録音して文字記録に起こしたりして、メンバー間のコミュニケーションを積極的にはかっていたといえます(梅棹一九九三)。

### エクスペディションの将来

次の梅棹忠夫の文章は、一九七〇年前後の状況を示したものです。この頃、彼は、一九六九年に始まった「文明の比較社会人類学的研究」と、アフリカ学術調査を後継する「アフリカ社会の研究」、さらに「理論人類学の研究」という三つの共同研究を運営していました。その人数はのべ五〇人ほどのほりましたが、研究会ひとつ分の予算だけを配分してもらうことで、所内の批判をかわしたそうです。

このような「三つの研究班にまたがる」集団は、いわゆる組織とはいえない。……この研究班は、班員として研究所の事務局に登録されているというだけで、ほかになんの拘束もない。いわば不定形の集団である。

(中略)

直接にわたしの指揮下にあるのは助手一名と、秘書たちだけである。あとはすべてわたしの指

揮命令系統に属さない、いわば盟友というにちかかった。／わたしはこの集団を一種のバルチザンのようなものだとかんがえていた。命令一下、全軍団が一体となつてうごくというのではない。戦闘単位は個人である。個人がばらばらにたたかっている。しかし攻撃目標についての共通の了解は成立している。そしておたがいのコミュニケーシオンは確保されている。(梅棹一九九三、九八)

この文章を読むと、梅棹のいう組織的行動は、軍隊のように規律が厳しいものではなかったことがわかります。初期の頃からそうだったかどうかはわかりません。というのも、彼は同じ時期、エクスペディションの編成原理についての考えかたを変えているからです。彼は、同じグループのエクスペディションで鍛えられたたき上げを中心メンバーに据える「養成主義」を理想としていたのですが(土倉・梅棹一九四三)、一九七〇年代の座談会では、エクスペディションでの協働を経験していない専門家を集めた「合成主義」でもうまうまいく時代になつてきたと言っています(江上ほか一九七二)。規律も以前は厳格に守ることを求めていたが、この時代にはゆるやかなものでかまわないと考えていた可能性があります。

このことは、社会をとりまく大きな変化とも関係しているでしょう。すでに述べたように、一九六三年以降はエクスペディションと個人調査の区別がなくなつただけでなく、海外旅行が自由化されたため日本人の海外での活動も多様化しました。そうしたなかで、社会的認知を得るための集団化や、組織的行動の必要性は低くなつていくのです。

しかし、エクスペディションをたんなる組織的行動とみるのではなく、知識共有の手段とみるならば、現代でもまだまだ可能性があるのではないかとわた

しは考えます。学術調査のありかたが多様化するなかで、エクスペディションという調査形態は必要ではなくなつたけれど、テーマによってはまたその効用を失つていないのではないのでしょうか。

たとえば、科学研究費補助金研究のテーマを見わたしても、地域研究の名のもとに領域横断的な計画が百出してきます。また、大学の学部改革のようすをみても、既成分野(Division)より分野横断型研究(studies)が幅をきかせているように思えます。さらに、大学附置研究所が全国共同利用の役割を担うことにより、さまざまな大学が数多くの共同研究をおこなうようになりました。このように、個の担う知とは別にグループの知が幅をきかせている現状をふまえれば、知識共有の手段であるエクスペディションを共同研究の基礎とするやりかたも、まだまだ可能性を秘めているように思われます。

#### 注

(注)①は、「人文科学研究所五〇年」のなかで「カラコルム・ヒンズークシ学術調査」と記されているが、本文では調査隊の正式名称を記した(木原編一九五五)。また、「五〇年」は②の終了年度を一九六五年、③のそれを六六年としているが、ここでは手元の報告書で確認できるもっとも遅い年代を記した(水野編一九七〇、今西・梅棹編一九六八)。③については、「五〇年」はたんに「アフリカ類人猿学術調査」と表記しているが、本文では一九六三年の名称変更もわかるようにした。また、一九七五年の海外調査として「地中海文化圏の社会と文化に関する学術調査」があげられている。この調査隊の計画は、西洋部の河野健二主任(当時)を代表として文部省に提出されたが、計画に関わっていた谷泰氏(元・人文研教授)によると実現しなかつた。それにもかかわらず「要覧」などに毎回掲載されたのは、申請実績を記録しようという意図がはたらいたためであろうか。(注)ただし、このシンポジウムの総合討議において谷泰氏が述べていたように、エクスペディションに関わつた人文研員は多数とはいえなかつたし、エクスペディションが共同研究を補うものと明確に主張していたわけでもない。以下の記述はあくまで、社会人類学部門の創設者の考えかたを遡及的にたどつたものだと理解していただきたい。

(注3) 京都探検地理学会は、戦後、解散を余儀なくされたため、一部の学会員を中心に自然史学会が組織され、戦前の研究成果の公表が進められた。

#### 文献

飯田卓二〇〇七「昭和三〇年代の海外学術エクスペディション——『日本の人類学』の戦後とマスメディア」『国立民族学博物館研究報告』三三(三)：二二七—二八五

——二〇〇「エクスペディション映画の系譜——二〇世紀前半の国産記録映画をふり返る」梅棹忠夫(監修)カラコルム／花嫁の峰チヨリザ刊行委員会(編)『カラコルム／花嫁の峰チヨリザ——フィールド科学のバイオアタチ』京都大学学術出版会、二〇一—二九九頁

今西錦司一九七五「一九七三」「私の履歴書」『今西錦司全集二〇』講談社、四二—四九三頁

今西錦司・梅棹忠夫(編)一九六八『アフリカ社会の研究——京都大学アフリカ学術調査報告』西村書店

梅棹忠夫一九四三「探検と地政学」『探検』四・二〇—二二三

一九九〇「一九五五」『氷河と沙漠のなかの衣食住』梅棹忠夫著作集四「中洋の国ぐに」中央公論社、二六九—二八二頁

一九九二「野外調査法への序説」について」梅棹忠夫著作集二「知の技術」中央公論社、四九—四九八頁

一九九三「一九八九」『人文でえたもの』梅棹忠夫著作集二「研究と経営」中央公論社、七五—一〇八頁

江上波夫・加納一郎・樋口敬一・本多勝一・梅棹忠夫一九七二「座談会」探検経営論『朝日講座探検と冒険五』朝日新聞社、四三—四七七頁

木原均(編)一九五六『砂漠と氷河の探検』朝日新聞社

京都大学人文科学研究所(編)一九七九『人文科学研究所五〇年』京都大学人文科学研究所

——一九九三『京都大学人文科学研究所要覧』第四号「京都大学人文科学研究所」

京都大学総合博物館(編)二〇〇二『フォト・ドキュメント 今西錦司——そのバイオア・ワークにせまる』紀伊國屋書店

土倉九三・梅棹忠夫一九四三「大興安嶺探検の技術面より——探検の平常主義と非常主義・合成主義と養成主義」『探検』三：一六—一五四

中尾佐助一九五六「装備」木原均(編)『砂漠と氷河の探検』朝日新聞社、一八一—一九三頁

藤岡喜愛一九五七「ながい眼でみよう」『所報』五〇・二九—二

水野清二(編)一九七〇『チャカラク・テヘ——北部アフガニスタンにおける城塞遺跡の発掘一九六四—一九六七』京都大学

# 身体から考える

さとうともひさ  
京都文教大学准教授

## はじめに

人類学的身体論には大きく二つの流れがあると言われます。第二に「記号論的身体論」、第二に「身体技法論」です(福島 一九九七、二〇〇四)。

記号論的身体論とは何か。それは、人間の身体の各部位が、家屋・集落・宇宙の形態や構造と構造的に同じであり、それぞれが対応しているというコスモロジカルな類似性に着目した研究です。こうした社会では、ミクロコスモスとしての身体と、マクロコスモスとしての外界とが、一種の相似関係にある。つまり身体が宇宙の、宇宙が身体の象徴になっている。代表的な研究として、西アフリカのドゴンを扱ったマルセル・グリオーの『水の神』(一九四八)・(一九八二)や、メアリー・ダグラスの『象徴としての身体』(一九七〇)・(一九八三)などがあげられます。

もう一つが、マルセル・モースに始まる研究の系譜。「それぞれの社会で固有」にみられる「身体の振る舞い方」についての研究、身体技法論です。これは、モースによって提示された後ピエール・ブルデューによって洗練された「ハビトゥス」、すなわち「ある定型的なパターンを持統的に生み出す限定された装置としての習慣的な身体」(福島 二〇〇四、七七九)としてのハビトゥス概念を中心としています。具体的には、芸能や武術を学ぶ身体や、そこでの徒弟制度的な組織、とりわけ技法の継承という教育の問題などが、この線に沿って追求されました。

ところが、一九七〇年代以後の京都大学人文科学研究所、そこから派生していった京都大学での身体に関する人類学的研究は、これらふたつの方向性とは異なった特徴をもっていました。ひとことで言えばそれは、コミュニケーションという視点から身体を見ていくということです。

人間のコミュニケーションにおいては「言語」が中心であり、身体的な表現は従属的なものと見なされています。しかし、人文研に集った人類学者たちは、こうした視点を逆転させ、身体こそがコミュニケーションにおいて基底的な役割を果たしているという発想を打ち出してきました。身体は言語に従属するのではなく、コミュニケーションにおいて個人々をつないでいく、一種の共同の資源として基底的に存在しているという視点が前面に出てくるのです。

## 京大／人文研の身体人類学 一九七四～一九九七

では、京大人文研から生まれた身体論的人类学とはいかなるものなのか。二つの時期に区切って整理します。第二の次期は、一九七四年から一九九七年までです。

### ◆人的横断性

一九七四年は、谷泰先生が同志社大学から人文研に戻り、共同研究「人類学における方法論的研究」(谷 一九七九)を始められた年です。前後して、それまで人文研で人類学をやっていた梅棹忠夫・石

毛直道・松原正毅といったスタッフが、国立民族学博物館や他大学へと転出していきます。

入れ替わりに研究会に加わったのが、松井健さんや細川弘明さんといった人文研助手の方々のほか、京大文学部、理学部、農学部、薬学部などにいた、人類学を志す若き院生たちでした。この中から、のちに京大人類学のまさしく屋台骨を作っていく人たちが輩出されてきます。メインスタッフが抜けてしまったことをものともせず、多様な学問性<sup>11</sup>ディシプリンを横断する若い人々が、人文研の共同研究会に集まってきたのです。

これを人的・知的横断性と呼ぶことができます。それは京大人類学の草創期には梅棹先生が、また一九七二年から京大の旧教養部で教鞭をとっていた米山俊直先生が中心となって主催した「京都人類学研究会」(通称「近衛ロンド」)の特徴でもありました。制度的に確立された人類学の講座が学内になかったからこそ、京大の周辺には(大学という枠すら越えて)、幾つかの制度的な空間を出入りすることが可能となる自由さがあつたと言えるでしょう。

職持ちの研究者と若い院生とが同じテーブルで議論を重ねる人文研。学部生から社会人まで、多様な人びとの議論の場であつた近衛ロンド。そして今西錦司が作った理学部の自然人類学教室といった場所が絡まり合い、それらをつなげていくような横断性。こうした横断性があつたからこそ、ひとつの講座では決して不可能な、斬新な人類学が駆動されて



いったのです。

京大の身体論的人類学は、これら多様な交流のなかの渦から生成されてきたものでした。この点は、京大／人文研的な身体の人類学について考える上で、決定的に重要なポイントだと思います。

こうした交流の中で、人類学における身体論の重要性をいち早く指摘し、身体表現の多様なバリエーションを記述したのが、野村雅一先生(野村一九七九、一九八三、一九八四)です。八年から始まった共同研究「場面行動の通文化比較」(谷一九八七)では、ミクロな対面的・社会的相互行為に関する精密な分析つまり、会話分析(カンバセーション・アナリシス)や動作のミクロ分析(菅原一九八七)などの方法論が加わり、身体を用いたコミュニケーションを詳細に記述していく方向性が生まれます。

八八年には、菅原和孝先生、田中雅一先生、そして藤田隆則さんが京大に着任し、人文研を中心とした人類学がさらに活発化していきます。その成果は、菅原和孝・野村雅一・鷺田清一・市川雅編集による叢書「身体と文化」全三巻や、菅原さんの二連の著書(菅原一九九三、一九九八a、一九九八b)、そして後期谷研究会の成果をまとめた九七年の大著『コミュニケーションの自然誌』(谷一九九七)などにまとめられています。このタイトルは、谷先生の、そして谷研究会に集った研究者たちの研究姿勢を、非常によく表現している言葉だと思います。

### ◆「コミュニケーションとしての身体」を「自然誌的に記述」する

これらの研究の特徴を、二つの点から述べてみようと思います。

第二にそれは、身体を「コミュニケーション」という観点から見ようとしていました。

身体的コミュニケーションの観点といつても、身ぶり

や非言語コミュニケーションのように、これまでコミュニケーションの中心的要素とは考えられていなかった部分をただ拾っていく、というわけではありません。そこには「身体こそがコミュニケーションにおいて本質的な役割を果たしているのではないか」という洞察があります。身体はコミュニケーションの場面において、言語的コミュニケーションを補完する、従属的なものなどではないのです(その背景には、オースティン、サール、ハイトソン、スペルベルとウィルソン、そしてゴフマンなどの理論がありました)。人文研の身体論は、これらの研究を「身体を介したコミュニケーション」という観点から再編成していった点に特徴があります。

この視点はすでに八三年の野村さんの著書に明確に表明されています。

ことばを話す人間の声や、字を書く人間の手の動きは、たしかに言語(システム)にとって非関与的な余剰の部分であるかもしれない。しかしことばを話し、それを聞く人間にとつては、声や手の動きは余剰でも非関与的でもなく、かえって生の本質がそこに顔をのぞかせることが少なくないのではないか(野村一九八三、二四八)。

たとえば、虱取りや耳掃除、握手などの行為において、ある身体と他者の身体とは、動きのリズム・間合い・強弱などを調整しながら、同調し「なじんで」いきます。こうした同調作業は、ほとんど無意識的で、自動化されています。そのような半ば自動化された形式のなかにこそコミュニケーションの本質があるのではないかと、ということ。ここでは身体は、言語的コミュニケーションの補完物ではなく、他者とのあいだの情感や、無意識的な共同性を構成す

るものものとして見られている。こうした視点を菅原ならつて、「身体的コミュニケーション」から「コミュニケーションとしての身体」へのシフト、と呼ぶことができます。

第二に、研究者たちは、このような身体を用いたコミュニケーションという現象を、現象そのものにきわめて忠実に——「自然誌的に」——記述していかうとしていました。

語られたこと、言語によつて表現された内容だけではなく、その会話を成り立たせている場面の状況や発話の文脈、声のトーンや大きさ、発話のタイミングや相づちの回数、そして身ぶり・表情・手ぶりといった身体的動作についてまで見ていくこと。さらに、これらの言語的・非言語的な諸要素が、どのように相互連関しているかについて分析、考察していくこと。語られた言語的メッセージの内容と、そのメッセージを語るという行為のあり方とを同時に探求することによつて、「社会的相互行為」としてのコミュニケーションを記述していくことが目指されたのです。

谷先生を中心とした京大人文研の共同研究は、このような「コミュニケーションとしての身体」のあり方を自然誌的に記述するという研究プログラムを確立し、人類学全体としては混沌の時期であった一九八〇～九〇年代に、豊かな研究成果を残したと言えます。それは「人間が社会をなして世界に住むその仕方」にとつて不可欠な「コミュニケーションとしての身体」の力(菅原一九九六、三四)を、明らかにしようとする試みでした。

### 身体論から「フィールド哲学へ」

#### 一九九八～現在

第二の時期は、一九九八年から現在です。二三世紀に入つても、京大の身体論的人類学は展開を続けて



いますが、その軌跡をここでは、二つの問題系列に沿って見ておきます。

第一に、身体行動の意味理解に関する認識論的問題。第二に、社会的相互行為と権力という実践論的問題です。

#### ◆身体行動の理解可能性

たとえば何頭かのマントヒヒたちが占める空間的配置と、身体ふるまい(身体的布置)があると思います。そしてそこで、あるオスのマントヒヒが、どうしようもなく嫉妬にかられているように見える。観察者はその姿を、明確かつ容易に、嫉妬として理解し、記述する。だがわれわれ人間は観察者ではなく、それを「嫉妬」という感情語彙によって理解するのか。これが菅原さんの『感情の猿』(菅原二〇〇二)を貫くライトモチーフです。

こうした理解の方法は、擬人主義と批判されました。しかしそれは霊長類だけでなく、異文化の他者の身ぶりを含む、世界についての自然誌的記述を根本の部分で支えるものでもあります。それゆえサルを含む「他者の行動についての自明な理解はいかに可能か」という問いは、きわめて哲学的なものです。

この問いに対して菅原さんは言います。「『…嫉妬している』と記述することはまったく正当である。なぜなら、わたしの身体化された心は、もうとつくの昔からそのような行為空間に参入しつづけていたのであり、その空間における実存の身がまえに内側から触れていたからである。…それは、わたしが「嫉妬」という経験にふれるような行為空間のプロトタイプなのである」(菅原二〇〇二、六八―六九)。

霊長類の行動の構造と、われわれの行動の構造とは、同じプロトタイプの派生系としてある。そういう共通の行動の構造、「世界を扱う或る仕方」(世

界にあり) (実存する) 或る仕方」を、われわれ——霊長類——はもっている、というのがです。こうした世界に存在する特定のあり方) としての実存は、メルロポントイの言うように、身体の様を通じて直接知られていきます。

われわれの身体のあらゆる使用は、すでに第一次の表現なのである。…それは、…なんらかの先行の規約を条件にしてではなく、記号の配置そのものとそれらの描くゲスタルト「布置」の雄弁さによって、意味をもっていなかったものに意味を注ぎ込む(メルロポントイ一九六九、一九七九、二〇)。

そしてもうひとつ重要なことは、と菅原さんは言います。

もうひとつ重要なことは、…関係に参入し続ける人の身がまえは、相互行為それ自体の延々たる持続のなかで、交渉され、更新され、再確定されるということである。そして、この延々たる持続こそが、生活世界の前意識的、非意識的なレベルにおいて、…「人びと」の意思決定と実践を根源的に動機づける(身体化された思考)の生命なのである(菅原二〇〇二、二五九)。

つまり、身体的布置と意味との関係は固定されたものではない。行動の構造は、コミュニケーションにおいて個人・個体をつないでいく、一種の共同の資源として存在しているが、それは交渉のなかで変化していくものでもある、というのがです。

#### ◆日常的権力と、響応する身体

身体的人类学が展開していった第二の問題系は、「日常性の権力論」です。

田中雅二さんはかねてから、身体的人类学における「個人」を問題視していました。現代の権力論は、われわれがそもそも自由な選択を行う能力などもついでない、不完全な主体であることを教えてくれる。それなのに、どうして社会的相互行為における議論は、発話や行動を自由に選択操作しているのかのような「主体的個人」を前提できるのか、ということなのです。

ではどう考えればよいのか。田中さんはバトラーを引用しながら、「主体は「権力への」従属の過程で語られ得ないものを生みだし、これを条件に語るエイジェントになる」と述べます(田中二〇〇六、一六)。人びとはさまざまな力による影響を受け、抑圧されたり、ゆがめられたり、ねじまげられたりもする。だがそのプロセスにおいて、力に従属されつくしてしまふことはない。力に飼いやられなかつた部分やズレのようなものが残り、その余地が、エイジェントを生み出していく素地になる、ということです。

このエイジェントは、排除/抑圧されることによつて、また排除の呼びかけに応答させられたりすることによつてエイジェントになる、他動的な存在です。だからそこには、必ずしも自分自身のものではないような権力性が、彼/彼女を動かすものの一部として宿る。それゆえエイジェントは、何かを代理する能力や、自分ではない他者とのつながりを可能にするような能力(それを田中さんはエイジェンシーと呼びます)を備えている。そして逆説的なことに、そうであるからこそ、人びとはそうしたエイジェンシーを通じて共同の場をつくっていくことができるのだ、と田中さんは述べます。

ここで重要なのは、エイジェントの相互行為においては「身体的なもの」、田中さんが「響応する身体 communicative body」と呼ぶような身体が

重要である、とされている点です。そしてその響  
応する身体の様子は、菅原さんの「連の仕事(菅原  
一九九三、一九九八a、一九九八b)のなかに余すところ無  
く伝えられているという(田中二〇〇六、三三)。

かつて田中さんは「世界構築の可能性を秘めたエ  
ロス」について論じ(田中一九九七)、近年ではメルロ  
ーポンティ的な「肉の共同体」という人間社会像  
について考察をすすめています。それは、「われわ  
れのうちに身を置くとともに他者の内に身を置い  
ている」ような関係性であり、「その地点では、わ  
れわれは、一種の交叉(chiasma)によって他者にな  
り、また世界になる」(メルロポンティ一九六四  
一九八九、二三四―二三五)ような場である。身体と  
いう必ずしも自分の自由にならない「肉」であるから  
こそ、われわれは他者たちと共有できる共同性を  
保持しているし、そこにこそ新たな共同性の可能性  
があるというのです。

こうして、期せずして菅原さんと同じメルロポン  
ティという哲学者に導かれながら、田中さんは「未  
来につながる人類社会の進化を射程に入れた人類  
学の役割は、実証的な次元での分析にとどまるこ  
となく、より根本的な人間像とその社会像を未来  
に向けて提示すること」だと述べています(田中  
二〇〇九、二八八)。

## おわりに

コミュニケーションの自然誌的記述に始まり、われ  
われの世界認識の基底にある「身体化された思考」、  
そしてエイジェンシーがつくる「肉の共同体」へと、身  
体の人類学は大きく展開してきました。

それは、西洋近代の主体性・合理性に対する批  
判であることは言うまでもないのですが、現代の身  
体論に対する批判でもあります。「身体」は今、先

端医療・セクシュアリティやジェンダー・介護や福祉と  
いった、きわめて現代的な問題系における重要なキ  
ーワードのひとつです。けれどそこでは、身体はし  
ばしば(特に「私の身体」ということに関して)「いつ  
までも内省的に問い続けることが可能な現象学的  
対象であると同時に、自分以外の他者にとっては知  
覚できず、また侵入不可能であるべき、プライベート  
な領域」と化しています。

それに対して、「コミュニケーションとしての身体」  
に着目する身体論的人類学は、身体を「私という領  
域」に閉じ込めるのではなく、身体を社会関係へと  
開き、他者たちとのあいだに共同性を作っていく資  
源・可能性の源泉である、と主張するのです。

こうして身体論的人類学は、身体を徹底的に社  
会的なもの、絶えざる交渉と流れのなかにあるもの  
として考えることへと、私たちを誘います。そして  
重要なのは、こうした思考の水脈自身が、多様な制  
度を横断しつつ京都のさまざまな場で重ねられた議  
論、まさに多数の身体の交叉の中から生じてきた、  
ということなのです。そのことを私たちは、忘れるべき  
ではないでしょう。

## 文献

グリオール、マルセル 一九四八―一九八『水の神』ドゴン族の  
神話的世界 坂井信三・竹沢尚郎訳、せりか書房

ダグラス、メアリー 一九七〇―一九八三『象徴としての身体』  
コスモロジーの探求 江河徹 塚本利明・木下卓訳、紀伊國屋書  
店

メルロポンティ、モーリス 一九六四―一九八九『見えるものと  
見えないもの』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房

菅原和孝 一九八七『日常会話における自己接触行動―微小  
な「経験」の自然誌へ向けて』『季刊人類学』一八(二)、三〇―  
二〇九頁

一九九三『身体の人類学―カラハリ狩猟採集民クワイ

の日常行動』河出書房新社

一九九六『序論』『コミュニケーションとしての身体』菅原  
和孝・野村雅(編)『叢書身体と文化2』『コミュニケーションとし  
ての身体』一八―三八頁

一九九八a『語る身体の民族誌―フッシュマンの生活  
世界(1)』京都大学学術出版会

一九九八b『会話の人類学―フッシュマンの生活世界  
(2)』京都大学学術出版会

二〇〇二『感情の猿』弘文堂  
菅原和孝・野村雅(編)一九九六『叢書身体と文化2』『コミュニケ  
ーションとしての身体』大修館書店

田中雅 一九九七『世界を構築するエロス―性器計測・女性の  
自慰・オーガズムをめぐる』『岩波講座文化人類学』第4巻 個  
からする社会展望 青木保他(編)岩波書店、二八七―三三三頁

二〇〇六『序論』『ミクロ人類学の課題』『ミクロ人類  
学の実践』エイジェンシー/ネットワーク/身体 田中雅・松  
田素二(編)世界思想社、一―三七頁

二〇〇九『エイジェントは誘惑する―社会・集団を  
めぐる闘争モデル批判の試み』『集団―人類社会の進化』河合  
香史(編)京都大学学術出版会、二七五―二九二頁

田中雅・松田素二(編)二〇〇六『ミクロ人類学の実践』エ  
イジェンシー/ネットワーク/身体 世界思想社

谷泰(編)一九七九『人類学方法論の研究』京都大学人文科学研  
究所

一九八七『社会的相互行為の研究』京都大学人文科学研  
究所

一九九七『コミュニケーションの自然誌』新曜社

野村雅 一九七九『身体表現の民族学―その方法と課題』『人  
類学方法論の研究』谷泰(編)京都大学人文科学研究所、一八―  
二三五頁

一九八三『しぐさの世界―身体表現の民族学』日本放  
送出版協会

一九八四『ボディランゲージを読む―身ぶり空間の文  
化』平凡社

野村雅・市川雅(編)一九九九『叢書身体と文化1』技術として  
の身体 大修館書店

福島真人 一九九七『構築される身体』『岩波講座文化人類学  
』第1巻 新たな人間の発見 青木保他(編)岩波書店、二一―  
一四〇頁

二〇〇四『身体技法論』『文化人類学文献事典』小松  
和彦他(編)弘文堂、七七―七八〇頁

鷺田清・野村雅(編)二〇〇五『叢書身体と文化3』表象とし  
ての身体 大修館書店

# 専門を横断して考える

## はじめに

「専門を横断して考える」というとすぐに頭に浮かぶのは学際的研究であり、そうした学際研究の場としては、まず地域学会を挙げることができません。私が所属している地域学会は日本アフリカ学会ですが、この学会の学術大会は、かつてはすべての発表が二会場でおこなわれていました。人類学や霊長類学、古生物学はもちろんのこと、大地溝帯の火山や地質学、気象学、動植物学といった理工系、政治、経済、言語、文学、歴史といった人文・社会系、熱帯医学や公衆衛生、民族薬理学といった医学・薬学系、土壌学や作物学、農業経済といった農学系などの分野の研究が文理の別なく発表され、専門の異なる研究者のあいだで質疑応答が交わされていたものです。けれども、今日はこうした地域という広がり場よりも少し絞った研究領域、つまり人類学における「専門の横断」ということを考えてみたいと思います。

## 京大理学部人類進化論研究室

そもそも私に「専門を横断して考える」というテーマが与えられましたことは、素直に考えれば、私の学問的出自が京都大学大学院理学研究科の人類進化論研究室（以下、理学部人類）というヒトとヒト以外の霊長類を対象とした人類学研究をして

いる研究室にあったからだと理解しています。

したがって、ここで「専門を横断して考える」というときの専門というのは、ヒトを対象とした研究を専門にしているか、サルや類人猿を対象とした研究を専門にしているかといった専門の違いになりません。業界用語では前者をヒト屋、後者をサル屋と呼び習わしていますが、たしかに理学部人類はサル屋とヒト屋、より正確に言えば、霊長類学の間でも霊長類の行動、生態、社会を扱う分野と、人類学の間でも生業活動や自然と人間の関係に焦点をあてた研究をする生態人類学と呼ばれる分野に与するメンバーが両者の境のないゼミをする研究室でした。

けれども、霊長類学を含む広義の人類学という学問自体が統合的、包括的な存在としての人類なるものを扱う以上、これは当然の事態でもあつて、人類学は多かれ少なかれ他の学問領域——たとえば私が在籍していた当時の理学部人類学——とえば私が在籍していた当時の理学部人類学——たとえば認知科学、コミュニケーション論、現象学といった領域——とも親密な関係を保ってきたのではないかと思えます。サル屋の間には人文研の谷泰研究会のメンバーであつた者もいましたし、かつての近衛ロンド（現・京都人類学研究会）へもみな足繁く通っていました。フィールドで直面した問題の解明に向けて、さまざまな研究分野への越境を恐れずに取り組んでいた先輩がたの姿勢に、私もまた強く影響を受けてきま

## 河合香吏

かわいかわい  
東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所准教授

した。

理学部人類は化石として残りにくい初期人類の生活と社会、そして精神のありようを再構成するという目論見をもっていました。それはこの研究室の指導教官であつた伊谷純一郎という強い個性が身をもつて推進してきた研究体制でした。伊谷さんは今西錦司先生の直弟子のひとりです。今西先生は日本の霊長類学のパイオニアであり、独自の進化論を展開した人物ですが、理学部講師、人文研講師をへて一九五九年に社会人類学部門が設立された時に初代の教授になりました。そして、一九六二年には京都大学アフリカ類人猿学術調査隊を組織してアフリカでの調査活動を開始しています。この調査隊は類人猿班と人類班とで組織されました。今西先生は類人猿研究のあなたに人間研究のための布石を、この最初の調査隊においてすでに組み込んでおられたのです。

さて、伊谷さんは今西先生の、生物学というよりはむしろ社会学的研究である「人間家族の起源論」をはじめとする人間社会の形成の解明という遠大な構想を引き継いで、日本の霊長類学と生態人類学を牽引してこられました。その具体的な研究方法は、これも今西先生が当初から提唱していた二面作戦、すなわち現生の野生霊長類の社会構造や社会現象へのアプローチと、自然により強く依存した生活を営んでいるおもにアフリカの狩猟採集民、牧畜



民、焼畑農耕民の生業活動と社会構造、自然とのかかわりへのアプローチというふたつの方向から迫るかたちをとっていました。

けれども、私がヒト屋としてこの研究室に入った一九八〇年代半ばには、ヒト屋の研究は対象社会の人びとの生活の変化、近代化の波も手伝って、すでに「人類社会の進化」という文脈から離れて個別社会の詳細な記述と分析へと焦点をスライドさせていました。アフリカにおける生態人類学は霊長類学と直接接続しようとしたのではなく、伊谷さんの言いかたに準ずれば、「やがてはつながるはずだ」という期待ないし直観への共鳴に依って、そういう意味で対象に魅せられて」進められてきたといつてよいかと思います。

## 私の研究

ここで私自身の研究を駆け足で述べます。私は生業や生計活動を詳細に追うという生態人類学的な成果を出してきませんでしたが、ヒトと自然の関係やヒトのもつ自然性すなわち生物学的側面に興味を持ち続けてきました。また、人びとの行為に着目し、その行為を彼らがいかに説明するのかを頼りに社会を理解しようとしてきました。

物言わぬ霊長類たちを対象としたサル屋とおなじ研究室で育つたことは、私のフィールドワークに大きな影響を与えていたのだと思います。自分の目で見たいことを重視する態度、人から聞いた話のなかでも誰それがいつどこで何をしたというような具体的な誰かの具体的な行動に着目するといった態度のことです。最近になるまで進化の視点を分析や考察に入れることはありませんでしたが、方法的にはサル屋の個体追跡法や長期観察と根底的なところであり口を共有してきたのだと思います。

私の個人研究は大きくふたつに分けられます。

一九八六年から始めたケニアの牧畜民チャムスの研究と一九九六年から始めたウガンダの牧畜民ドドスの研究です。チャムスの研究は「身体という自然をめぐる認知と実践」としてまとめられます。民俗生理由論と性、民族医学、エイジングなどのテーマを扱ってきましたが、いずれも身体の自然性（生物学的な身体現象）に着目して、それと人びとの経験や社会のありかたとの関係を考えるというものでした。

チャムスでの研究はフィールドをドドスにかえることにもなつて、身体性を基軸とした外界認識の研究へと展開しました。ここでまず扱ったのは土地についての認知と実践でした。土地は名づけられ、語られ、歴史を付与されたものであるとともに、生活実践の場として、そこに身を置き、身体をもって働きかける、あるいは見、聞き、ふれることにより身体において知る対象であるといった意味において身体性とも深くかわります。人びとは詳細に命名された個々の土地に対して「自分はそこを知っている」といい、さらに「ドドスの地はすべて知っている」と主張しますが、その主張は自分がそこを歩いた、ウシを連れて移動したといった事実裏づけられています。

こうした知識のありかたはドドスランド中を広く移動する生活様式を前提にすると同時に、「身を置く」、「移動する」という点から身体が不可避的に介在するものでもあります。いっぽう、土地の利用はドドスの居住域内で完結しているわけではなく、隣接する牧畜集団とのあいだで敵対と非敵対の関係を背景に多様な形態がみられます。こうして土地をめぐる認知と実践という問題系には隣接集団間の関係を解きほぐしてゆく作業が必要だと私は感じるようになってゆきました。

## AA研・共同研究プロジェクト 「人類社会の進化史的基盤研究」

### ◆「集団」研究会について

「身体」をひとつのよりどころとして研究をしてきましたが、ドドスの集団間関係を解きほぐしてゆく作業に直面したとき、結果的に私が求めた解決の糸口は「人類社会の進化」あるいは「人類社会の形成」という私の出自集団が掲げていた課題でした。ドドスのフィールドではおもに身体を基軸とした空間認識の調査に多くの時間を割いてきたのですが、彼らが認識しているドドスの土地は、隣接集団や、もつと大きな外部との関係によって日々生成される日常の実践の現場であり、人と人との相互作用の場であるというAA研の西井涼子さんが提唱しているところの「社会空間」でもありました。

ドドスは東アフリカ牧畜社会に共通してみられる隣接集団間での家畜の略奪合戦を未だ繰り返しています。この現象は、古くは「好戦的な牧畜民」として描かれたり、暴力や戦争の起源を問う現象として扱われたり、最近では内戦や武装解除との関係やグローバルな視点からのマーケティング論といった現代的な課題として扱われるようになってきました。けれども、これらの説明では目の前で起きている集団現象について私はなかなかわかったという気になれません。本当にわかるためには「そもそも集団とは何なのか」、「いかにして成り立つのか」を考えなければならぬという思いに私は次第にかられてゆきました。そして「そもそも」という問いかけは、「では、サルはどのように集まっているのか、あるいはいないのか」を知りたいという思いに自然に行き着きました。そのようなわかり方を私は求めました。

二〇〇五年四月、東京外国語大学アジア・アフリ

カ言語文化研究所（AA研）の共同研究プロジェクトとして「人類社会の進化的基盤研究（1）」と称して、「集団」をテーマとしたサルーヒト共同研究（以下、集団研究会）を開始しました。理学部人類との決定的な違いは社会文化人類学の専門家になりの割合で入っていたこと。つまり、霊長類学、生態人類学、社会文化人類学の三すくみの取り組みであり、そしてここには今は亡き社会学の第一人者、今村仁司先生も加わってくださいました。この研究会ではヒトとヒト以外の霊長類の集団がどのようなかたちと変異幅をもち、そして人類のもちえた社会性なるものの進化的基盤がいかなるものであるのかについて、集団現象を軸にして四年間にわたって討議しました。

研究会の場では発表者はおのれの専門領域のなかで、あるいはときにそれをほみ出すかたちで理論を展開し、専門や研究対象を異にするメンバーで議論を交わしてきました。集団研究会は集団を成り立たせている制度的側面、集団のメンバーをメンバーたらしめている表象や想像力、象徴化能力とアイデンティティ、価値や所有といった概念の生成、そして人類の文化が社会形成にいかに関与しているのかを再考するといったことに開かれていました。こうした射程をもつ以上、進化に拒絶反応を示さない社会文化人類学者の参加はぜひとも必要でした。

集団研究会の成果は二〇〇九年末に『集団——人類社会の進化』（京都大学学術出版会）という論文集として刊行されました。その内容を二つだけ紹介いたします。

ひとつめは「非構造概念」の重要性です。論集で多くの論文がとりあげた集団現象は集団の構造の側面ではなく、むしろ非構造の集まりに着目したものでした。たとえばサル社会の順位構造といった

集団全体の構造面ではなく、集団のメンバーの個々の個体間の具体的な関係すなわち「社会的絆」といったものからみえてくるものを議論の対象としていきます。

これまでの集団論では、集団の非構造部分というのは社会構造を明らかにしようとする研究の陰ではほとんど注目されずにきました。たとえばチンパンジーはオトナオスの連合が単位集団の中心にあつて、メスはあまり集まらず社会交渉も少ないことから「非社会的」と見なされて、発情メスを除けば、集団編成の議論の俎上につてくることはほとんどありませんでした。しかしメスたちは社会的行為をしていないわけではありません。チンパンジーは離合集散性の高い集団で生活していますが、他者と出会い、何事かをともし、また別れるといったことをメスたちも繰り返しています。そこに社会的絆、そして社会性をみてとることは決して難しいことではありません。

一方、ヒトの集団では、たわいのないおしゃべりが交わされる炉端での女性たちの集まりや、牧畜民が家畜に給水する井戸場での水くみの民族集団を越えた集まり、海賊や報復闘争集団、といった活動中心、行為中心的な集団が、非構造の集まり——今村先生の言いかたを引けば、構造化ないし制度化された society に対して、社会的絆にもとづく social な集団——として多くとりあげられました。いずれも自律的な個体ないし個人、つまり制度にがんじがらめに統制されるのではない個による緩やかで自由な集まり、一時的であるがゆえに動的でダイナミックな集まりであるという共通点があります。

こうした非構造の集まりはこれまで注目されなかっただけでなく、集団を考えるうえで、生活時間に占める割合も決して少なくない、もっと正当に

評価されるべき集まりです。そうした見方は人類社会が表象能力や文化あるいは制度といったものによつて進化的基盤に上塗りを重ねた構造であるというだけではなく、過去の産物も強化されて表層で活用されているという考えを引き出すものです。

ふたつめの成果は「ヒトの獲得した表象能力」です。ヒトは目の前にいない不可視の相手をも仲間として認識する能力を獲得したということ、そして「いま・ここ」を越えた認識を可能にする言語表象能力を獲得したことについての議論です。前者の能力は「われわれ」なるものの表象作用によつて可能になつているもので、たとえば父系出自集団といった文化範疇や民族あるいは国家などの集団を考えればわかりやすいと思いますが、現実的にはその境界は曖昧で、集団を構成する構成員たちは互いに顔見知りでないということがふつうにあります。それは後者の言語による「○○父系集団」とか「○○民族」といった表象が可能にしている事態で、ヒトに特有な集団のありかたです。ヒト以外の霊長類にはこれはきわめて難しいことであり、彼らには見も知らぬ相手、対面的に出会ったことのない相手を仲間として認知することはおそらくできません。

この集団の表象性といった問題は人間の集団が制度による束ねであることをよく示しています。集団研究会に続く研究会は「制度」をテーマとすることとなりましたが、それは自然な成り行きだったのだと思います。

#### ◆「制度」研究会について

昨年四月に集団研究会に続く研究会を「人類社会の進化的基盤研究（2）」と称して、「制度（institution）」をテーマとして新たに開始しました（以下、制度研究会）。ここでは集団で暮らす者たちの共存のための原理として制度をとらえ直すこ

とを第一の目的としています。それに加えて「制度は言語のうえに成立する」という一般に当たり前と考えられている制度の言語起源論を相対化することを、もうひとつの目的としています。メンバーには霊長社会類学、生態人類学、社会文化人類学のほか、言語学プロパーの方に加わっていただいています。

これまでに議論されてきた内容を一部紹介します。集団研究会でも明らかにされてきたことですが、ヒトを含む霊長類の集団には平等原理、不平等原理など、集団を成立させている原理が存在します。逆に言えば、現実と同種個体が同所的に存在する、つまり集団をなして暮らしているということ自体が、そこに共存のための何らかの原理が働いていることを示しています。われわれはそこに制度の起源、制度の萌芽的なありようをみようとしています。

ここでは制度は実定法のように規制範囲が言語によつて明確化され、それに反した者には懲罰が下されるものというよりは、むしろ慣習とか規範に近いものをイメージしています。これを実定法などと区別するために、メンバーのひとりである黒田末寿さんの言葉を借りて〈自然制度〉と呼ぶこととし、「集団の成員が、自己および他の成員が従うことを期待する事柄」と定義しています。同時にそれは懲罰よりも根源的なもの、つまり懲罰があるからヒトは制度に従うのだという考えを逆転させてみようという視点でもあります。

こうした〈自然制度〉を考える一方で、この研究会では制度の発生は言語の起源と深くかわる課題であると位置づけています。人間の社会において言語が制度の前提となつておることにはおそらく何の疑いもないわけですが、制度研究会でわれわれがやろうとしていることは、言語以前に制度の萌芽といえるような行為、行動がすでに基盤としてあったと考

えるということです。そうした基盤のうえに言語の発生があり、「いま・ここ」といった時空を越える言語表象を手に入れることによつて、人間社会における制度は、より法的な側面を強くしていったのではないか。

制度研究会が着目するのはそうした法的制度の直前段階ないし制度の生成と存続の過程のありようですが、さらにそこから社会規範の複合体としての制度の生成、そして法的制度をもつ人間社会、制度による束ねであるところの人間社会へと進化していく、その原理を考えてゆこうとするものでもあります。人びとの具体的な行為や行動に着目するという点は集団研究会から貫して意識してきたことを踏襲しています。

### むすびにかえて

霊長類学と社会文化人類学をまきこんでの共同研究会は私にとつていつも刺激的です。個別の文化や社会だけではなく人類社会や人類の社会性なるものをわかっていこうとするならば、人類のなかだけで考えるのではなく、ヒト以外の存在にも深く立ち入るといふかたちで「専門を横断して考える」ことはとても有効な態度であるように思われます。

それが霊長類学である必然性はないのかも知れませんが、かつて大学院時代に毎週のゼミで、そして深夜のゼミ室でのおしゃべりのなかでサル屋の話聞いてきたことが、京都を離れた後にも私のかかに息づいていたことは間違いありません。京都を離れてみたら私は「京都の生態人類学徒」以外の何者でもないという扱いを受けましたし、そのうえで京都以外の、端的には東京の社会文化人類学者の方々に出会い、共同研究をする仲間も得ました。マークスとフィッシャーの『文化批判としての人類

学』は人間の存在状態に対する生物学的視点を徹底的に無視したところに成立しているものですが、これ以降の社会文化人類学は進化などという発想が完全に排除されているとしかいえない貧しい思考環境にあると、集団研究会および制度研究会のメンバーでもある内堀基光さんが指摘されています。それでも興味を持って積極的に私の研究会に参加してくださる方がいます。

人文研は多くの貴重な共同研究がおこなわれてきた研究所として有名ですが、「専門を横断して考える」ことの実践の場のひとつに、そうした共同研究会があるのだと思います。

人文研では、すでに述べた今西先生の存在はいうまでもなく、谷泰先生が主催された「社会的相互行為の研究」や「コミュニケーションの自然誌」の研究会においても、谷先生が一貫して霊長類にも強い関心を持ち続けてこられたことから、当時理学部人類に所属していた高畑由起夫さんや早木仁成さんといったサル屋や、サル屋からヒト屋へと研究対象をかえた菅原和孝さん、北村光一さんらが参加していたという点からも、ヒト以外の霊長類を含めた人類学研究の土壌が培われてきたのだと思います。

京都大学の人類学では、このようにヒト以外の霊長類の研究をその視野に入れることに違和感がなく、それ故にサル・ヒト共同研究というユニークな人類学が展開されてきたのだと思います。さらに付け加えるならば、上記の谷研究会には理学部人類からのみならず、文学部（地理学、社会学、言語学など）や農学部からも人類学を志す大学院生や若手研究者が集つたといえます。

そういった意味でも、人文研は京都大学における人類学のひとつの要として「専門を横断して考える」場を提供し続けてきたのだと思います。

## コメント・総合討論

司会／田中雅一・田辺明生  
たなか まさかず たなべ あきお

田中 第二部をはじめたいと思います。はじめに石毛直道さんからコメントをいただければと思います。石毛さんは元国立民族学博物館館長で、『文化人類学とはじめ』や『食卓文明論』など、特に食文化についてたいへん多くの仕事をされています。それではよろしく願います。

石毛 私も人文科学研究所の社会人類学部門の助手として一九六五年から七一年まで在籍していましたので、そのときの印象をお話したいと思います。私は助手になる一年くらい前から人文研の共同研究会に出ていました。というのは、私が所属していた京大の探検部の先輩として、今西錦司さんのところによく出入りしていたからです。京大の西イリアン学術探検隊に参加して帰ってきたとき、人文研の今西さんのところへ挨拶にいきますと「俺の研究会をのぞいてみるか」と言われて、オブザーバーとして研究会に出ることになったわけです。

梅棹忠夫さんの時代から、大学院の学生も正式の職員にするようになりましたが、今西さんのころはオブザーバーでした。そこで受けた印象として強かったのは、誰も「今西先生」とは言わず、「今西さん」と呼んでいた。これは京都大学の山登りや探検のひとつの伝統であって、パーティを組んだ時は先生と生徒といった上下関係ではなく、同志としての横の連帯関係から「さん」付けだったのです。

これは梅棹さんに対しても同じでしたが、そういった横の連帯をたいへん重んじる気風が今西研究会

から梅棹研究会まで引き継がれていました。

社会人類学部門の共同研究の特色もいくつかあると思うのですが、ひとつはさきほどの河合香史さんのお話にもありましたように、霊長類と人間の間の連続したものとしてとらえることでした。特に今西さんの研究会はアフリカ研究をやっていたということもあり、単層社会として人間を扱うことが多かったわけですが、梅棹さんの時代になってから重層社会、つまり階層を持つより複雑な社会を考えるようになりました。文明の比較研究もやりましたが、人文研を中心とした京都の人類学研究は霊長類学あるいは自然人類学と、文化なり社会人類学との断絶がありません。皆フィールドワーカーですから、お互いに仲間として学生のころから関係があるわけです。

共同研究ではたとえば牧畜の起源論とか、主題としては文明史に位置づけられるような大きな問題を競って掲げていたことが特徴です。それからもうひとつは、比較研究です。もちろん共同研究のメンバーにはフィールドワーカーじゃない人も多く、たとえば林屋辰三郎さんのような日本史の専門家もおられたりたいへんな学際的研究でした。そうしたなかで毎週の研究会で誰かが発表をしたとする。しかし他人の本を読んで紹介するような発表をすると軽蔑されます。けっして本で読んだものを資料として使うことを軽蔑するわけではありませんが、そこからいかに考えを組み立て、独創的な意見を言うかがた

いへん重視されたという特徴があります。

このように共同研究自体は、必ずしも探検なり、現地調査を行った人が中核になっていたわけではないのですが、やはりフィールドワークはたいへん大事なものだと考えられていました。たとえば私は人文研の助手時代、タンザニアに約八カ月、リビア砂漠のオアシスでも長らく調査しました。そのときのリビア班の隊員が梅棹さん、ここにおられる谷泰さん、それから私です。そうするとなんだか人文研の共同研究がリビアのオアシスに引越したような印象もありました。

それから七〇年の万博のときには、将来、国立民族学博物館を作るための基礎的な資料を集めるためにたくさん的人类学者たちが手分けして世界中をまわって、民族資料を集めました。それで私はオセアニアへも収集に行った。結局、私の在任期間の三分の一は海外のフィールドにいたことになりました。一方で人文研は京都における人類学のひとつの拠点としてのさまざまな役割を果たしていた。だからさきほどお話に出てきた京都大学人類学研究会、通称近衛ロンドの事務局になっていましたし『季刊人類学』という雑誌の編集委員のほとんどは人文研の社会人類学の共同研究班のメンバーであり、編集事務局長は私がやっていた。

それから今西さん以来の京都大学アフリカ研究会の事務局も、ある時期から社会人類学部門のほうに移った。また霊長類学もふくめての報告書 Kyoto

University African Studies の編集もやっていた。ほかに毎週の研究会のレジュメ作りやいろいろな仕事を常勤では梅棹さんと私と、秘書だけでやっていたんです。そのなかで私がいなくなったらたいへん支障をきたすわけですが、誰もいやな顔をせず海外に送り出してもらいました。

そうしたなかで一番大事なことは、やっぱりパイオニアワークを重視するという事です。山登りや探検がまさしくそうです。京大の山登りの特色は、まだ誰も登ったことがない、未踏峰に登るということが大きなモチベーションです。人文研の研究にはそういった気風が引き継がれていますから、人がやらないことをやることを積極的に評価する。それが京都の人類学を育てたいへん大きな要因ではないかと私は感じます。

田中 「パイオニアであれ」というお話は、重くなおかつ私たちが勇気づけるメッセージだったと思います。

それでは次に野村雅一さんをお願いしたいと思います。野村さんも国立民族学博物館の名誉教授であり、現在は総合研究大学院大学の副学長をされています。すでに佐藤知久さんの報告でお名前が出ましたように、野村さんは特に身体に関わるバイオエナジ的な仕事をされてきました。それでは野村さんお願いします。

野村 どうもご紹介ありがとうございます。私がいまここに座っているのも、もとを正せば今日も何度か話に出た近衛ロンドという研究会に大学院生のころに参加させていただいたことにあります。私は大学院は文学研究科でしたが、全然おもしろくないので、梅棹さんと知り合って近衛ロンドに通うようになり、その縁でヨーロッパ学術調査に連れて行ってもらって、さらには人文研の助手にもしてもら

って、そのままお世話になって梅棹さんや後任の谷さんにやりたい放題勝手なことをやらせていただきました(笑)。

またその後、梅棹さんが国立民族学博物館をつくるという話になりました。最初はそんなものができるとは夢にも思ってませんでした。みんな半信半疑のうちにあんな巨大なものができあがっちゃったんですね。今度は梅棹館長、佐々木高明館長、石毛館長のもとで勝手なことを自由にやらせてもらいました。

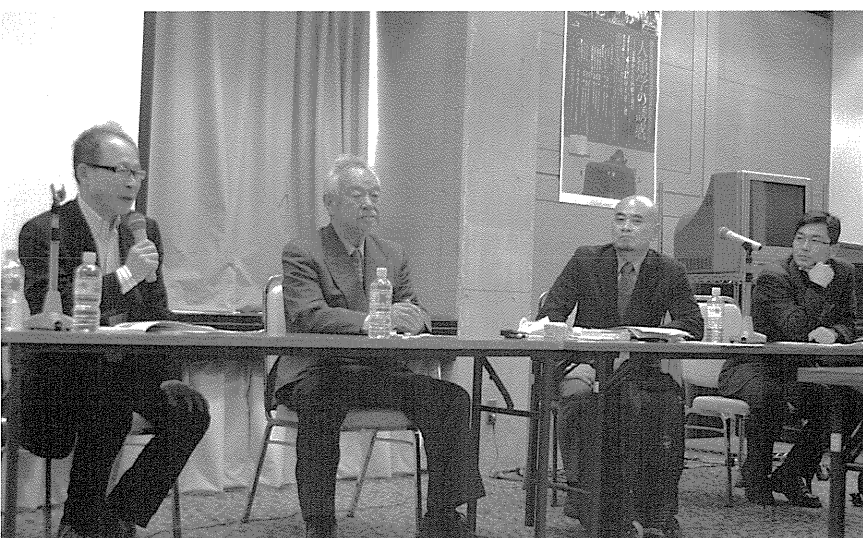
それでみんなを退職してほかの大学に行ってみますと、外界のほうはとも相当変わっている、自分の知っているかつての大学とはまったく違うところになっているということがわかりました。今日のお話のなかで、研究史の話も出てきましたけれども、大学の世界では、この二〇〜三〇年のあいだに、理系と人文系との間の力関係の差がまったくひらいてしまった。人文系のほうは前に進まなくて、一方で理系の方は還元主義で仮説をいっぱいつくって、いまや人間像といえますか、人間とはどういうものかという研究をほとんど理系の人たちがやっている。そこに人文系が横からいちゃもんをつけるといううな力関係になっていると思います。

京都大学を中心とした人文系も、いまの学内の力関係は、これまでの実績とはまったく違っているんじゃないかと思えます。

いまの大学でやっている近代科学は普遍性、客観性、論理性というその三本柱をもとにして成り立っているということですよ。それに対して、人文系はそうではない。普遍的でもないし、客観的でもない、論理的であるかどうかあやしい、というふうなものなんですけれども、中村雄二郎という哲学者が、現代の人文系の課題を『臨床の知とは何か』(山石波新

書、一九九二年)という本で書いてるんですよ。そこで言っているのは人文系は近代科学とはまったく違うものだ、近代科学ができないことをやっているのが人文系だ。で、その臨床の知には三つの要素があって、それはコスモロジー、シンボリズム、そして、パフォーマンスだという。

今日はフィールドワークとか探検とかの話もありましたが、それは言ってみれば現場の知識、臨床の知識なんです。で、中村雄二郎さんは、コスモロジーに固有世界という訳を与えてるんですよ。世界の神話とかはすべて固有なもので、河合さんのお話の



左より野村雅一、石毛直道、田中雅一、田辺明生 各氏



なかにも土地とか名前とかのお話がありました。地名なんてかけがえのないもので、その重要さは世界中同じですね。

それからシンボリズムというのは、中村さんによると多義的なものなんです。人によって解釈が違うのがシンボルですから、解はひとつしかないというサイエンスの世界とは対極にあるものなんです。

もうひとつのパフォーマンス、これは身体的な行為ということですね。そういう臨床の知というのは、別の言い方をすると、人と人との相互の知だということもできます。相互性、話し合いという人と人との間のやりとりが大事なのであって、それが人文科学。それがあえてなんの役に立つかといったら、そういう相互行為が市民社会をつくるということですね。そういうところが、コスモロジーにしてもシンボリズムにしてもパフォーマンスにしても、コミュニケーションの問題にしても、いま本当に等閑視されてきて、一方で普遍性、客観性、論理性というものが学術なんだという方向になってきている。いまはベツドのサイズにむしろ人間の足をあわせている感じだなと思います。

時間が限られてますので、最後の河合さんのお話について少しコメントしますと、これまでの共同研究会にはそれなりの歴史があつて、いまは「制度研究会」、その前には「集団の研究会」というのがあつた。それ自体進化なんでしょうが、ものすごく長い人類史のなかでの集団の研究なんです。いま研究することに意味があるという気がします。

かつて谷さんの研究会でやっていた相互行為とかコミュニケーションの研究会は、社会や集団というものがあつたということが前提となつて、そこでの相互行為を研究していたわけなんです。ですからそれらの成り立ちを問うことは必要なかったんです。

けど、いまはそこから問わなきゃいけないくらい、人間個人個人が非常に分断されている。世界中で分断、孤立化がおきているわけなので、集団の研究というのは私もすごく興味あるんですよ。

やはりみなさんそれぞれ広い意味で、時代の影響や動きを敏感にうけとりながら研究テーマを作り出しておられるので非常に頼もしく、また興味深いと思います。集団も制度もいま非常に難しくなつていて、上野千鶴子さんの『おひとりさまの老後』（法研、二〇〇七年）っていう本が売れていて、もとは女性版だったんだけど、こんど男性版も出されましたよね。

ところがこのあいだ、個人的にやっている小さな勉強会で、七〇〜八〇代の人たちの生活を調べている社会学の大学院生の話を聞くと、高齢の男女間の恋愛が盛んらしいんですよ。そこに来っていた阪大の医学部のお医者さんが「上野千鶴子さんもあんなこと言ってますけど、あれはエリートのお話で、お金があつてピンピンしてるからいいんですよ、おひとりさまはやっぱりだめですよ」なんて言っていました。特に男はおひとりさまになつたらすぐだめになりますという話でした。だから親子とか夫婦というような集団の最小単位が、日本において一番難しく、たいへんなことになっている。これはたぶん欧米でもそうなんでしょう。そういう話を思い出しながら聞きました。

佐藤さんの研究も、すでに次のテーマが用意されておりましたけれども、また成果を読ませていただきたいと思つています。

田中 どうもありがとうございます。特に野村さんの相互行為、インタラククションという言葉は、まさに今回のシンポジウムと結びついていると思つています。それでは司会を田辺さんにバトンタッチします。

\*

田辺 田辺明生と申します。私は人文研の社会人類学部門を引き継ぐ人類誌分野に去年の三月まで五年程お世話になりました。早速ですが今日は多彩なメンバーが会場にそろつておられますので、まずは聞かれていた方からコメントなどをお願いしたいと思います。司会者の特権で、恐れ入りますが指名をさせていただきます。松田素二さん、お願いします。

松田 私も七〇年代に学部、大学院を京大で過ごしたのですが、特に谷さんの研究会では、いまは東大におられる松井健さんが人文研の助手をしてもらって、そこで徹底的に暴力的なトレーニングを受けた（会場笑）という経緯があります。

みなさんおもしろいご発表でしたが、せっかく今日はイタリヤから谷さんが見えなかったので、谷さんにお聞きしたいのですが、七〇〜八〇年代、谷さんがさまざまな大学院に所属する院生を指導した時代は、京都大学には人類学のコースはもちろんありませんでした。当時の近衛ロンドはいわゆるアマチュアリズムの人類学を標榜して、さまざまな学部にする一年生から大学院生まで、自由に人類学的な思考を楽しむということをやってきました。そこでは職業的な人類学者を育てようという発想はなかつたように思つています。

そのようななかで、人類学という学問にロイヤリティを感じて学問をする学生・院生はあまりいなかったのではないのでしょうか。人類学的な思考というのは、ただ自分がおもしろいことをやるためのツール、道具と思われていた。人類学という学問そのものに何か貢献したいというような発想はなかつたような気がします。

ところが九〇年代に京都大学にも人類学のコースが整備され、職業的人類学者を育成するそういう制度ができあがると、人類学という学問のなかでの市場にどのように入参するかとか、人類学という学問のなかでどういう位置取りができるのかという発想が生まれるようになります。

谷さんは七〇〇八〇年代と、それから九〇年代に大学院ができて現在のように入参者を育成する制度をつくりあげた歴史の当事者でもあります。この点について、現時点でふりかえってみて、評価すべき点と問題点について、率直にお聞きしたいと思います。

谷 そうですね。私がいたときには、社会人類学の大学院というものは制度的に存在しなかったし、かつ、梅棹さんがみんなばくを立ち上げて、周囲に集まっておられた方の大半がそこに移動されたという空白に近い状況で私たちが後を継ぐことになったわけです。かつ近衛ロンドというものが存在して、それぞれ自分がやりたい関心でとまり木を適当に使うような感じで、みなさん集まっていたわけです。そこで共同研究をするということは、私にとっては確かにたいへんな役割で、人類学の方法の研究であるとか、本当に一般的なテーマをたてて、とにかくみなさんがそこに参集できるようなものにするしかなかった。

そのことが結果として松田さんのような人もでてきたし、地域も違う、アプローチも違ういろいろな人々が、お互いにお互いには軽蔑しながら、研究会でもお互いみそくそに言い合いながら、たいへん鍛えられたと思います。つまりみなさんの努力の結果としてよかったです。

講座ができる少し前から、私はイタリヤという地域を対象にできただけに、集団全体を民族誌とし

て記述することに疑問を感じ、インターラクションを通じ現実が形成される過程の記述方法に関心を移していきました。

さて講座ができてからはスムーズに入参者がでてくるようになり、いいことではありますが、別の意味で以前のような全然別の専門歴の人々のなかでもまれながら、なにくそという形で勉強する部分が少ないものになっていって、哲学とか言語理論とかを前歴に持った人が人類学を学ぶのはちょっと違う、逆の形になります。そのあたり、どうなるのかなという気が私はいたします。

もうひとつ、共同研究について、故・藤岡喜愛さんが事務局についていろいろ書いておられますが、私は彼が共同研究の補助もエクスペディションの補助もしくなくちゃいけないというたいへんな役目を負われて苦しんだことを目の当たりに見ました。最近共同研究流行りだけれども、やっぱり当時の共同研究はいまのとはちよつと違う。人文研の東分部などでの共同研究の半分は、同じテキストを共に読みあつて、テキストを確かなものにしていくという形のもので、それこそ毎週行われていました。

こういうふうな共同研究があった一方で、今西さんのときからの共同研究というのは、率直な意見を申せば、人々を集めて、人々がそれぞれの専門にしていることを報告して、質問をして、若干批判もあるでしょうけれどもおもしろかった、という形で終る共同研究ではなくて、共同研究会でのディスカッションを通じて、新しい枠組みを作ろうという方向性があったんです。梅棹さん時代もそうでした。それでなにをやったかという、ひとつはディスカッションを全部録音してたんですね。それを助手は繰り返し聞きながら文字におこしていく作業を行

い、結果、ぶ厚い紙の束になったけれども、そういうことが毎週行われて翌週に配られたんです。

石毛 当時はゼロックス以前ですから、湿式の複写機でその作業はたいへんでした。

谷 それをなぜするかというと、いろいろな議論がまとまって、ある方向性がでてきたときに誰がそのアイディアをはじめに出したかをきちんと残しておかなくてはいけない。いわばアイディアの著作権の問題にかかわる。それを曖昧にすると自分の見解を表に出さずに隠してしまうことになりますから、それをきちんと残すということを通じて自由な討論をさせる。こういう考えのもとに、たいへんな作業が行われていたんです。

田辺 個性あふれる人々が出会って、その新たな出会いのなかで、新たな知を作っていくような、共同研究の技術や制度というものが、この京大、京都でつくられてきたということがよくわかりました。まさに知のパイオニアであり、出会い系の研究会が行われてきたということですね。もう少しいろいろな方にコメントを聞きたいんですけども田辺繁治さん、一言お願いします。

田辺繁治 谷さんや石毛さんよりもひとまわり若い世代ではありますが、三〇年ほど前まで京都で一緒に活動していた時期がありましたので、さまざまなお話を聞かされたら、非常におもしろい話を聞けて感激いたしました。特に私は、梅棹さんの時代から人文研の共同研究会に参加させていただいたんですけれども、谷さんが研究会を主催する一九七〇年代の半ば以降、非常に大きな変化があったことが今日の四人の方々の発表を伺ってはつきりしてきたと思います。そこで私が感じた特徴のひとつは、やはり梅棹さんがみんなばくを創設される以前のエクスペディションを中心とした人類学的な研究のありか

たですね。事実を通して客観的な知識を獲得していったわけですね。もうひとつは、いま議論になっている共同研究会という場において、認識の共有を非常に独特な形でつくりあげていったこと。

この二つが人類学的な研究の基盤になっていた。それは非常によくわかるんですけども、もうひとつ、近代的な人類学の研究の場がこういう形につくられてきたのと、たとえばヨーロッパの同じ近代人類学の場合とはかなり違っているんですね。たしかに一九世紀末に、ケンブリッジのトレス海峡の探検隊などが組織された時期は共同研究へのつながりは非常に強かったんですけども、フィールドワークに関しては基本的には人類学者はひとりですら出かけていくのが習性でありまして、むしろ共同的な活動を拒絶するような傾向が強い。それはマリノフスキーしかリヴィ・ストロスしかりで、そうした近代的な人類学の違い、特に梅棹さんの時代のエクスペディション中心の共同的な場における人類学研究と、ヨーロッパとの違いを感じるんですけども、どなたか、なぜ違うのかということをご説明いただけたらありがたいです。

それから人類学の研究において研究者の主體の作られ方が、やはり一九七〇年代後半以降とそれ以前ではかなり違っているんじゃないかということ、みなさんのお話を伺って感じました。また、自分たちとは違う外部の他者に対してどう理解して、知識を集積していくかという、そのスタイル、態度がかなり違ってきているんじゃないかということを感じました。はっきり言いました探検人類学の時代においては人類学のありかたが明確に主張されておりまして、かなり未来志向でありますし、楽天的な考え方が非常に強かったと思います。それが一九七〇年代以降、やはり変わってきた。そのへんはおそら

く佐藤さんが今日語ろうとしたことの一部であろうと思うんですけども、再確認するような答えがあればと思つて質問させていただきました。

田辺 まず日本の人類学と欧米の人類学の違いですね。日本の人類学はいわば自分が身体としてそこにあり、対象と相互行為を行うということを重視するという。しかし欧米ではむしろ、人類学者が認識主體として客體としての相手の本質をつかんで構造化して理解するといった方法があった。もうひとつは探検という方法が変わってきた。今西、梅棹両先生のように外に出かけて行って他者を見るというものではなくて、むしろ自分を含めた主體というものがどうやってできあがっているのだろう、人というのは空間のなかでどうやって関係性をつくり集団をつくって関係性、社会性をつくっていくんだろうという問いに、近代的な人類学の興味が移ってきたことですね。河合さんが発表の最後に現在の研究課題としておっしゃったような、主體のスタンス、といったものの問題性に関わる問題をご指摘くださったかと思ひます。この問題についてどなたかコメントをいただければと思います。

飯田 探検人類学の時代と後の時代という区分についてですけども、私自身の体験を振り返ると、二つを時期的に分けるのはむしろかしように思います。私自身は別の大学を卒業しまして、大学院の修士のときに京都に来て、創設されたばかりの人間・環境学研究所に入りました。そのときの指導教員は、いまASAFFAS（アジア・アフリカ地域研究研究所）の教育をしているアフリカ研究者たちで、指導教官は市川光雄さんでした。彼らは、当時から他大学の教員や学生たちとチームを組んでカメルーンやボツワナなどで研究していて、私もそのなかに入れたれそようになったのですが、なんとなく拒否反応が

あって、マダガスカルというフィールドを勝手に選びました。管理されるのが嫌だっただけかもしれない。せん。

けれどもいまになって振り返ると、ASAFFASの教員たちは単独行動する私をパルチザンとして受け入れてくれたように思います。目標はなんとなく共有しているけれども、行動は特に規制しない、そのかわりゼミではお互いの知見をぶつけ合わせるというわけです。それが自分の経験のなかで非常によかつたと思います。ですから明確一九七〇年代以降は探検方式だけでなくいろんなやり方の研究が可能になつていって、私はそのなかで組織行動のいいところと、単独行動のいいところをうまく受けとつたと思つております。

今日の発表に関する時期のことを調べるまで、エクスペディションというのは非常に統制が取れたものだと思つていたんですけども、実際にはそうじゃないという当時の記録のことも知りました。そこで、自分のエクスペディション観をもう一度考えなおしたほうがいいのかもしれないと感じて、今日のような発表を組み立てた次第です。

石毛 付け加えますと、六〇年代になつて文部省の科学研究費で海外調査費が出るようになります。しかしながらそれ以前は、企業をまわったり、あるいは新聞社に出してもらつたり、資金調達という面で、海外調査なんていうものはチームを組まなければできなかつたということがありました。さきほど事務局の話がありましたが、事務局で一番たいへんなのはやっぱりそういうお金集めのマネージメント、それから意識の共有は共同研究班だけではなく一般の人にも共有してもらえないように事業報告書を作らなくてはいけない。その報告書の作成というのが事務局のたいへんな仕事だった。

その他にですね、六〇年代は京都には人類学という講座もなかったし、日本国内でも東京で文化人類学という名前がちょっと知られるようになってきたぐらいの時代。そうしますと、共同研究をするこゝとによって人類学という学問の中に認知してもらいたい。そのためには個人プレーではなくて、共同研究みたいな形をとると、世の中にも説明がしやすいということもある。そういった共同研究を支える基盤みたいなのが現在と違っていた。そういった歴史的な背景も考えなきゃいけないと思います。

**田辺** それでは京大人文研の若い世代から、松嶋健さん一言ちょっとお願いできますでしょうか。

**松嶋** 私は京都大学の文化人類学講座が制度化されたから人類学を学びました。もともと子どものころからなにかすでに制度化されているものに対して本能的に拒否反応があるので、たとえばすぐ読みたい本でも、読まなければならぬものと指定されたときに読めなくなるとか、そういった人間なんですね。したがって人類学の研究室に入ったのは、自分としてはなにか真剣に学ぼうというよりは、一種の自由というか、なんにもしてないのは社会的にまじいので、とりあえずエクスキューズとして入ったという感じでした。

まことに不真面目な学生で、研究会にもそんなに生まれませんでしたし、あまりちゃんと勉強しなかったと思うんですけども、そのなかで自分の興味に従ってやっている、いろいろな人類学という枠組みを超えた友人を得ることができました。それは理系の人もいましたし、サル学をやっている人もいましたが、そういういろいろな人たちと個人的に勉強会とか研究会をしてきた経緯があります。

いまの私はイタリアの精神保健のことについて勉強しているんですけども、今年には人文研の研究者

という職を得ましたので、外に出て行って、人文研でイタリアのことを研究していますと言いますと、大先輩として谷さんや野村さんがいらっしやいますから、京大の正統な人類学を継承しているねというふうなことをいろんな人に言われるんですね。本人としては、ずっと異端と思ってやっていたんですけども、やっていると結局マージナルなところにいることによって、組織か個人かというとは別のつながりがいろいろもてるということがありました。

そういうところから考えてきた末に、私もやはり今日河合さんが報告しておられたような集団、集合性とか、制度という問題に行き着くようになったわけですね。それで今日四人の方の報告を聞いてはじめて気がついたのは、人文研の先輩方が追求してこられたような問いの系譜のはしっこに自分もいるんだなあということですね。

このことからあらためて、人間がなにかものを考えるということは、常に誰かとともに考えるということじゃないかと思っただけですね。我々は物心ついて以降、ものを考えるのは一人でできる、考えることは一人の行為であるというふうな考えがちですけれども、そうじゃなくてやっぱり、人間がものを考えるということと、人間が社会的な生き物であるというところは、たぶん一番本質のところであって、考えることは誰かとともに考えるということ、人間が存在しているということは、誰かとともにあるということ、というふうな考えるならば、共同研究というありかたそのものは京大の人文研だけに、あるいは京大の伝統にのみ特殊なことではないのかもしれない。

ただそこに、誰かとともに考えるための具体的な技術があるところが違うと思うんです。たとえば

さきほど谷さんがおっしゃったような、共同研究を實際やっていくなかでのひじょうに具体的な技術、みんなが自分のアイデアを出し惜しみしないように、トランスクリプトをちゃんと作るといったようなことです。そういった技術やコツを、それこそきちんと継承して、誰かと一緒に考える場を実際にもつとつとつていきたいと考えています。そこで先輩方のご経験のなかからもつと他にも、技法なりコツとなり、こういうときにはこういうふうなやり方といったお話をぜひお聞きしたいと思っています。

**田辺** 一緒にものを考えるための技術のようなものについて教えていただきたいということですが、どなたか先輩の方々からお願ひします。

私は大学は東京出身で、赴任前には京大のほうは集団主義だからたいへんだよと言われてたりしたわけなんですけれども、実際に来てみるとバルチザンのと飯田さんのおっしゃったような、面倒はみるんだけどほっといてやらせる、そしてオリジナリティあふれることをどんどんやらせる、というやり方だということがわかってきました。梅棹さんの言葉に、「団結は鉄よりも柔らかく、情けは紙よりもうすし」というものがありますが、まさにそんな感じですね。一緒にやるときはサポートもするけれども、あとは自分でやれという。そして、オリジナルなフールドデータや見解を出して、共同研究会でお互いにたたきあう。うまく個性をいかし、共同性なかに互いを鍛えあうというふうな気風をつくりだしてきたんですね。私も京都に来て一〇年余り、だんだん京都のよさというものを感ぜるようになってきた。

**谷** たぶん、関西、特に大阪や京都にはソフトに軽蔑する(笑)という気風があるんだと思います。傷つきやすい人は傷つきましますけれども、腹が立って、な

にくそつていうふうになりますね。ああいうことが比較的楽にできる世界がありました。それが技術とは思いません(笑)。

田辺 すばらしい人間関係ですね。

石毛 もうひとつ、比較というのがたいへん大事。誰かが共同研究会でしゃべったら、あなたの調べたところはそうだったけれども、俺の調べたところはこうだったという議論になる。べつに現地調査の話じゃなくてもいいのであって、ひとつのことについて、いろんな方面からたくさん意見を比較することをみんなができた。そうすると、その人がはじめ考えていたことがどんどん大きな話としてふくらんで、一般性をもった、あるいはそれがいかに他のところと特殊であるかといったことがわかる。常に比較の視点を持つておくのはたいへん大事なことだと思います。

田辺 個別、具体的なフィールドの知から共同研究のなかで比較をし、普遍的な知へと鍛え上げられていく方法をお話いただきました。

ちよつとここで京都大学内だけでなく、外から人文研を見た視点をお伺いしたいのですが、鈴木正崇さんお願いできませんか。

鈴木 私のおります慶應大学には専門の人類学コースはありません。ですから、人類学者は社会学や東洋史、民族学考古学などの専攻、あるいは諸言語に分かれて配置されています。京大とのつながりは、一見ほとんどないように見えるのですが、じつは長いつながりがあります。私になぜ人類学をやるようになったかという、私も山屋なんですね。今西錦司さんとは日本山岳会で仲良くなったんです。私にとって今西さんは「山岳省察」と「カラコラム」の人なんです。印象的なことは、ひとつは「群れ」ということばへのこだわりでした。それがキーワードなの

ですね。もうひとつは自然というか独特の空間認識があつてその背後にある世界を知りたいという願いがありました。それで今西さんときあつていました。

もうひとつの接点は、私は東京工業大学に七年間いました。そのときにいた先生方が、関西関東ミックスというか、つまり川喜田二郎とか、岩田慶治、飯島茂といった方々で、私はそこから独特の京都学派の影響を受けたように思います。研究テーマのひとつは進化、もうひとつはエコロジー、そして空間というように感じましたね。

それと慶應の人類学の歴史は意外と古くて、はじめて人類学の行われたのは、一九一九年の移川子之蔵によるものです。それから柳田國男が大学ではじめて民俗学という名前で講義したのも慶應です(一九二〇年)。そのきっかけは、松本信廣先生が、山岳会で山人の生活という話をお願いしたことだといえます。そのあたりの経緯からも、山というか、自然や宗教に関連したものと結びついていた。もともと自然人類学と文化人類学は一体だったんですね。それは戦前からの流れでフォークロアや人類学、考古学などが一体化した総合人類学ともいわれるものでした。慶應もおそらくその流れをひいていて、人類学とフォークロアを一緒にやっているという、最初に発表いただいた菊地晁さんのお話の流れを私自身も引き継いできました。

ですから、フォークロアとか宗教学に近いところであまり流行にこだわらない、持続する志を持った人類学が重要だったんですね。たとえば宗教学人類学とか、象徴人類学とか、いまはやや凋落気味だけれども、ひとつの地域を二〇年三〇年研究していれば、おのずから変化が見えてくるので、ひたすらその人ときあつていけばなにか見えてくる。信仰



みたいなどころもあるんですけども、おそらくそれは京都の人も同じで、繰り返し同じところに行つて二〇年三〇年つきあうことはすくなくいいことだと感じました。

**田辺** もうひとつかた、関東のほうから名和克郎さんお願いできますか。

**名和** 私は東京大学の東洋文化研究所におります。小さい研究所ですが京都大学の人文科学研究所とある意味パラレルな研究所で、こちらにも文化人類学運営単位というものがございまして、かつては泉靖一、中根千枝といった輝かしい先生方がおられました。私自身は人類学という学問に興味をもつたときに、梅棹先生の秘書の方の書かれた文庫本を読んで、大学の組織の外の研究会の討議が楽しそうだなと思つていたのですが、東京大学の文化人類学ではそうしたものはありませんでした。個人的な感想ですけども、東京で人類学の教育を受けてきた身からすると、京都には人類学の学派があるように思える。みんななんだかまったく異なることをされているんだけれども、そのなかになんとか共同のものがある。たとえば東京の人類学なり、東大系の人類学者が一つの学派を形成しているとはまったく思えません。今日の皆さんの発表を聞いて、京都の人類学のしくみというか、なぜそうなつたのかを学べたというふうにご考えております。

もうひとつ大きいのは、京都の人類学は人類学であるということがあります。さきほど田辺繁治さんが途中で変わったんじゃないかとおっしゃつていて、それは私にはわかりませんが、内堀基光という人類学者が一九八二年にこういうことを言つてるんですね。これは『現代思想』という雑誌に掲載された座談会での発言なんですが、要するにおもしろかつたら人類学者で、つまらなかつたら社会学者だと。

彼の真意はおそらく制度的な社会学を批判することではなくて、彼にとつて人類学とは人類そのものについて考える学問だということなのでしょう。〇〇社会をみて、なにか論じて、それでおしまいというのは、〇〇社会の社会学であつて、そのような研究を人類学と称するのはおかしい、人類学と名のる以上は、なんらかの形で人類につながる問題を志向していなければならぬ、という主張なんだと思ひます。

そのようなことを考えたときに、今日話題になつた進化という問題系であつたり、身体という問題系であつたり、あるいはコミュニケーションという問題系であつたり、京都の人類学、少なくともその最良の部分は常に人類学であり続けてきたと思ひます。今後どうなるかはわかりませんが、でも河合さんのお話を聞くと、現在進行形でそうあり続けているというふうな印象を受けました。なんだかうらやましいなという話で終わつてしまつて申し訳ないんですけれども、あとは研究者としてそれに対して何を書けるかが問題なので、感想としてはこれぐらいにしたいと思ひます。

**田辺** 人類学が人間とはなにかという根源的な問いをいろんな形で組織しながら問い続けてきたということは京都の大きな特徴だと思ひます。

最後に今日の報告者の方々、それからコメントーターの方々一言ずつお願ひしたいと思ひます。私も一言だけ申し上げたいんですけれども、私が京大の人類学のひとつの特徴にあげたいことは、空間性と身体性に非常に注目しているところではないかなと思ひます。身体をもつて、その場にあるということを出発点とする、しかしそれがスタティックにあるわけではなく、身体と身体、身体と物が出会つていくなかで関係性が生じ、それが変容していく。そ

こで歴史性、時間というものが生じていく。何をそこで身体として記憶し、言葉によつて記録していくか、そうした記憶装置のさまざまなものが制度として成立し、それが文明として育つていく。西洋的な、主体の発展の歴史を考へるいわばヘーゲル的なものとは違う、まず身体としてわれわれがあるというその場性というものを設定するということが、人間とは何かを見る上で、非常に京都的な視点のひとつだと思ひます。

そして、方法論としては自分自身が身体をもつた存在としてその場にあるという現場性を重視したフィールドワークをやつていく。そのなかから、さきほどアマチュアリズムという言葉も出ましたけれども、この世界は何なのか、人間とは何なのかという根源的な問いを發して、世界を記述し、それを共同研究という社会性、関係性の場にもつてきて鍛え上げるといふ制度をつくりあげてきた。自分が身体存在であるという、人類学における人間存在の根源的な条件性というものを引き受けつつ、人間社会がもつ集団性をうまく生かす形で新たな知を出していく。そうした知のパイオニア精神が京都の人類学の力というものなんじゃないのかな、と今日のお話を聞きまして、あらためて思ひました。

さて、今日のテーマは「人類学の誘惑」ということとでございます。さきほど出合い系と申し上げましたけれども、まさに私たちはここに一期一会で出会つたわけです。身体存在としてこの場にあるわけですね。ですからぜひこの場にいらつしやる特に若い方にむけて人類学はこんなにおもしろいよというよな誘惑の言葉をぜひお願ひしたいと思ひます。

**菊地** 私自身、人類学の勉強はしておりますが、人類学者であるかどうか、はたから見ると人類学者に見えるかどうかはなはだ謎でありますので、人類学

に誘惑する立場にふさわしいのかどうかよくわからない。そして今日のお話も人類学というより人類学史のお話をしたわけで、これが人類学のなかにあるのか外にあるのか、ちょっと考えどころでなかなか悩ましいんですけども、今日みなさんの報告を聞いていて、共同研究であつたり、いろんなプロジェクトをやつていくうえでの困難や課題は、非常に腑に落ちる話ばかりでたいへん勇気付けられる一日でした。

私が人文研にかれこれ一〇年近くもいるなかで最近感じているのは、やっぱり人類史というか、人類のナチュラリストリーという問題系のなかで自分を位置づけることが必要なんじゃないか、もしそれがあれば、他の分野の人とでも、あぁ人類史のこういうところをやつてのねつていうことでコミュニケーションができるのではないだろうかというところで、やっぱり今西、梅棹さんという方は大切だと感じています。人類学者にはいろいろ無体な人が少なくないといえども、人類に違いはないのだから、それを研究するのも人類学だと言つていいのではありませんか。そして人類学者がどう集まるのか、その離合集散というのが、たぶん今日話に出てきた集団論であるとか身体論といった問題系にもつながるはずですし、そういう意味で人類学史というものも人類学の広がりの中でそれなりに重要な対象であり、人類学者がフィールドで培った理論が本当に自分自身がいる場所でも通用するのかを試す重要なフィールドなんじゃないかな、と思つています。

飯田 人類学をやつていてよかつたなあと、ようやく最近思うようになってきました。その理由は、さきほどの話と関係しますが、個人単位で活動しつつ他の人からも授かることができるからです。他の学問もそうなのかもしれませんが、学問が制度

化すればするほど、分野のなかでの成功が優先されてしまう。人類学もまた、野村さんがおっしゃつたような大学自体の変化とともに、硬直化が進んでいると思ひますけれども、まだしも自由にやらせてもらえるというのが私の実感です。

それと、田辺さんがおっしゃいました「出会い系」は、世間では殺人事件のきっかけになつたりして問題が多いと思ひますけれども、人類学は、いい意味での出会いを私にもたらしてくれたと思ひます。人類学の話には、いろんな専門分野の人が加わつてきてくれます。そうした非常に恵まれた場を生かしながら、自分の学問を作ることが次の課題だと思つております。

佐藤 誘惑つていうのは、いいところを全部出しちゃつたら誘惑にならないわけで、基本的にチラリズムというのが誘惑ですから、これ以上あまりしゃべる必要はないかなと思ひますが、私としては今日ひさしぶりに大先輩の方々に会ひして、いまなお熱い鼓動を聞いたり、今日の他の方の発表を聞いたり、ディスカッションのなかでコメントをしてくださった方たちの話を聞くなかでまだまだこれからやることや考えることが山積していると思ひます。そういう意味ではこのあとの懇親会でいろんな方の話をききたいというのがいま、私の思つているところなんです。

そして最後にこういふた場を往来するということが大切で、準備がたいへんだつたと思ひますけれども、そういう意味では田中さんにお礼を言ひたいと思つています。

河合 今日サル学との共同研究をテーマにということでお話しましたが、最後にも申し上げたように、共同研究の相手がサル学である必然性はど

こにもないのかもしれない。制度という一般に還元する必要もないと思ひますし、逆に現代社会に生きるわれわれのきわめて現代的な課題にもつと引き込むのいいなと思ひます。

また、さきほど石毛さんがおっしゃつたような大きな問題を共同研究であつかつていく。そのことをいまいちど大胆に進めていくこともたいへんおもしろいことなんだろうと感じました。あるいは野村さんのおっしゃつていた相互性ということの重要性も考えていかなきゃいけないなといういろいろ考えさせられました。今回、「専門を横断して考える」というタイトルをあたえられたことで、あらためて共同研究の重要性を感じたということもあります。今後さまざまな工夫が必要だということも認識を新たにしました。

石毛 昔、私は考古学の学生でした。それがニューギニアの探検調査をさせてもらった時に、決意して私はもう考古学をよして人類学をやるんだ、と友人にいうとおまえもかつて言われたんです。だいたいひとつのことでちゃんと大成しないやつはみんな人類学者になると(笑)。そういう言い方もできるくらい、制度的な大学で学ばなくても誰でも人類学者になれる。つまり人類学的思考が必要だとかいわれますが、べつに特別な考え方があつたわけじゃない。たいへん常識的なものですし、人類学的な特別な方法論とか技術があるわけでもない。ですから大学で人類学を教える人は人類学科を出たほうがいいでしょうけれども、ただ自分が研究をするのだったら、ひとつの学問がある程度やつたあとで人類学をやると本当にすばらしい人類学者になれるんじゃないかと思ひます。

いつてみたら人類学は大人の学問。人間に関わることなんでも人類学できる。たとえば量子物理学

の社会人類学的研究というのもしようと思つたらできなわけじゃない。誰でもできますから興味のある方はどうぞ。

野村 石毛さんと以前イタリアを二、三週間旅行をしたことがあるんですが、石毛さんは毎食、食べる物全部記録するんですよ。写真も全部撮る。しかも一日四度も、いやーこれはすごいと思いました。私は記録カードを見ただけでゲップが出そうになる(笑)。そんな徹底的なフィールドワークをやつてこられたわけですけども、人文研を中心とした京都の人類学者にもひとつ弱いところがあると思うんですよ。それは自分の目で見て、耳で話を聞かなく信じないとか、文献を読んだだけじゃだめだとか、自分の目で見て確認することに徹底的にこだわるので、逆に見えないものの世界に弱いんですよ。

世の中、目に見えないものもいろいろあるわけです。そういうなかで岩田慶治さんが『草木虫魚の人類学』(淡交社、一九七三年)という本を書かれたというのはいさぐいことなんですよ。そこでは目に見えるものと見えないものが全然区別されてない。それでひとつの世界を作つていふことですけども、いまやわけのわからないメッセージがインターネットで飛び交う時代になってきて、また別の意味でのリアルが出現して、そういう世界の研究の必要性が出てきていると思います。ですから若い人たちも見えないものだけじゃなくて、見えないものも視野に入れながら調査を行つていただきたいと思ひます。

田辺 それでは最後に人文研にいまいらつしやる、そしてこのシンポジウムをオーガナイズされた田中雅一さんからお言葉をいただきます。

田中 長い間私たちの議論につきあつていただいて、ありがとうございます。このなかから何かひ

とつでもメッセージが届けばと思つております。自身シンポジウムを企画しながら、人文研はどこから来てどこにいくのかということも考えていたわけなんですけれども、今日のお話のなかで、かなり若い人とOBの人、あと野村さんの話にあつたようなプロフェッショナルを目指す人と、同時にアマチュアリズムに徹する人の出会いと交流の場としての人文研であり、共同研究の場というものが非常に重要ではないのかとあらためて感じました。

本日は、菊地さんの報告が主として戦前、飯田さんの報告が戦後の今西・梅棹時代の話、その後佐藤さんの報告が谷先生の時代以後の共同研究の性格と続き、お願いしたテーマはかならずしも歴史的な展開を意識したわけではなかつたのですが、順番に聞いていくとそのまま人文研の人類学の歴史が分かるようになっていたと思ひます。また最後の河合さんには、谷先生とほぼ同時代になる理学部人類との関わりについてお話いただくことで、人文研の人類学の広がりをはからずも教えていただいたと思ひます。菊地さんの言葉を借りればオルタナティブなはずじまりからオルタナティブな広がりをもつて本シンポジウムは終了すると言えます。もともと私の狙いは、身体、京都、辺境、横断と空間的な視点から徐々に外に広がっていくイメージで企画したのですが(この点で京都の人類学の性格を空間性と身体性に求めた田辺さんの指摘は鋭いと思ひます)、最初にお話していただくこうと考へていた佐藤さんの報告が専門的だと伺つたもので、あとに回しました。これが結果的に効を奏したことになります。なお、現在では同僚の竹沢泰子さんが人種をテーマに文理融合の視点から共同研究を精力的になされてることを補足しておきます。

谷先生が最初のごあいさつで記憶装置としての身

体と物の相違について述べられました(本冊子「巻頭のことば」を参照)ので、私も最後は記憶装置の話で終わりたいと思ひます。とはいえ、谷先生のような高尚な話にはならないことを最初にことわつておかなければなりません。

お話に何度か出てきた人文研の共同研究会の変化、あるいは私たち大学人を取り巻く変化の話で思ひ出したことは、私がここに入つたころは共同研究のあとに祇園に行くことが何度かありました。私が最初に共同研究会を主宰した時も、ある先生に連れて行つていただきました。そのとき故・大塚和夫さんが「あややっぱり京都つてすばらしい」と(笑)、非常に感動されていたことを思ひ出します。

その後も何度か祇園に足を運ぶ機会がありましたが、おもしろいのは、おかみさんというんですか、名刺を渡しますと肩書を見て「人文研の先生ですか」つて向こうからいるんことをしゃべりはじめるんですね。そのとき私が思つたのは、祇園という所はまさに人文研の外部記憶装置で(笑)、所内でのいろいろ発掘しても結局そこから出てくるものは限られている。それに対して祇園に行けば文字に残つていないオーラルな歴史の世界が存在する。それは菊地さんのご専門かと思ひますが、誤解を恐れずにあえて言わせていただくと、祇園はまさにもうひとつの人文研ではないかと私は考へています。

そういうわけで今日の話を伺いながら、私は「人類学の誘惑」もいけれども祇園の誘惑もいなど(笑)、次は京都祇園から発信する方向でまた一〇年後、二〇年後にみなさんとお会いできればと思ひます。これをもちまして京都大学人文科学研究所社会人類学部門創立五〇周年記念シンポジウム「人類学の誘惑」を終わらせていただきます。長時間どうもありがとうございます。



# 人文科学研究所社会人類学部門年表

※太字は社会人類学部門を主体とした事項

|      |   |  |  |   |      |      |
|------|---|--|--|---|------|------|
| 1965 |   | 『人類学研究』発刊<br>京都大学東南アジア研究センター設置   |  |   | 梅棹忠夫 | 石毛直道 |
| 1966 |   | <i>Kyoto University African Studies</i><br>第1巻刊行                           |  | 梅棹共同研究班「重層社会の人類学的研究」<br>(1966-69)   |      |      |
| 1967 |   | 京都大学霊長類研究所設置   | 第1次京都大学ヨーロッパ学術調査隊(隊長・桑原武夫)⇒『ヨーロッパの社会と文化』1977<br>京都大学大サハラ学術探検隊(隊長・山下孝介) |   |      |      |
| 1968 |   | 日本万国博覧会世界民族資料調査収集団<br>編成   | 京都大学アンデス学術調査隊(隊長・中島綿太郎)  |   |      |      |
| 1969 |   |  | 第2次京都大学ヨーロッパ学術調査隊(隊長・会田雄次)   | 梅棹共同研究班「文明の比較社会人類学的研究」(1969-1974)<br>藤岡共同研究班「現代における知識の意味」<br>(1969-1974⇒72より竹内成明、73より榊山敏一)                                    |      |      |
| 1970 | 大阪で日本万国博覧会開催<br>文芸春秋『現代の冒険』全8巻<br>巻公刊       | 『季刊人類学』創刊  |  | 梅棹共同研究班「アフリカ社会の研究」<br>(1970-1974)<br>梅棹共同研究班「理論人類学研究」<br>(1970-1974)  |      |      |
| 1971 |   |  |  |   | 松原正毅 |      |
| 1972 | 『朝日講座 探検と冒険』全<br>8巻公刊                       |  | 第3次京都大学ヨーロッパ学術調査隊(隊長・会田雄次)   |   |      | 野村雅一 |
| 1974 | 国立民族学博物館創設(館<br>長・梅棹忠夫)                     |  |  | 谷共同研究班「社会と文化の比較人類学的研究」(1974-75)<br>谷共同研究班「人類学における方法論的研究」<br>(1974-77)⇒『人類学方法論の研究』1979   | 谷 泰  |      |
| 1975 | 沖縄国際海洋博覧会開催                                 | 東一条に人文科学研究所新館落成  |  | 谷共同研究班「社会編成の比較人類学的研究」<br>(1975-78)  |      |      |
| 1976 |   |  |  |   |      | 松井健  |
| 1977 | 国立民族学博物館開館                                  |  | 予備調査ユーラシア西南部有畜農耕社会の<br>比較文化研究(代表・谷泰)                                   | 谷共同研究班「生活様式と関係行動」<br>(1977-80)  |      |      |
| 1978 |   |  | 第1次ユーラシア西南部有畜農耕社会の比<br>較文化研究(代表・谷泰)                                    |   |      |      |
| 1980 |   |  | 第2次ユーラシア西南部有畜農耕社会の比<br>較文化研究(代表・谷泰)                                    |   |      |      |
| 1981 | 神戸ポートアイランド博覧<br>会(ポートピア博)開催                 |  |  | 谷共同研究班「場面行動の通文化比較」(19<br>81-85)⇒『社会的相互行為の研究』1987  |      |      |
| 1982 |   |  | 第3次ユーラシア西南部有畜農耕社会の比<br>較文化研究(代表・谷泰)                                    |   |      |      |
| 1983 |   |  |  |   |      | 細川弘明 |
| 1985 |   |  | 青蔵高原揚子江源流域・唐古拉山脈学術登山<br>隊(隊長・松本征夫)⇒『遙かなる揚子江源<br>流』1987                 |   |      |      |
| 1986 |   | 京都大学アフリカ地域研究センター設置   |  | 谷共同研究班「民族誌の方法をめぐって」<br>(1986-90)⇒『文化を読む』1991  |      |      |
| 1988 |   |  |  |   | 田中雅一 | 藤田隆則 |
| 1990 | 大阪で国際花と緑の博覧会<br>(花博)開催                      |  |  | 田中共同研究班「儀礼的暴力の研究」(199<br>0-1994)⇒『暴力の文化人類学』1998   |      |      |
| 1991 |   |  |  | 谷共同研究班「コミュニケーションの自然<br>誌」(1991-1994)  |      |      |
| 1993 |   | 京都大学大学院人間・環境学研究科文化人<br>類学講座発足  |  |   |      |      |
| 1994 |   |  |  | 谷共同研究班「コミュニケーションの自然<br>誌Ⅱ」(1994-1997)⇒『コミュニケー<br>ションの自然誌』1997<br>田中共同研究班「主体・自己・情動構築の<br>文化的特質」(1994-1998)⇒『ミクロ人<br>類学の実践』2006 |      |      |
| 1996 |   | 近衛ロンドに代わり京都人類学研究会発会  |  |   |      |      |
| 1997 |   |  |  | 山路勝彦(客員)共同研究班「植民地主義と<br>人類学」(1997-2000)⇒『植民地主義と<br>人類学』2002   |      |      |
| 1998 |   |  |  |   |      | 小牧幸代 |
| 2000 |   | 人文科学研究所改組、西洋部と日本部が人<br>文学研究部となり、社会人類学部門は文<br>化研究創成研究部門人類誌分野(人文学<br>研究部)に改称 |  | 田中共同研究班「フェティシズム研究の射<br>程」(2000-2005)⇒『フェティシズム研<br>究第1巻』2009   |      |      |
| 2002 | 京都大学総合博物館で今西<br>錦司生誕100周年記念「今<br>西錦司の世界」展開催 |  |  |   |      |      |
| 2004 |   |  |  |   | 田辺明生 |      |
| 2005 |   |  |  | 田中共同研究班「フェティシズムの文化・<br>社会的脈絡」(2005-2006)  |      |      |
| 2006 |   |  |  | 田中共同研究班「複数文化接触領域の人文<br>学」(2006-2010)⇒『コンタクトゾーン』<br>2007~  |      |      |
| 2007 |   |  |  |   |      | 小池郁子 |
| 2008 |   | 人文科学研究所吉田本町へ移転   |  |   |      |      |
| 2009 |   | 人文科学研究所設立80周年<br>新制人文科学研究所設置60周年<br>社会人類学部門創設50周年                          |  |   |      |      |
| 2010 |   | 社会人類学部門創設50周年記念シンポジ<br>ウム開催  |  | 田中共同研究班「トラウマ経験の組織化を<br>めぐる領域横断的研究」(2010-2015)   | 石井美保 |      |

| 年代   | 日本と人類学関連の動き                  | 人文科学研究所関係の動き   | 関連のフィールド調査・探検   | 共同研究                                   | 歴代在職研究者 |
|------|------------------------------|--|---|--|---------|
| 1895 | 鳥居龍蔵 遼東半島調査                  |  |   |  |         |
| 1896 | 鳥居龍蔵 台湾調査                    |  |   |  |         |
| 1902 | 第一次大谷探検隊(1902-14)            |  |   |  |         |
| 1904 | 日露戦争開始                       |  |   |  |         |
| 1922 | 「西太平洋の遠洋航海者」、<br>「アンダマン島民」出版 |  |   |  |         |
| 1929 |                              | 東方文化学院設立   |   |  |         |
| 1930 |                              | 東方文化学院京都研究所開所  |   |  |         |
| 1931 | 画家土方久功のサタワル滞在(1931-38)       |  |   |  |         |
| 1933 | 澁澤敬三が立ち上げたアチック・ミュージアム新館竣工    |  |   |  |         |
| 1934 |                              | 水曜談話会(1934-38)<br>ドイツ文化研究所発足   | 第一次中国旅行団  |  |         |
| 1935 |                              |  | 華北石窟寺院調査  |  |         |
| 1936 | 第1回日本人類学会・日本民族学会連合大会開催       |  |   |  |         |
| 1938 |                              | 東方文化研究所に改名   | 内蒙古調査(隊長・木原均、今西錦司など)<br>雲岡石窟調査(水野清一、長広敏雄を中心に44年まで7回調査)  |  |         |
| 1939 |                              | 旧人文科学研究所設置<br>京都探検地理学会発会   | 内蒙古調査(今西錦司、森下正明など)<br>⇒「草原行」1946  |  |         |
| 1940 |                              |  | 探検地理学会榑太踏査(隊長・藤本武)  |  |         |
| 1941 |                              | 東方文化研究所が興亜院に移管、42年に大東亜省に移管   | ボナベ島調査(隊長・今西錦司)   |  |         |
| 1942 |                              |  | 北部大興安嶺探検(隊長・今西錦司)   |  |         |
| 1944 |                              | 中国・張家口に西北研究所設立   | 内蒙古調査(西北研究所所長・今西錦司)   |  |         |
| 1945 | 敗戦                           | ドイツ文化研究所が西洋文化研究所に改名  |   |  |         |
| 1946 |                              | 旧人文科学研究所改組、アジア部とアメリカ部の2部体制となる  |   |  |         |
| 1947 |                              |  | 奈良県平野村総合村落調査(今西錦司、梅棹忠夫など)   |  |         |
| 1948 |                              | 自然史学会発会(会長・今西錦司)、会誌「自然と文化」を発行  |   |  |         |
| 1949 |                              | 人文科学、東方文化、西洋文化の3研究所が統合され、新制人文科学研究所設置   | 京都山岳連盟屋久島踏査隊(隊長・今西錦司)   |  |         |
| 1950 |                              |  |   |  | 今西錦司    |
| 1951 |                              | 生物誌研究会発会   |   |  | 藤岡喜愛    |
| 1952 | 講和条約                         |  | 日本山岳会ネパール・ヒマラヤ学術調査(隊長・今西錦司)   |  |         |
| 1953 | 河出書房「世界探検紀行全集」(1953-55)      |  | 日本山岳会ネパール・ヒマラヤ学術調査  |  |         |
| 1955 |                              |  | 京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊(隊長・木原均、カラコラム支隊長・今西錦司)   |  |         |
| 1956 |                              | 京大探検部発足(芦田廣治部長、顧問に今西錦司、桑原武夫)<br>財団法人日本モンキーセンター発足   | 京都大学・バンジャブ大学合同東部ヒンズークシ探検隊(隊長・藤田和夫)<br>京都大学イラン学術調査隊(隊長・吉田光邦)<br>⇒「沙漠と高原の国」1975   |  |         |
| 1957 |                              |  | 京都大学・バンジャブ大学合同スワート・ヒマラヤ探検隊(隊長・松下進)<br>⇒「知られざるヒマラヤ」1958、<br>「スワート・ヒンズークシ紀行」1958<br>第1次大阪市立大学東南アジア学術調査隊(隊長・梅棹忠夫)<br>第1次東南アジア稲作民族文化総合調査(隊長・松本信広) | 今西共同研究班「豊長類におけるカルチュアとパーソナリティ」(1957-62) |         |
| 1958 |                              |  | 今西錦司、アフリカ類人猿調査開始  |  |         |
| 1959 |                              | 人文科学研究所に社会人類学部門創設  | 第1次京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊(代表・水野清一)、以後68年まで7次にわたって派遣⇒「京大イラン学術調査報告」1962-78  |  |         |
| 1960 |                              |  | 京都大学トンガ王国学術調査隊(隊長・荻内芳彦)⇒「トンガ王国探検記」1963<br>第2次東南アジア稲作民族文化総合調査  |  | 谷 泰     |
| 1961 |                              |  | 第1次京都大学アフリカ類人猿学術調査隊(隊長・今西錦司)⇒「アフリカ社会の研究」1968<br>第2次大阪市立大学東南アジア学術調査隊(隊長・岩田慶治)<br>京都大学探検部チモール島調査隊(隊長・中澤圭二)⇒「忘れられた南の島」1963                       |  |         |
| 1962 |                              | 京大理学部動物学教室に自然人類学講座創設、今西錦司が理学部教授を併任<br>京都大学アフリカ研究会発会  | 大阪市立大学・京都大学合同カンボジャ学術調査隊(隊長・石井健一)  |  |         |
| 1963 |                              | 文部省科学研究費補助金海外学術調査設置<br>第4次イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査(水野清一代表)、第2次アフリカ学術調査(今西錦司代表)の2件が京大から採択<br>京都大学東南アジア研究センター創設 | 第2次京都大学アフリカ学術調査隊(隊長・今西錦司)<br>京都大学ボルネオ学術調査隊(隊長・平野実)<br>京都大学西イラン学術探検隊予備踏査隊(主催は生物誌研究会、隊長・加藤泰安)⇒「ニューギニア中央高地」1977<br>第3次東南アジア稲作民族文化総合調査(隊長・川喜田二郎)  | 今西共同研究班「人類の比較社会学的研究」(1963-66最終年度は梅棹)   |         |
| 1964 | 海外渡航自由化<br>東京オリンピック          | 京都大学人類学研究会(近衛ロンド)発会  | 第3次京都大学アフリカ学術調査隊(隊長・今西錦司)   |  |         |

## あとがき

桑原武夫は「今西錦司論序説」(『人間—人類学的研究(今西錦司博士還暦記念論文集)』中央公論社、一九六六年)の冒頭につきのようなエピソードを紹介している。一九五年(大正四年)のことだ。桑原は父親に連れられて京都一中の運動会を見に行く。そこで銀閣寺までの往復マラソンが始まる。

父は私に、どの子が一等になるか、当てあいをしようと言った。私は選手たちを一順見わたし、「あの水色のパンツ」と答えた。他の競技が二、三おこなわれるうちに、観衆のどよめき、帰ってきたのだ。さうそうと決勝点に飛びこんだのは、やせ型の脚の形のよい、水色のパンツ。「一等、今西錦司!」

桑原が今西の名を知ったのは、これが最初だったという。

私たちは今西を先頭にこの五〇年間走り続けてきた。走者をこれまでに何人も替え、一団となって走り続けてきたのである。社会人類学部門は五〇年の節目を迎えたがそれはもちろん私たちが目指すゴールではない。通過点でしかない。そもそもゴールは二つではないと考えたほうがいい。私たちはすでに何度もゴールに飛びこんでいるのだ。「一等、〇〇君!」という声を何度も聞きながら走り続けてきたのである。ゴールに到達したと思っただけで、つぎの走者が走り始める。リレーのようなマラソンが理想かもしれないが、ゴールを待たないで勝手に走り始めたり休んだりする者もいる。個人ではなく「一等、〇〇研究班!」といった声が混じっていたり、残念ながら一等賞を逃したりする場合もあるかもしれない。しかし、私たちはなお走り続ける。

この冊子を読み、社会人類学部門・現人類誌分野のこれまでの研究活動や蓄積に共感をもたれたら、これから一〇年、二〇年、この「マラソン」をぜひ応援してほしい、そして一緒に伴走してほしい。いつか、あなたの耳に何度目かの「一等!」が聞こえることを信じて。

\*

本書の出版や記念シンポジウムの実現に当たっては多くの方にお世話になりました。まずこの冊子の実現に積極的に賛同し、発起人になられた当部門の大先輩梅棹忠夫名誉教授に感謝いたします。本書刊行前に他界され、手にとっていた

だくことができなかつたことをふたりの編者はたいへん残念に思っています。冊子の編集については編集工房 is の石川泰子さんとたいへんお世話になりました。石川さんの熱意がなければここまで素晴らしい冊子の実現は不可能でした。また、表紙を飾る美しい版画を制作していただいた田主誠画伯に感謝いたします。編集事務と記念シンポジウムの準備と運営について超人的な活躍をしてくれた飯塚真弓さん、どうもありがとうございました。飯塚さんの仲間の院生たちや人文研関係者など、ほかにもたくさんの方々に御協力いただきました。ここに感謝申し上げます。

二〇一〇年九月三日

田中雅一

表紙版画……………「過去・現在・未来」制作・田主誠

掲載図版について……………

書籍類以外の掲載図版・写真は原則、各原稿の執筆者の提供による。  
執筆者以外の提供写真については出典を左に記した。

12、15、17、18、31、49、62ページ上3点、64ページ左上・右上……………国立民族学博物館所蔵 梅棹忠夫コレクション

21ページ、25ページ中・下、63ページ左中・右中・右下……………和崎洋撮影 国立民族学博物館所蔵

7、8ページ、25ページ上……………国立民族学博物館所蔵

9、19、53、61、64ページ右下……………京都大学人文科学研究所所蔵

62ページ下……………カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊映画班撮影 国立民族学博物館所蔵

63ページ上……………富田浩造撮影

63ページ左下……………アフリカ学術調査隊映画班撮影 国立民族学博物館所蔵

64ページ左中・左下……………小林茂撮影 国立民族学博物館所蔵

# 人類学の誘惑

京都大学人文科学研究所社会人類学部門の五〇年

平成22年10月5日印刷

平成22年10月10日発行

編集……………谷泰・田中雅一

発行……………京都大学人文科学研究所

〒六〇六―八五〇―一 京都市左京区吉田本町

電話 〇七五―七五三―六九〇二

編集協力……………編集工房 is

レイアウト……………オルタナデザイン・アソシエイツ

印刷……………株式会社光陽社

# 人類学の誘惑

京都大学人文科学研究所社会人類学部門の五〇年

